

なが おき こ ふん ぐん
長 沖 古 墳 群 XI

—長沖14号墳・長沖15号墳・長沖40号墳・金屋南遺跡C地点の調査—

児玉南土地区画整理事業発掘調査報告書3

2012

本庄市教育委員会

序

本庄市が所在する埼玉県北部の児玉地方は、県内でも遺跡の宝庫として知られており、中でも古墳時代の集落跡や古墳などの遺跡が濃密に分布している状況は、古墳時代研究の好フィールドとして、県内外の多くの研究者から注目されているところです。特に古墳の数の多さは県内随一とも言われ、市内の長沖古墳群、秋山古墳群、旭・小島古墳群、大久保山古墳群をはじめとする多くの古墳群が、県の重要遺跡に選定されています。

このような当地方に住んだ先人達の生活や文化の痕跡である貴重な文化財を保護し、長く後世の人々のために伝えていくことは、今日の時代を生きる我々の重要な責務の一つであり、それらの文化財を考究して過去の歴史を紐解き、我々が生きる今の時代を見つめ直すことは、我々の子孫のためのより良い未来を築くための手掛かりとなるものです。

本書は、児玉南土地区画整理事業に伴って、平成17年度に調査を行った長沖古墳群の金屋南地区C地点の発掘調査の成果を記録したものです。C地点では、昭和51年度に周溝の一部が調査された長沖14号墳と15号墳の周溝の延長が検出され、両古墳の形態や規模をある程度明らかにすることができ、新たに調査した長沖40号墳は、石垣状に二段に積み上げられた墳丘と石室入口の前庭部が残存しており、当時の土木技術の一端をじかに見るなど、多くの貴重な成果を上げることができました。また、長沖14号墳の下から検出された縄文時代中期の住居跡群も、当地方では数少ない縄文時代の集落遺跡の調査例として注目されます。

本書が、学術的な研究資料としてはもとより、当地域の埋蔵文化財の保護や啓発・普及のため、研究機関や教育機関をはじめ地域住民の皆様の生涯学習の場で、多くの方々に広くご活用いただければ幸甚に存じます。

最後に、現地の発掘調査から出土品や記録類の整理及び報告書の刊行に至るまで、文化財の保護に対する深いご理解とご協力を賜りました関係各位に、心から感謝申し上げます。

平成24年 2月

本庄市教育委員会
教育長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市児玉町金屋字南に所在する、埼玉県選定重要遺跡「長沖古墳群」金屋南地区C地点の発掘調査報告書である。
2. 長沖古墳群に関する発掘調査報告書は、これまでに児玉町教育委員会・埼玉県埋蔵文化財調査事業団・本庄市教育委員会・本庄市遺跡調査会で刊行されており、本書は長沖古墳群の11冊目の報告書になることから、書名を『長沖古墳群XI』とした。
3. 発掘調査は、児玉南土地区画整理事業に伴う事前の記録保存を目的として、平成17年4月26日～平成18年1月20日の期間に実施した。
4. 発掘調査は、旧児玉町教育委員会が実施し、その調査担当には徳山寿樹があたった。
5. 本書中で使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1、本庄市発行の2千5百分の1の都市計画図である。
6. 遺構番号は、本報告書の刊行に際して『金屋南遺跡』（向出2010）からの通し番号に変更した。
7. 出土遺物の実測及び観察表の作成は(有)毛野考古学研究所に委託し、恋河内昭彦と鈴木徳雄が一部修正を加えた。
8. 出土遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。
A - 法量（単位はcm、g、カッコは推定）、B - 成形、C - 整形・調整、D - 胎土、材質、
E - 色調、F - 残存度、G - 備考、H - 出土層位・位置
9. 本書に掲載した写真は、遺構を各調査担当者が、遺物は磯崎勝人と恋河内が撮影した。
10. 本書の執筆及び編集は、恋河内が行った。
11. 発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や機関からご教示・ご協力を賜った。記して感謝します。
赤熊 浩一、岩瀬 譲、大谷 徹、金子 彰男、坂本 和俊、佐々木幹雄、篠崎 潔、
外尾 常人、田村 誠、瀧瀬 芳之、田中 広明、富田 和夫、中沢 良一、長滝 歳康、
中村 倉司、丸山 修、山崎 武
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

発掘調査組織

(平成17年度)

主体者	兄玉町教育委員会	
	教 育 長	富丘 文雄
事務局	社会教育課長	笠原 義晴
	課長補佐	倉林 益
	課長補佐	鈴木 徳雄
	文化財係長	恋河内昭彦
	主 任	徳山 寿樹 (調査担当)
	主 事	大熊 季広
	主 事	松澤 浩一

整理・報告書刊行組織

(平成23年度)

主体者	本庄市教育委員会	
	教 育 長	茂木 孝彦
事務局	事務局 長	関和 成昭
	文化財保護課長	金井 孝夫
	副参事兼課長補佐	鈴木 徳雄
	課長補佐兼埋蔵文化財係長	太田 博之
	主 幹	恋河内昭彦 (整理担当)
	主 査	大熊 季広
	主 査	松澤 浩一
	主 任	松本 完
	臨時職員	的野 善行

<長沖古墳群発掘調査報告書一覧>

- 1980 『長沖古墳群』 兄玉町文化財調査報告書第1集 兄玉町教育委員会
- 1999 『長沖古墳群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第224集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 2002 『長沖古墳群Ⅲ－村後地区・飯玉地区(C・D地点)－』 兄玉町文化財調査報告書第36集 兄玉町教育委員会
- 2003 『長沖古墳群Ⅳ－長沖42号墳の調査－』 兄玉町文化財調査報告書第37集 兄玉町教育委員会
- 2004 『長沖古墳群Ⅴ－飯玉地区E地点の調査－』 兄玉町文化財調査報告書第38集 兄玉町教育委員会
- 2006 『長沖古墳群Ⅵ－第32号墳の調査－』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第2集 本庄市教育委員会
- 2007 『長沖古墳群Ⅶ－久保地区B地点の調査－』 本庄市遺跡調査会報告書第14集 本庄市遺跡調査会
- 2008 『長沖古墳群Ⅷ－久保地区C地点の調査－』 本庄市遺跡調査会報告書第21集 本庄市遺跡調査会
- 2011 『長沖古墳群Ⅸ－長沖172号墳・長沖173号墳・長沖30号墳の調査－』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第24集 本庄市教育委員会
- 2011 『長沖古墳群Ⅹ－飯玉地区B地点の調査－』 本庄市遺跡調査会報告書第41集 本庄市遺跡調査会
- 2012 『長沖古墳群Ⅺ－長沖14号墳・長沖15号墳・長沖40号墳・金屋南遺跡C地点の調査－』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第27集 本庄市教育委員会

目 次

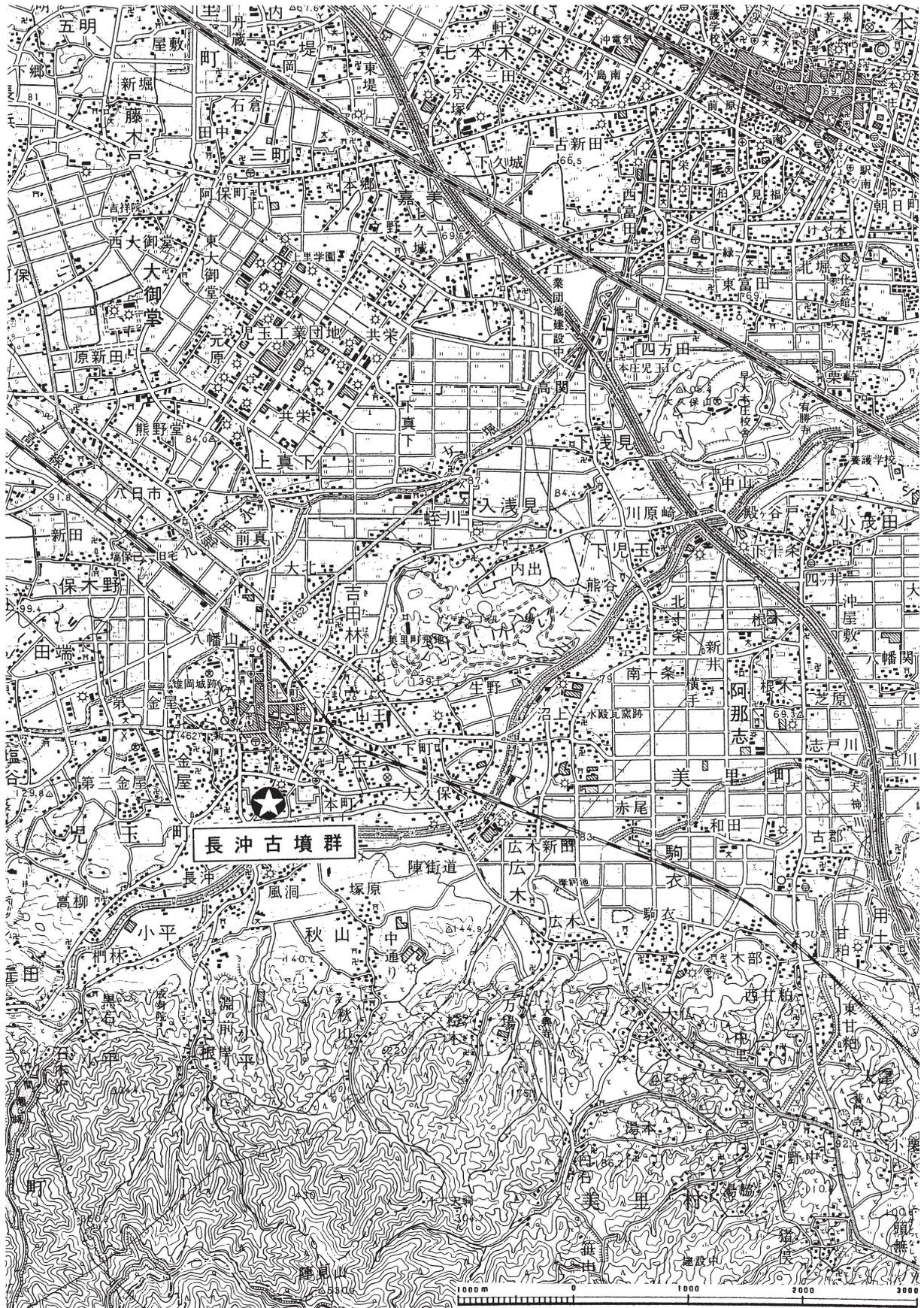
序

例 言

第 I 章	発掘調査に至る経緯	1
第 II 章	長沖古墳群の概要	3
第 III 章	長沖古墳群金屋南遺跡 C 地点の概要	6
第 IV 章	検出された遺構と遺物	8
	第 1 節 古 墳 跡	8
	長沖14号墳	8
	長沖15号墳	14
	長沖40号墳	29
	第 2 節 竪穴式住居跡	48
	第 1 a・1 b・1 c号住居跡	48
	第 2 a・2 b号住居跡	52
	第 3 号住居跡	57
	第 4 号住居跡	60
	第 5 号住居跡	61
	第 6 号住居跡	62
	第 7 号住居跡	63
	第 8 号住居跡	64
	第 3 節 土 坑	65
	第 4 節 調査区内出土遺物	75
第 V 章	ま と め	78
	<参考文献>	79

写 真 図 版

報告書抄録



第1図 遺跡の位置

第 I 章 発掘調査に至る経緯

本庄市児玉町の児玉・長沖・金屋・高柳の一部にかかる小山川(旧身馴川)左岸の広大な畑地帯に広がる長沖古墳群は、埼玉県的重要遺跡に選定されており、児玉地方はもちろんのこと、埼玉県を代表する古墳群の一つとして、全国的にも著名な遺跡である。この長沖古墳群が立地する畑地は、かつて養蚕が盛んであった時代はそのほとんどが桑畑として利用されていたが、古墳群の東側が旧児玉町の市街地に接していることもあって、高度経済成長期には古墳群内にも徐々に宅地化が進行していた。

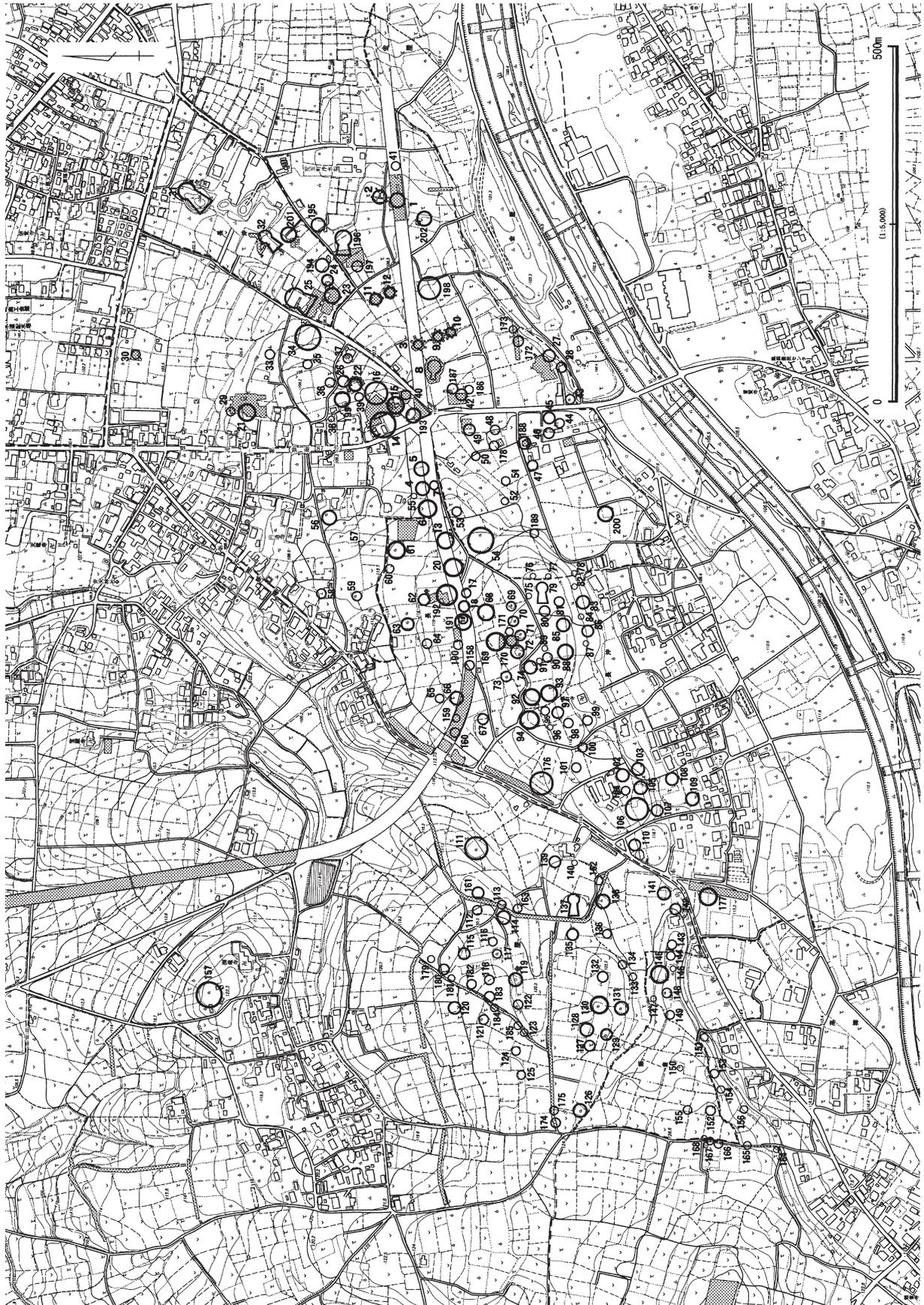
このような時代の推移による周辺の住環境の変化に応じて、昭和48年に長沖地区が第一種住宅専用地域に指定され、昭和49年度には現在の児玉支所(旧児玉町役場)前から小平に通じる野上・児玉線(県道187号線)より東側の約37haを対象とした「児玉南土地区画整理事業」が計画された。これに伴い児玉町と埼玉県教育委員会で事業地内の文化財の取り扱いについて協議が行われ、保存状態のよい前方後円墳とされる長沖31号墳と長沖32号墳の2基は、児童公園として現状保存し、他の古墳は発掘調査を実施して記録保存することになった(菅谷他1980)。

発掘調査は、昭和51年から昭和54年の五次にわたって一部墳丘が現存する古墳を主体に実施され、その成果は昭和55年に児玉町教育委員会により報告書が刊行されている(菅谷他1980)。その後、諸般の事情で事業は遅延していたが、平成になってバブル景気による都心部の狂乱的な地価高騰のあおりを受け、不動産売買や住宅建設に対する関心が高まる中で事業が本格的に再開され、年度毎の工事計画に合わせて調整しながら、発掘調査も引き続き行われるようになった。

今回報告する金屋南地区C地点は、事業地内の造成工事に伴って実施したもので、調査期間は平成17年4月26日から平成18年1月20日までである。



(2003年頃)



第2図 長沖古墳群古墳分布図（2011年現在）

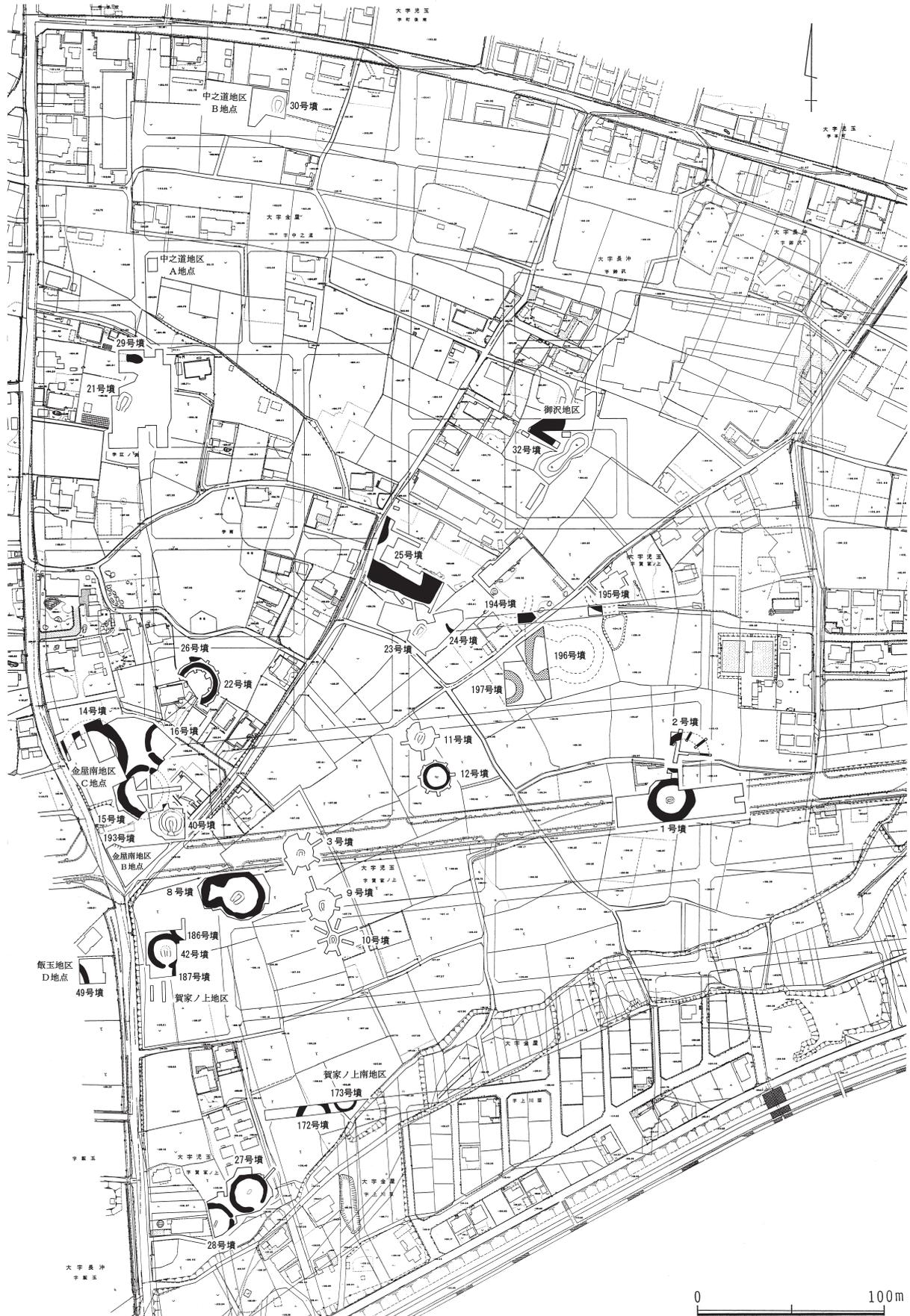
第Ⅱ章 長沖古墳群の概要

埼玉県的重要遺跡に選定されている長沖古墳群は、南側の上武山地内に源を発して北流する小山川(旧身馴川)が、山地内から平野部に出たあたりで、児玉丘陵の南側に沿って流路を北東方向から東西方向に変えた場所の左岸に立地している。その範囲は、東側の標高125mの丘陵部から、西側の丘陵先端下に広がる標高101m付近の氾濫原にかけて、東西約1700m、南北約500mの帯状に多数の古墳が分布している。古墳の数は、昭和55年(1980年)の段階では、前方後円墳5基(伝承の110号墳を含めると6基)を含む157基の古墳が知られていたが(菅谷他1980)、その後の試掘調査や発掘調査の進展により、平成22年(2011年)現在は前方後円墳7基を含む202基の古墳の存在が明らかになっている。

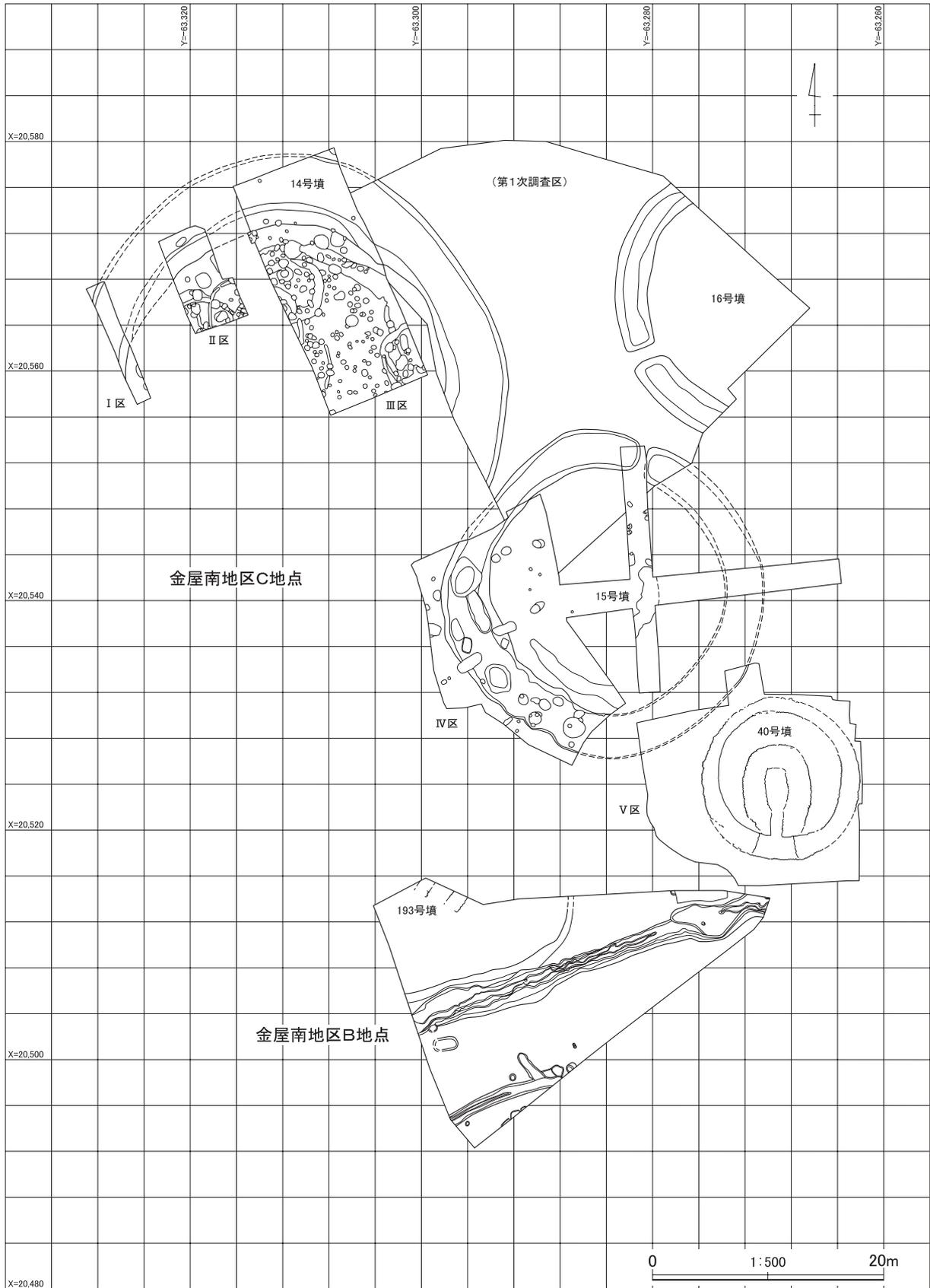
古墳群は、県道76号線(児玉金沢秩父線)に沿って丘陵内に深く湾入する谷によって、地形的に東西に大きく二分されている。かつては、この谷を境にして東側の高柳から金屋の丘陵部を主体に分布する一群を「高柳古墳群」、東側の長沖の丘陵部からその下の氾濫原にかけて分布する一群を「長沖古墳群」と呼称し、これらを総称して「高柳・長沖古墳群」と呼ぶことが提唱されたが(菅谷他1980)、両者は古墳の分布からも連続する一つの大古墳群として捉えるのが妥当と考えられ、現在ではこれらを総じて「長沖古墳群」と呼ぶことが一般化している。そして、かつての西側の高柳古墳群とした範囲を高柳支群、東側の長沖古墳群とした範囲を長沖支群と呼び変えている。

古墳群の形成は、現在までの調査の成果では、古墳時代中期の5世紀中頃に遡る。中期の古墳は、西側高柳支群では谷を挟んで北側の丘陵頂部に単独で存在する157号墳、東側長沖支群では丘陵尾根筋上に距離を置いて点在する34号墳と14号墳があり、中央部の54号墳も該期の可能性が高いとされている(菅谷他1980)。157号墳は、直径32mの大形円墳で、有黒斑のB種ヨコハケの円筒埴輪を伴っている。34号墳は、古墳はすでに削平されて不明であるが、野焼き焼成の一次タテハケ調整で突出した凸帯を持つ円筒埴輪を伴うようである。この次に続く14号墳は、周溝内径28mの大形円墳で、1段目・2段目にB種ヨコハケを持つ赤彩された野焼き焼成風の円筒埴輪と、1段目にタテハケと2段目にB種ヨコハケをもつ無黒斑の円筒埴輪の2種類のB種ヨコハケ円筒埴輪と、少量の形象埴輪も伴うようである(本報告)。後期の6世紀になると造墓活動は活発化し、直径10m～20m程度の円墳が多く作られ、有力古墳は5世紀の大形円墳から全長30m前後の前方後円墳に変わる。これらの前方後円墳は、その長軸方向を東西方向に向けるものと、北東方向に向けるものの2者があり、前者は高柳支群に1基(137号墳)、長沖支群西部に1基(十兵衛塚古墳：79号墳)、長沖支群東部南側に2基(8号墳、196号墳)が分布し、後者は長沖支群東部北側に3基(25号墳、31号墳、32号墳)が集中している。この現状における前方後円墳の分布からすると、当古墳群は後期には最低この4つの地域に大別されるようである。これらの前方後円墳は、6世紀後半には姿を消し、有力古墳の系譜は大形横穴式石室を持つ若干規模の大きな円墳に変わる。7世紀には小形の円墳が主流となり、有力古墳の差異化は墳形や規模から副葬品の優劣の違いに変わるようである。

古墳の主体部は、中期古墳は不明であるが、後期古墳は6世紀前葉には礫郭風や箱式石棺風の小竪穴式石室が主体で、中葉には袖無型横穴式石室が採用され、石室平面形の短冊型から笏型への変化も見られる。後葉には両袖型横穴式石室に変わり、7世紀には「毛野型胴張り形態」(金井塚1976)と呼ばれる石室平面形が徳利状や変形羽子板状の地域的特徴を持つ、模様積みの両袖型胴張横穴式石室となり、以後この石室の小型化と形骸化が進行する(大谷1999)。



第3図 児玉南土地地区画整理事業地内調査地点位置図 (2010年)

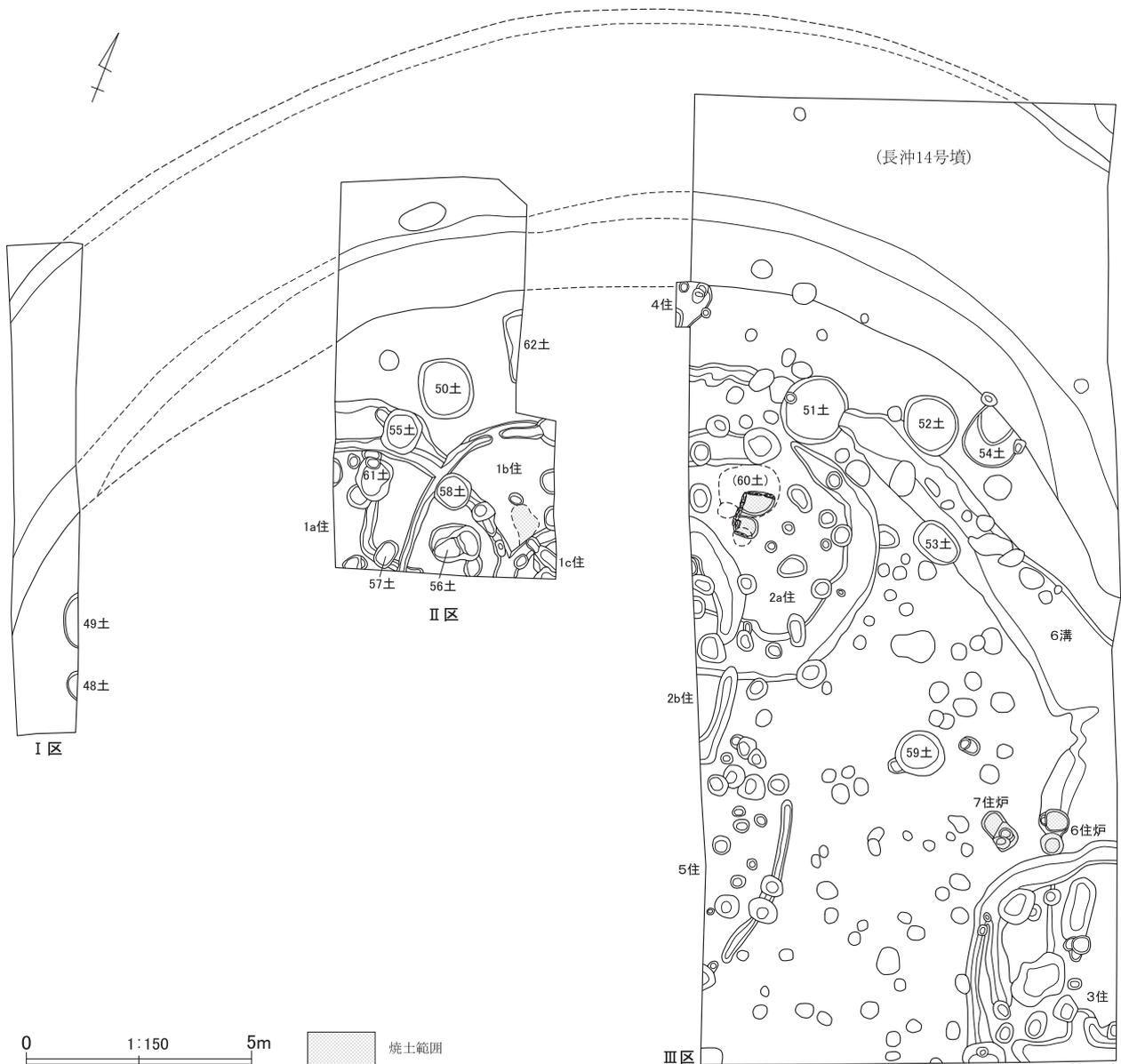


第4図 長沖古墳群金屋南地区C地点全体図

第Ⅲ章 長沖古墳群金屋南地区C地点の概要

今回報告する長沖古墳群の金屋南地区C地点は、長沖支群東側の南北方向に走る県道87号線(長瀬・見玉線)と東西方向に走る環状線が交差する交差点の北東側に隣接している。金屋南地区は、平成5年度に建売住宅建設に伴って調査した箇所(51番地4)をA地点(向出博之2010)、平成16年度に環状線建設に伴って調査した箇所(56番地1)をB地点とし、続いて平成17年度に区画整理事業に伴って調査した本地点をC地点としている。この他、昭和52年度に区画整理事業に伴って「金屋南集落跡」(埼玉県教育委員会1983)として調査された箇所(22番地)があるが、詳細は不明である。

金屋南地区C地点のI区～V区で検出された遺構は、古墳跡1基(長沖40号墳)、古墳周溝跡2基(長沖14・15号墳)、竪穴式住居跡及び住居炉跡10軒、土坑23基、溝跡2条である。V区の長沖40号墳は、墳丘直径14m程度の円墳で、当地域特有の模様積みによる胴張横穴式石室を持つ古墳である。墳丘の大半はすでに削平されていたが、北東方向に延びる台地尾根筋の南側の谷に面する斜面下の黒色



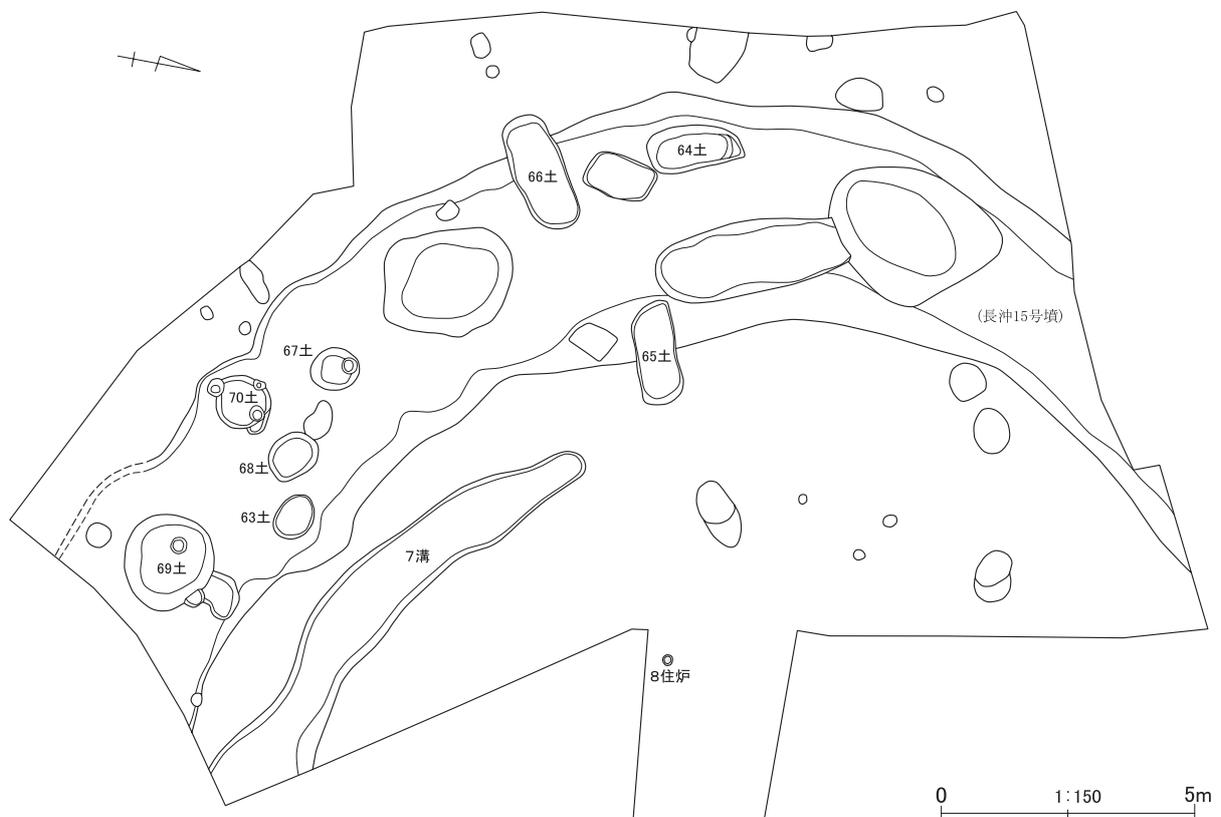
第5図 金屋南地区C地点I～Ⅲ区遺構配置図

土上に築造されていたため、墳丘の南側下部を主体とする二重に巡る石垣状の葺石や石室前庭部が埋没していた。遺物は、石室内から刀装具や鉄鎌・耳環などの金属製品や100個以上のガラス製小玉が出土している。長沖14号墳と長沖15号墳は、第1次調査区(菅谷他1980)の西側に隣接するⅠ区～Ⅲ区とⅣ区で、それぞれ第1次調査区の周溝跡の延長が検出され、それにより長沖14号墳が周溝内径28m、長沖15号墳が周溝内径19.40mの円墳と考えられるようになった。遺物は、いずれも周溝内から埴輪の破片が出土しており、長沖14号墳がB種ヨコハケをもつ円筒埴輪と形象埴輪の破片、長沖15号墳がタテハケをもち底部未調整の円筒埴輪と形象埴輪を伴っている。

竪穴式住居跡と住居炉跡は、主にⅡ区とⅢ区から検出されている。時期は、縄文時代中期中頃～後半の勝坂3式～加曾利E3式に及ぶもので、勝坂3式が3軒(1a住・1b住・2b住)、加曾利E1式が2軒(2a住・3住)、加曾利E2式が2軒(4住炉・8住炉)、加曾利E3式が2軒(6住炉・7住炉)、不明1軒(5住)である。住居の全容が分かるものはないが、第3号住居跡や炉だけのもの以外は、比較的円形を基調としているものが多いようである。

土坑は、Ⅰ区～Ⅳ区で検出されており、時期はⅠ区～Ⅲ区のもものが縄文時代中期後半、Ⅳ区のもものが古墳時代後期以降を主体にしている。出土遺物が少なく、土坑の性格が分かるものはほとんどないが、縄文時代中期後半のものでは、第50号土坑で東北地方の大木8a式の系譜を引く土器片が複数出土し、第60号土坑は炉体土器のような口縁部だけの大形の深鉢を逆位に埋設している。

溝跡は、Ⅲ区の第6溝跡とⅣ区の第7号溝跡が検出されている。いずれも古墳周溝跡の内側に沿って巡るもので、後世の開墾等による墳丘の削平に伴って掘削されたものであろう。



第6図 金屋南地区C地点Ⅳ区遺構配置図

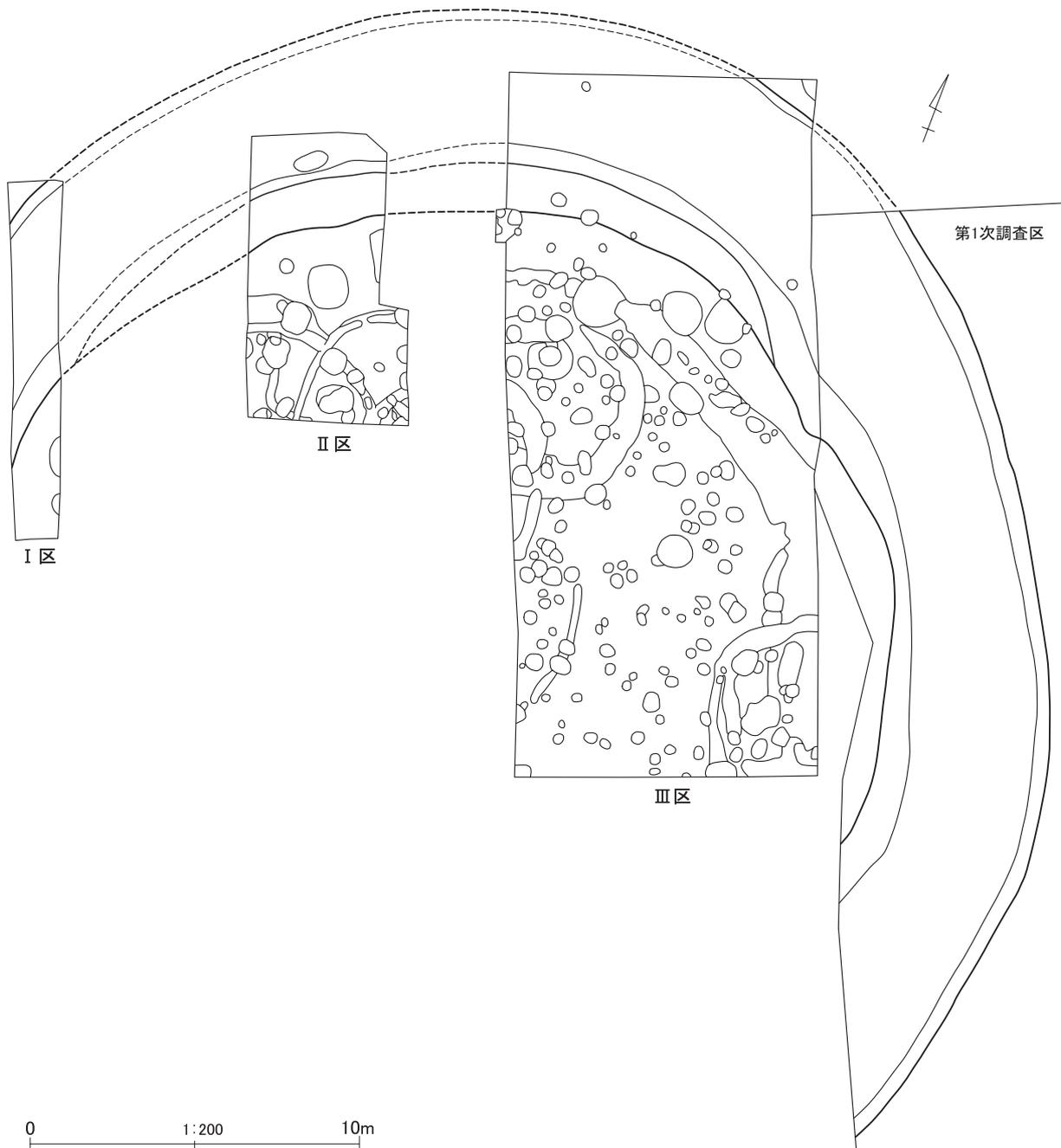
第Ⅳ章 検出された遺構と遺物

第Ⅰ節 古墳跡

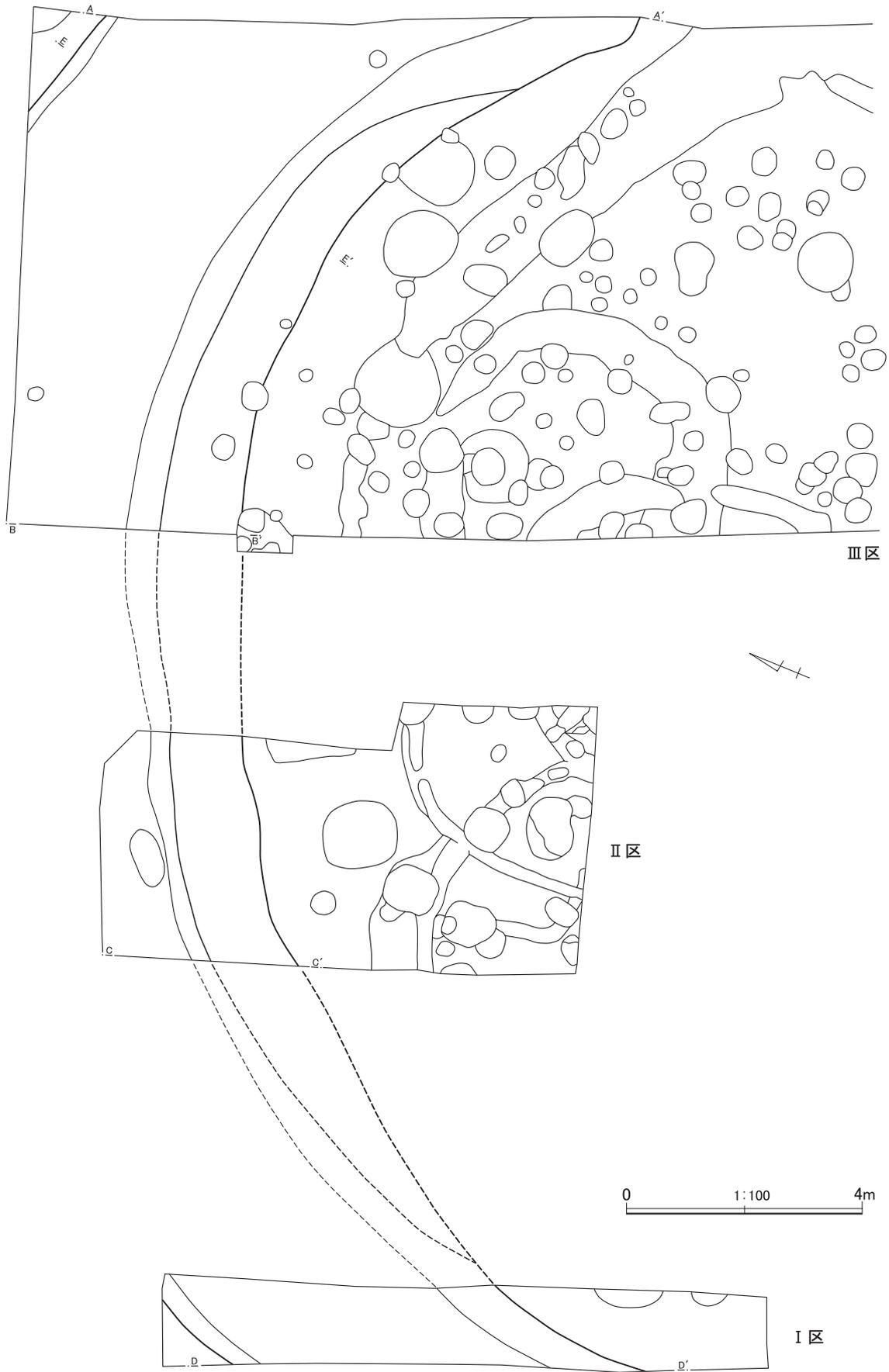
長沖14号墳（第7図、図版1）

北東方向に延びる丘陵尾根筋上の標高110mを測る平坦部に立地し、東側には長沖16号墳、南東側には長沖15号墳が近接している。本古墳の北側隣接地の大字金屋字南54番地は、戦前に大場磐雄や後藤守一が紹介した児玉町天竜寺所蔵の家形埴輪が出土したとされる場所であり（大場1931、後藤1931）、おそらく6世紀代の古墳が所在したと思われる。

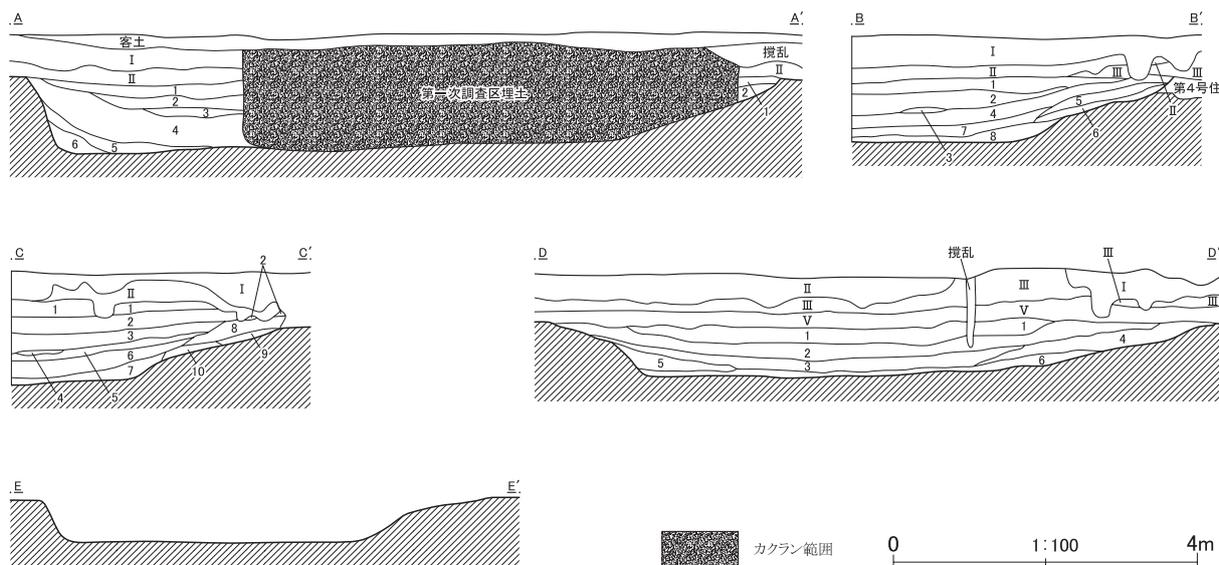
本古墳は、これまで規模が周溝内径 34mと推測されていたが（菅谷他1980）、今回の第1次調査区



第7図 長沖14号墳全体図



第8図 長沖14号墳周溝跡



第9図 長沖14号墳周溝土層断面図

長沖14号墳周溝土層説明

<A-A'>

- 第I層：暗褐色土層（現表土。浅間山系A軽石を含む。）
- 第II層：暗褐色土層（若干の砂利、微量の小礫を含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第1層：褐色土層（ローム粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第2層：黒色土層（ローム粒を微量含む、しまり、粘性共に有するがやや弱い。）
- 第3層：黒褐色土層（浅間山系B軽石を均一に含み、一部凝集が見られる。しまり、粘性共に有するがやや弱い。）
- 第4層：黒色土層（ローム粒を極微量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第5層：暗茶褐色土層（ローム粒を多量に、ロームブロックを少量含む。しまりを有し粘性は強い。）
- 第6層：暗黄褐色土層（ローム粒、ロームブロック主体の層。YPを若干混入する。しまり、粘性共に強い。）

<B-B'>

- 第I層：暗褐色土層（現表土。）
- 第II層：暗褐色土層（組成は表土に近いが浅間山系A軽石の含有量が少ない。）
- 第III層：明黒褐色土層
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒、炭化物粒を微量含む。少々ザラついており、しまり、粘性共に有する。）
- 第2層：黒褐色土層（ローム粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第3層：黒褐色土層（浅間山系B軽石を多量に含む。一部凝集が見られる。しまり、粘性共に有する。やや粒状感が多い。）
- 第4層：黒色土層（ローム粒を微量含む。ややザラついており、しまりを有し粘性はやや強い。）
- 第5層：黒色土層（ローム粒を少量、暗黄色粘質土のブロックを微量含む。しまり、粘性共に強い。）
- 第6層：明黒褐色土層（ローム粒、ローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第7層：暗茶褐色土層（ローム粒、ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第8層：暗黄褐色土層（ローム粒、ロームブロック、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性共に強い。）

<C-C'>

- 第I層：暗褐色土層（攪乱。瓦礫を多量に含む。）
- 第II層：暗褐色土層（攪乱。浅間山系A軽石を多量に含む。）
- 第III層：茶褐色土層（浅間山系A軽石を多量にローム粒を少量含む。しまりはあるが、粘性は弱い。）
- 第IV層：明黒褐色土層（ローム粒を微量含む、暗褐色土を若干混入する。しまり、粘性共に有する。）
- 第V層：暗茶褐色土層（明褐色土と黒色土を若干混入する。しまり、粘性共に有する。）
- 第VI層：暗茶褐色土層（白色粒子を微量含む、黒褐色土を斑点状に若干混入する。しまり、粘性共に有する。）
- 第1層：暗茶褐色土層（ローム粒を均一に、小礫、白色粒子を微量含む。しまりを有するが粘性はやや弱い。）
- 第2層：明黒褐色土層（ローム粒を少量、白色粒子を微量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第3層：黒褐色土層（白色粒子を微量含む、暗褐色土を若干混入する。しまり、粘性共に有する。）
- 第4層：黒褐色土層（浅間山系B軽石を多量に含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第5層：黒色土層（白色粒子を極微量含む。粒状感が強く、しまり強く、粘性を有する。）
- 第6層：黒色土層（白色粒子を微量含む、ローム風化土をブロック状に若干混入する。しまり、粘性共に強い。）
- 第7層：暗黄灰褐色土層（ローム粒、ロームブロックを少量含む、黒褐色土を少量混入する。しまり、粘性共に強い。）

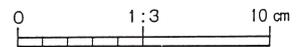
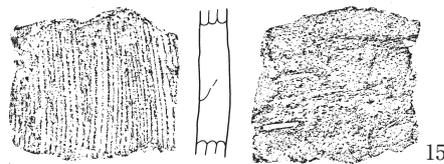
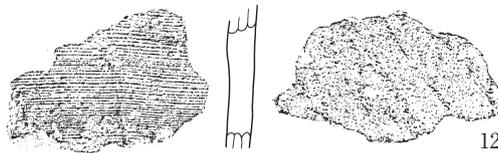
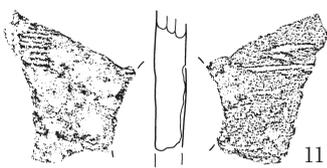
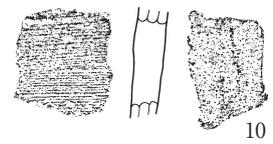
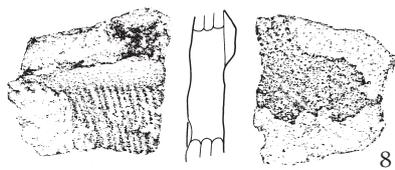
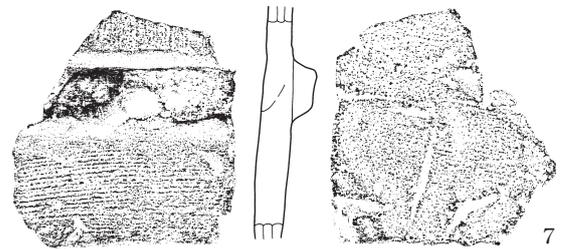
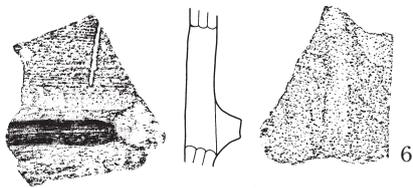
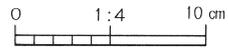
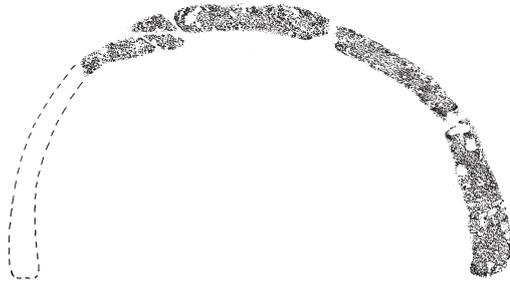
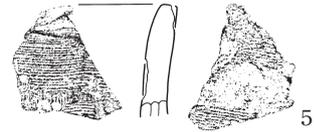
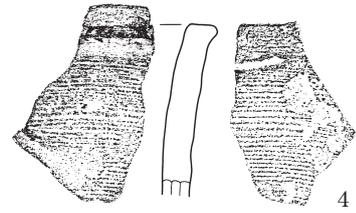
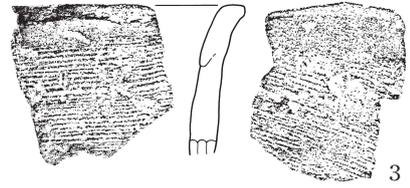
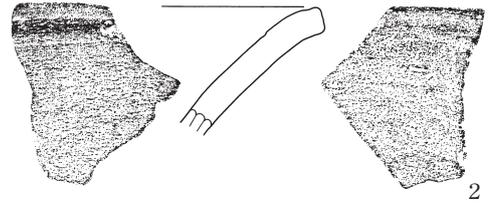
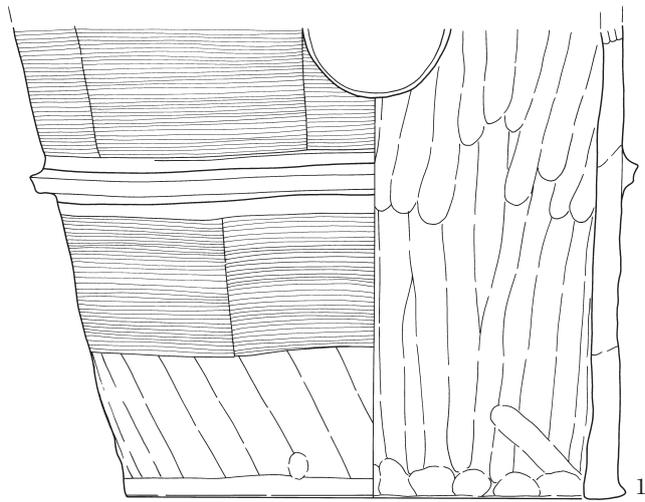
- 第8層：黒褐色土層（ローム粒を少量、ロームブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）
 第9層：暗黄褐色土層（ローム粒、ロームブロックを多量含み、ローム風化土を混入する。しまり、粘性共に有る。）
 第10層：暗黄褐色土層（ローム粒、ロームブロックを均一に含み、黒褐色土を混入する。しまり、粘性共に有する。）
 <D-D'>
 第Ⅰ層：暗褐色土層（礫を多量に含む。）
 第Ⅱ層：暗褐色土層（Ⅰ層にはほぼ同じだが、礫の量が多い。）
 第Ⅲ層：暗褐色土層（現表土。浅間山系A軽石を均一に含む。）
 第Ⅳ層：暗茶褐色土層（浅間山系A軽石、ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有するが弱い。）
 第Ⅴ層：暗茶褐色土層（ローム粒、小礫を微量含む。しまりを有するが粘性はやや弱い。）
 第Ⅰ層：明黒褐色土層（暗褐色土を斑点状に若干混入する。一部耕作地の可能性有。しまりを有するが粘性は弱い。）
 第Ⅱ層：黒褐色土層（ローム粒を微量含む。しまりを有するが粒状感が強く、粘性は弱い。）
 第Ⅲ層：黒褐色土層（ローム粒、ローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性共にやや強い。）
 第Ⅳ層：明黒褐色土層（ローム粒を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に強い。）
 第Ⅴ層：茶褐色土層（ローム粒、ローム小ブロックを均一に、炭化物粒を極微量含む。しまり、粘性共に強い。）
 第Ⅵ層：暗黄褐色土層（ローム粒、ロームブロックを多量に炭化物粒を少量含み、ローム風化土を若干混入する。しまり、粘性共に強い。）

の西側に隣接するⅠ・Ⅱ・Ⅲ区の調査で、周溝内径28m、周溝外径約38mの規模を持つ円墳の可能性が高いことが明らかになった。墳丘や主体部の痕跡は見られなかった。検出された北側の周溝は、規模がわかる所では上幅が4.80m・下幅が4.00m、確認面からの深さが60cm～80cmあり、ほぼ均一な形態で円形に巡っているようである。断面の形態は、幅広の台形を呈し、壁は直線的であるが、外側に比べて内側の方が緩やかに傾斜している。底面は、広く平坦である。

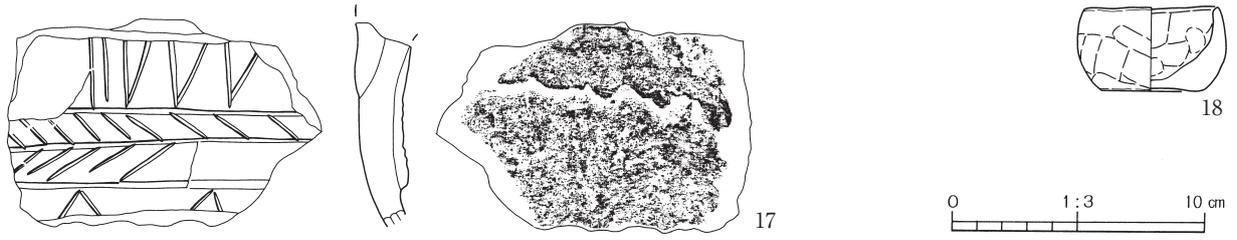
出土遺物は、周溝覆土中や調査区内から、円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪の破片や土器が少量出土している(第10・11図)。円筒埴輪は、大半がB種ヨコハケ調整を施すものであるが、第1段目にヨコハケを施すもの(第10図No1)と第1段目がタテハケのもの(第12図No3)の2者がある。このうち、前者のⅠ区から出土したやや大形の第10図No1は、焼成前に半裁された焼きむらのあるもので、埴輪棺等の蓋に利用されたものではないかと思われる。朝顔形埴輪の第10図No2は、第1次調査区から出土した第12図No1と同じ作りのものである。形象埴輪は、調査区内から1片出土している(第11図No17)。表面に綾杉文を施した横位沈線区画の上下に鋸歯状の文様を施したもので、盾形などの可能性が考えられる。土器は、Ⅲ区周溝内から一般集落ではあまり見られない小形の坏(第11図No18)が出土しているが、第1次調査区の周溝内からは、5世紀中頃から後半の直口壺や土師器甕の破片が出土している(第12図No4・5)。

長沖14号墳出土遺物観察表

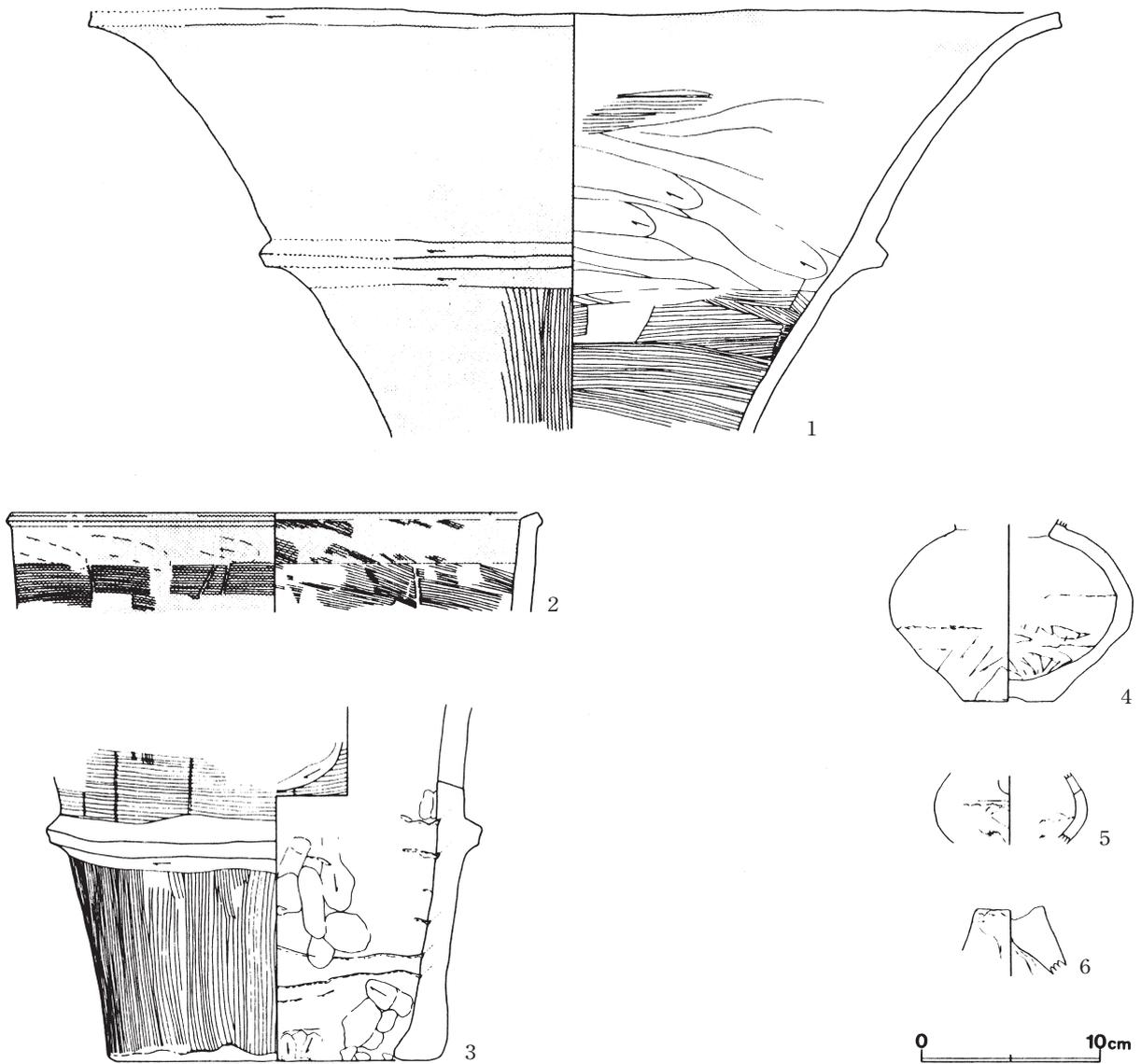
1	円筒埴輪	A.残存高25.2、底部径(26.2)、1段高17.7。B.粘土紐積み上げ。凸帯貼り付け。C.外面ナデの後B種ヨコハケ。内面ナデ。D.黒色粒、白色粒、チャート。E.外-にぶい黄橙色、内-にぶい橙色。F.1段～2段下位1/4。G.外面2段に赤色塗彩。焼成前に半裁。H.Ⅰ区内。
2	朝顔形埴輪	A.残存高7.1。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.黒色粒、チャート。E.内外-にぶい黄橙色。F.口縁部片。G.外面に赤色塗彩。H.Ⅲ区周溝内。
3	円筒埴輪	A.残存高6.0。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。外面ヨコハケ。内面ナメハケ。D.黒色粒、チャート。E.内外-にぶい黄色。F.口縁部片。H.Ⅲ区。
4	円筒埴輪	A.残存高6.9。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。内外面ヨコハケ。D.黒色粒、チャート。E.外-にぶい黄褐色、内-橙色。F.口縁部片。G.外面に赤色塗彩痕。H.Ⅱ区。
5	円筒埴輪	A.残存高4.4。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。外面タテハケ後に二次ヨコハケ。内面ナメハケ後ナデ。D.黒色粒、チャート。E.内外-にぶい黄橙色。F.口縁部片。G.内外面に赤色塗彩。H.14号墳調査区内。
6	円筒埴輪	A.残存高4.3。B.粘土紐積み上げ。凸帯貼り付け。C.外面ヨコハケ。内面ナデ。凸帯ヨコナデ。D.黒色粒、チャート。E.外-灰黄褐色、内-にぶい黄橙色。F.胴部片。G.外面に線刻。H.Ⅰ区。



第10図 長沖14号墳出土埴輪(1)



第11図 長沖14号墳出土埴輪・土器（2）



第12図 長沖14号墳第1次調査区出土遺物（菅谷他1980より）

7	円筒埴輪	A.残存高9.4。B.粘土紐積み上げ。凸帯貼り付け。C.外面タテハケ後、二次ヨコハケ。内面ヨコハケ後ナデ。凸帯ヨコナデ。D.黒色粒、チャート。E.外-明黄褐色、内-にぶい黄橙色。F.胴部片。H.Ⅲ区。
8	円筒埴輪	A.残存高5.6。B.粘土紐積み上げ。凸帯貼り付け。C.外面タテハケ。内面ナデ。凸帯ヨコナデ。D.黒色粒、白色粒、チャート。E.外-浅黄色、内-にぶい黄褐色。F.胴部片。H.Ⅲ区周溝内。
9	円筒埴輪	A.残存高4.4。B.粘土紐積み上げ。凸帯貼り付け。C.外面ヨコハケ。内面ヨコハケ後ナデ。凸帯ヨコナデ。D.黒色粒、チャート。E.外-浅黄橙色、内-にぶい黄橙色。F.胴部片。H.Ⅲ区周溝内。
10	円筒埴輪	A.残存高4.5。B.粘土紐積み上げ。C.外面ヨコハケ。内面ナデ。D.黒色粒、チャート。E.内外-にぶい黄橙色。F.胴部片。G.外面に赤色塗彩痕。H.Ⅲ区周溝内。
11	円筒埴輪	A.残存高5.7。B.粘土紐積み上げ。C.外面ヨコハケ。内面ナデ。D.黒色粒、チャート。E.外-にぶい黄橙色、内-にぶい黄褐色。F.胴部片。H.Ⅲ区周溝内。
12	円筒埴輪	A.残存高5.7。B.粘土紐積み上げ。C.外面B種ヨコハケ。内面ナデ。D.黒色粒、チャート。E.内外-橙色。F.胴部片。G.外面に赤色塗彩。H.Ⅲ区。
13	円筒埴輪	A.残存高3.5。B.粘土紐積み上げ。C.外面ヨコハケ。内面ヨコハケ後ナデ。D.黒色粒、チャート。E.内外-にぶい黄橙色。F.胴部片。G.外面に赤色塗彩。H.Ⅲ区。
14	円筒埴輪	A.残存高4.5。B.粘土紐積み上げ。C.外面タテハケ後に浅いヨコ・ナナメハケ。内面ヨコ・ナナメハケ後に一部ナデ。D.黒色粒、チャート。E.内外-にぶい黄橙色。F.胴部片。G.外面に赤色塗彩。H.Ⅲ区周溝内。
15	円筒埴輪	A.残存高5.9。B.粘土紐積み上げ。C.外面タテハケ。内面ナデ。D.片岩粒、チャート。E.内外-にぶい黄橙色。F.胴部片。H.Ⅲ区。
16	円筒埴輪	A.残存高3.7。B.粘土紐積み上げ。C.外面タテハケ。内面ヨコ・ナナメハケ。D.黒色粒、白色粒、チャート。E.内外-にぶい黄橙色。F.胴部片。G.外面に赤色塗彩痕。H.14号墳調査区内。
17	(盾形埴輪)	A.残存高8.2。B.粘土紐積み上げ。C.外面ナデの後、篋描による鋸歯文と矢羽根状の文様を施す。内面ナデ。D.黒色粒、白色粒、チャート。E.内外-橙色。F.盾面の一部か。G.外面に赤色塗彩。H.14号墳調査区内。
18	小形坏	A.口縁部径5.4、器高3.4、底部径4.0。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面篋ナデ。底部外面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外-明赤褐色。F.完形。H.Ⅲ区周溝内。

長沖15号墳（第13図、図版2・3）

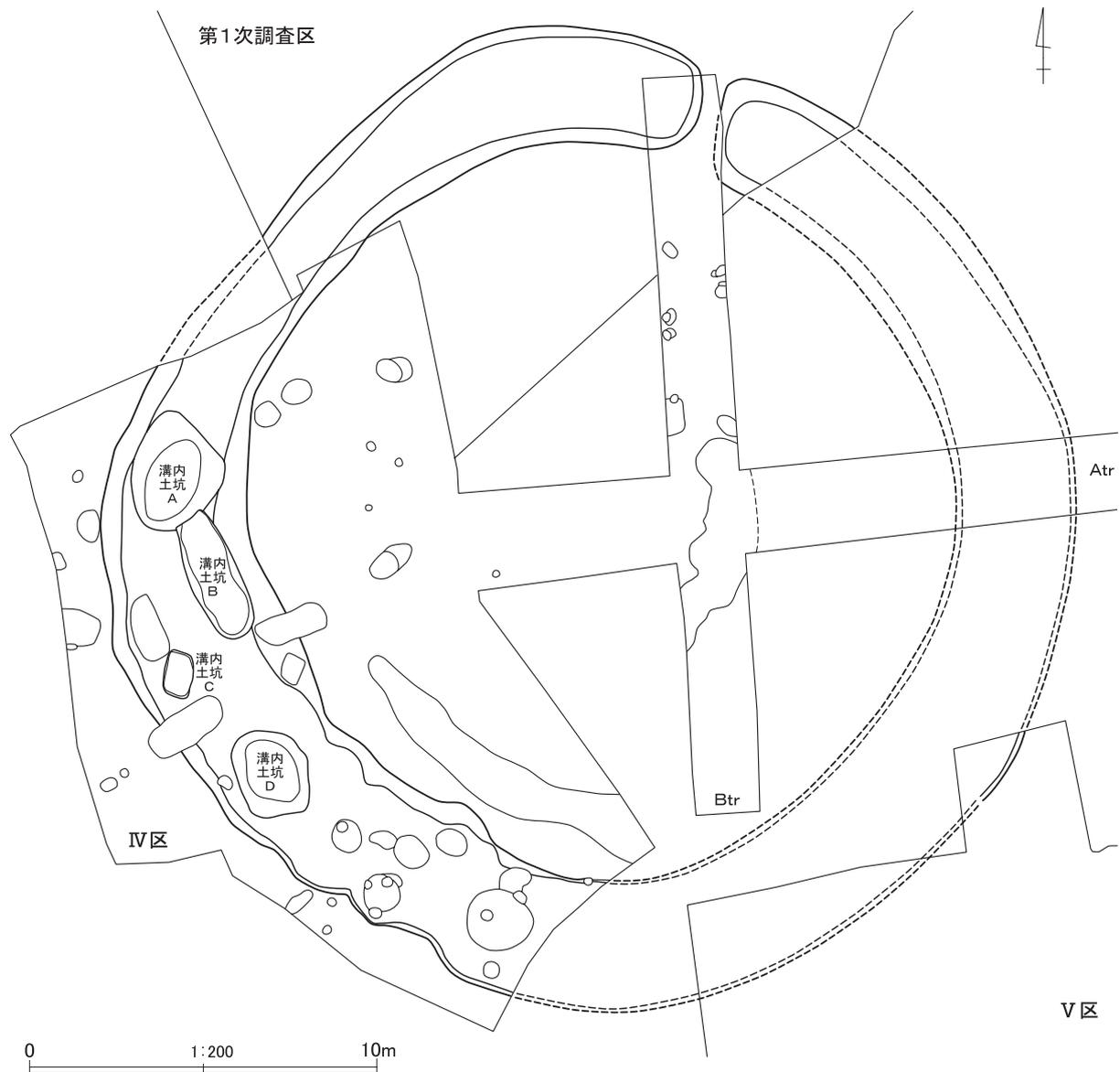
北東方向に尾根状に延びる丘陵部の標高109.5mを測る南東側に緩やかに傾斜する斜面部に立地している。本古墳の北西側には長沖14号墳、北東側には長沖16号墳、南東側には長沖40号墳、南西側には金屋南地区B地点で検出された長沖193号墳が近接している。

本古墳の第1次調査区の南側に隣接するⅣ区で、第1次調査区の周溝と連続する南西側の周溝の一部が検出されている。墳丘や主体部の痕跡は見られなかった。本古墳の中央部にあたるAトレンチとBトレンチが交差する付近の浅い溝状の掘り込み内の一部から、拳大の自然石が多数集石されたような状態で検出されているが、本古墳に直接伴うものか明確ではない。

本古墳は、周溝内径が南西～北東方向19.40m、周溝外径が南西～北東方向27.10m、南東～北西方向26.40mの円墳と推測される。周溝は、北西側の長沖14号墳と接する部分が上幅2.5m程度に狭くなっているが、南西側では南側が上幅3.75m、西側が最高で上幅4.9mを測る。断面の形態は、幅広の台形を呈し、壁は内外とも直線的であるが比較的緩やかに傾斜している。確認面からの深さは、40cm～70cmある。南西側周溝の底面には、性格不明の土坑状の掘り込みが4ヵ所(溝内土坑A～D)見られ、その中の溝内土坑CとDの上面からは円筒埴輪が横になった状態で出土している。

出土遺物は、周溝の覆土中を主体に、埴輪(円筒埴輪・形象埴輪)と須恵器甕の破片が比較的多く出土している。円筒埴輪は、底部調整を施さない2条凸帯3段構成のものが主体で、第1段目が直立ぎみで長いものと、第1段目がややすぼまり短いものの2形態が見られる。形象埴輪は、人物・馬・靱・盾と考えられる破片があり、No41～No43がBトレンチから出土している他は、Ⅴ区の北西部か

ら出土している。須恵器甕(第24・25図No1～No6)は、ほとんどが大甕の胴部破片で、形象埴輪と同じくその多くはV区の北西部から出土している。



第13図 長沖15号墳全体図

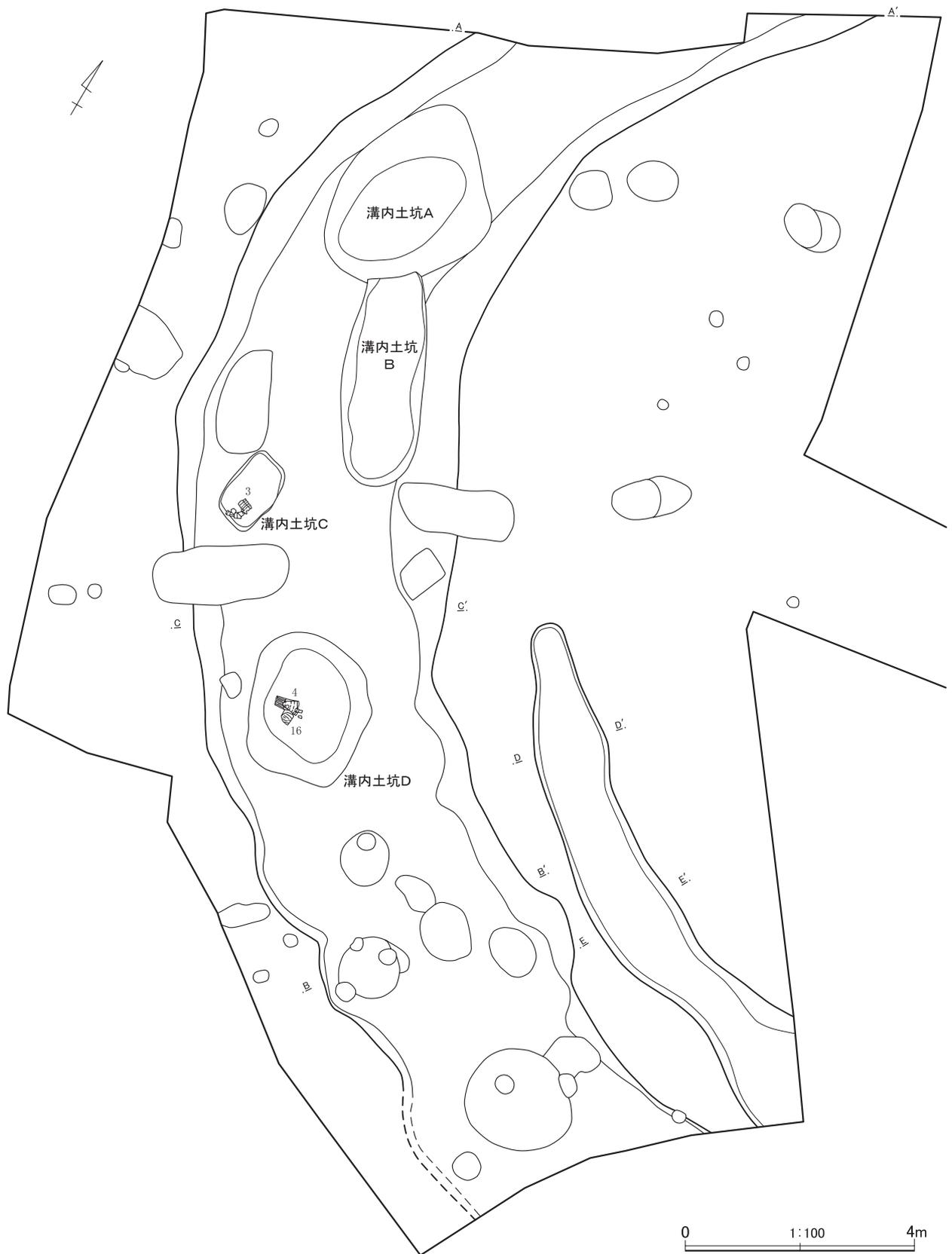
長沖15号墳周溝土層説明

<A-A'>

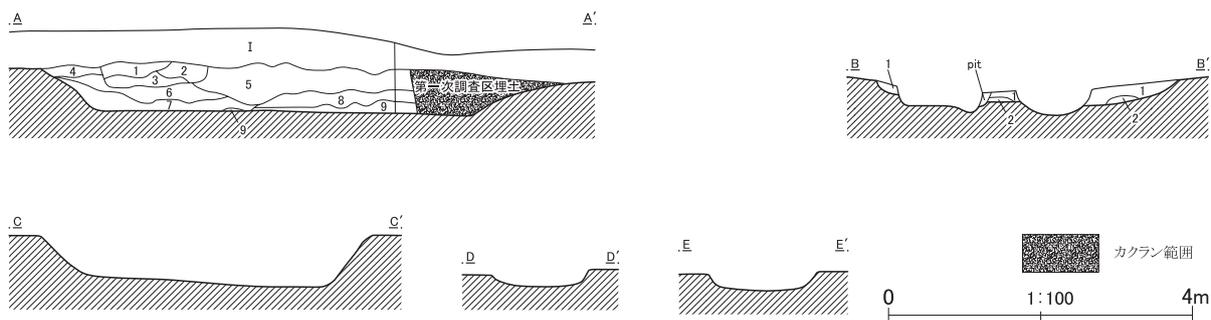
- 第1層：明褐色土層（しまり、粘性なし。浅間山系A軽石を多く含む。近～現代耕作土。）
- 第1層：暗褐色土層（しまり、粘性若干あり。径1mm以下のローム微粒子を若干含む。）
- 第2層：暗褐色土層（第1層に類似するが、ローム粒子の径がやや大きい。）
- 第3層：黒褐色土層（しまり、粘性若干あり。炭化物を多く含む。）
- 第4層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm程度のローム粒を多く含む。）
- 第5層：黒褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm以下のローム微粒子を若干含む。）
- 第6層：茶褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm以下のローム微粒子をやや多く含む。）
- 第7層：茶褐色土層（しまり、粘性あり。径1～30mm程度のローム粒を多く含む。）
- 第8層：明褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm程度のローム粒子を多量に含む。）
- 第9層：明黄色土層（しまり、粘性あり。径10～50mmのロームブロックを多量に含む。）

<B-B'>

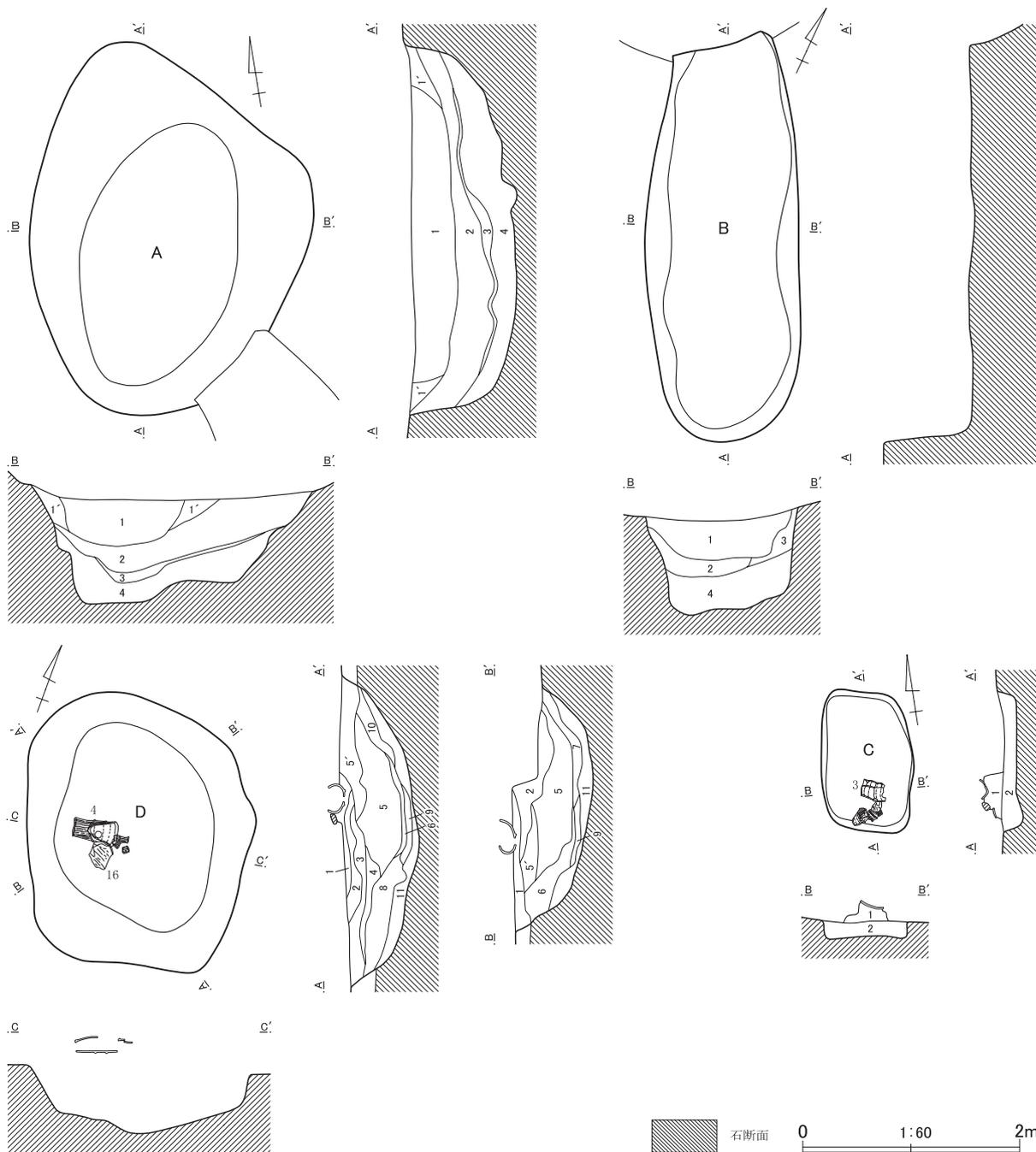
- 第1層：明褐色土層（ローム粒、白色粒子を少量均一に、灰褐色粘土小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第2層：暗褐色土層（白色粒子を微量含み、灰褐色粘質土を多量に混入する。しまり、粘性共に強い。）



第14図 長沖15号墳周溝跡



第15図 長沖15号墳周溝土層断面図



第16図 長沖15号墳溝内土坑

長沖15号墳溝内土坑土層説明

<溝内土坑A>

- 第1層：黒色土層（しまり、粘性あり。径1mm以下の黄色、白色粒子を含む。）
- 第1層：黒色土層（しまり、粘性あり。第1層に類似するが径1～2mm程度のローム粒子を含む。）
- 第2層：明褐色土層（しまり、粘性強い。径10～50mm程度の第B層ブロックを多量に含む。）
- 第3層：暗褐色土層（しまり、粘性強い。きめが細かい粘質土。）
- 第4層：明褐色土層（しまり、粘性強い。径10～50mm程度の地山ブロックを多量に含む。）

<溝内土坑B>

- 第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを少量、炭化物粒子を微量含む。しまり強く、粘性を有する。）
- 第2層：暗茶褐色土層（炭化物粒子を少量含み、黒褐色土と灰白色粘土を混入する。しまり強く、粘性を有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を微粒含み、黒褐色土を斑点状に若干混入する。しまり強く、粘性を有する。）
- 第4層：明褐色土層（灰褐色粘土を全体に細かく混入し、炭化物粒子を微量含む。しまり、粘性共に強い。）

<溝内土坑C>

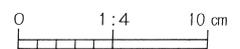
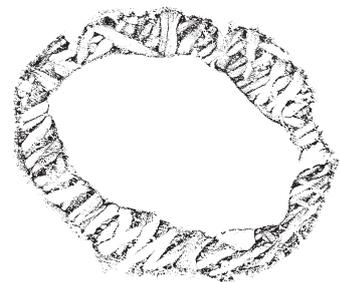
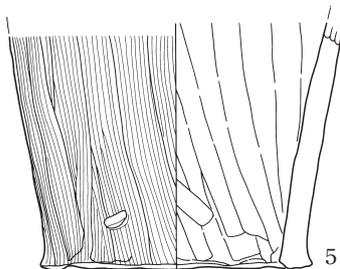
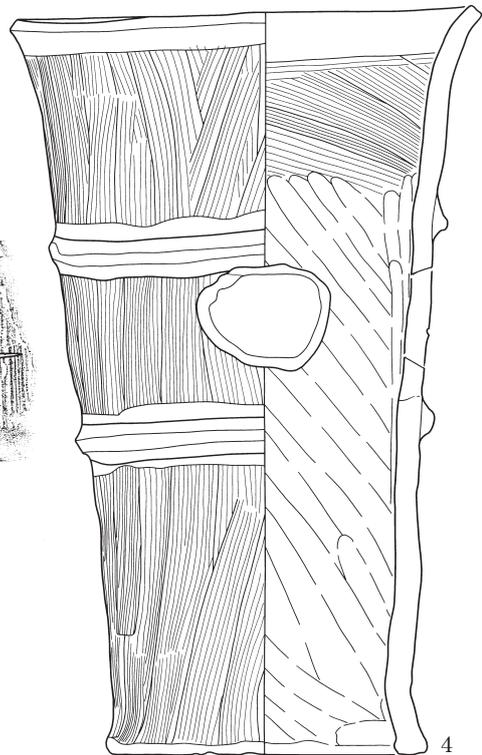
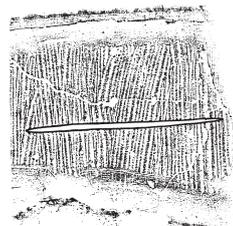
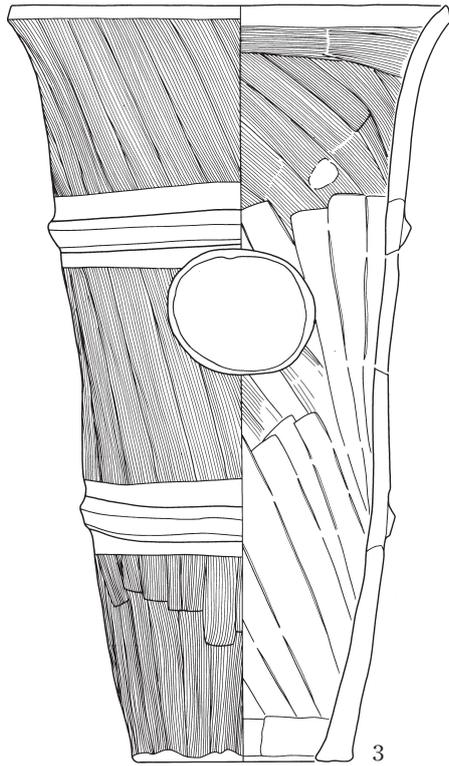
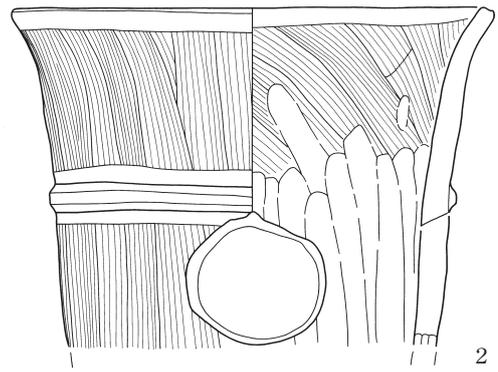
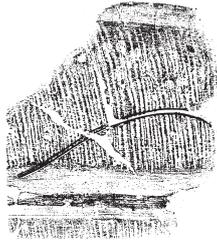
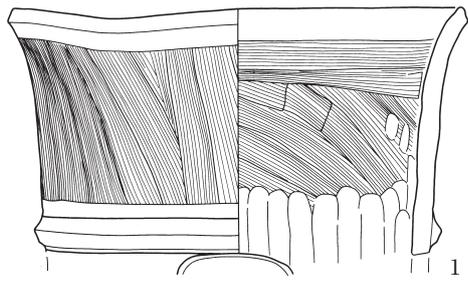
- 第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを多量に褐色粘土ブロックを少量含む。しまり、粘性共に強い。）
- 第2層：暗茶褐色土層（褐色粘土ブロックを多量に、灰白粘土小ブロックを少量含み、重金属の凝集をまばらに混入する。しまり、粘性共に強い。）

<溝内土坑D>

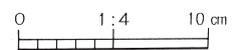
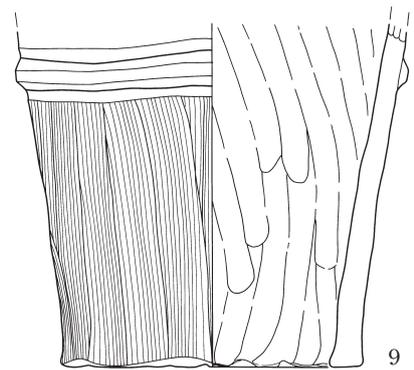
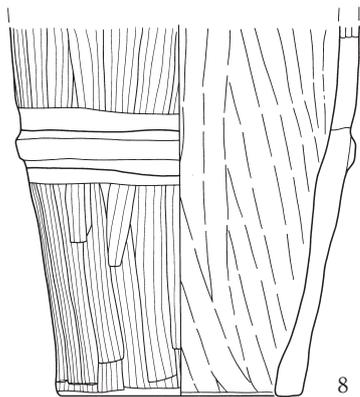
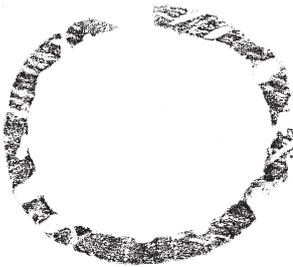
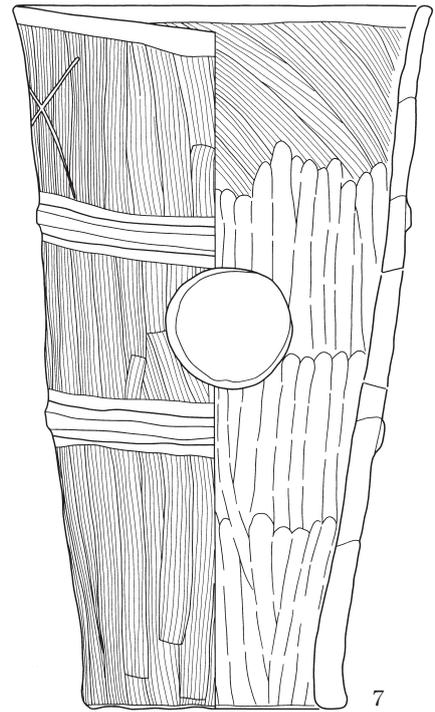
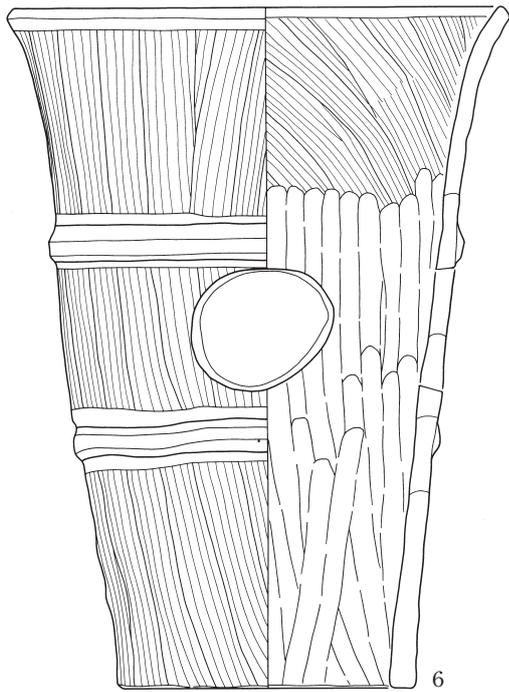
- 第1層：暗褐色土層（しまり、粘性共に強い。径1mm以下の白色、黄色微粒子を多く含む。）
- 第2層：明褐色土層（しまり、粘性あり。径10～50mm程度の明灰色粘土（ハードローム直下）を多量に含む。）
- 第3層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm以下の黄色粒子を含む。）
- 第4層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径10mm程度の明灰色粘質土ブロックを若干含む。）
- 第5層：明褐色土層（しまり、粘性あり。径10～100mm程度のハードロームブロックや明灰色土ブロックを非常に多く含む。）
- 第6層：暗灰色土層（しまり、粘性あり。明灰色粘質土Bブロックを若干含む。）
- 第7層：暗灰色土層（しまり、粘性あり。流水で流れ込んだ様なきめが細かいシルト層。）
- 第8層：明灰色土層（土質は第7層に類似するが色調が明るい。）
- 第9層：記載なし。
- 第10層：暗灰色土層（しまり、粘性強い。第6層に類似するが、明灰色粘質土の含有率が少ない。）
- 第11層：明灰色粘質土層（しまり、粘性強い。第Ⅲ層ブロックをやや多く含む。）

長沖15号墳出土埴輪観察表

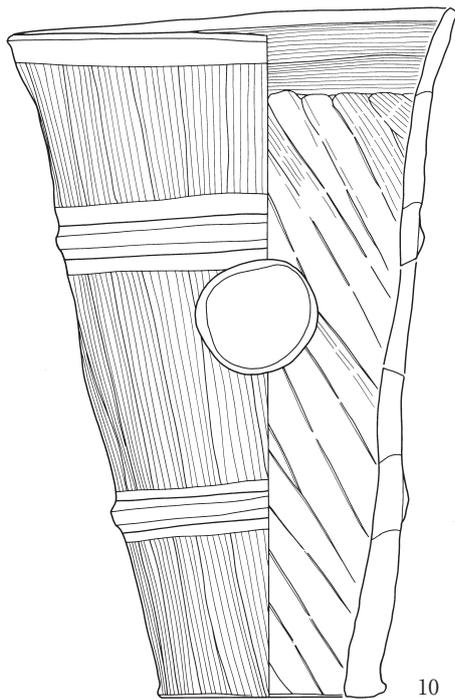
1	円筒埴輪	A.口縁部径(24.2)、残存高13.1、3段高11.7。B.粘土紐積み上げ。C.外面タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面3段ナナメハケ後に下位以下ナデ、口縁部ヨコナデ。D.黒色粒、チャート。E.内外-橙色。F.3段1/4。H.周溝内。
2	円筒埴輪	A.口縁部径(25.4)、残存高17.9、3段高9.7。B.粘土紐積み上げ。C.外面タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面3段ナナメハケ後、3段中位以下ナデ、口縁部ヨコナデ。D.片岩粒、チャート。E.内外-にぶい橙色。F.2～3段1/3。G.外面3段に線刻。H.周溝内。
3	円筒埴輪	A.口縁部径(23.3)、器高40.1、底部径11.6、1段高12.9、2段高15.3、3段高11.9。B.粘土紐積み上げ。C.外面タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面3段ナナメハケ後、2段以下篋・木口状工具ナデ、口縁部ヨコナデ。D.白色粒、黒色粒、チャート。E.内外-にぶい橙色。F.1/2。H.周溝内土坑C上面。
4	円筒埴輪	A.口縁部径24.8、器高39.7、底部径16.9、1段高18.0、2段高10.2、3段高11.5。B.粘土紐積み上げ。C.外面タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面3段ナナメハケ後、2段以下ナデ、口縁部ヨコナデ。D.片岩粒、チャート。E.内外-橙色。F.3/4。G.外面2段に横線の線刻。H.周溝内土坑D上面。
5	円筒埴輪	A.残存高13.0、底部径(14.2)。B.粘土紐積み上げ。C.外面タテハケ。内面ナデ。D.片岩粒、チャート。E.内外-橙色。G.底面に木目状と棒状の圧痕。F.1段1/3。H.周溝内。
6	円筒埴輪	A.口縁部径(26.3)、器高36.0、底部径(15.6)、1段高13.0、2段高10.2、3段高12.8。B.粘土紐積み上げ。C.外面タテハケ、口縁部上端弱いヨコナデ。内面3段斜めハケ後に1～2段ナデ、口縁部上端弱いヨコナデ。D.片岩粒、チャート。E.内外-橙色。F.2/3。G.底面に棒状圧痕。H.V区北西部。
7	円筒埴輪	A.口縁部径(22.3)、器高(37.3)、底部径(14.0)、1段高15.3、2段高10.8、3段高11.2。B.粘土紐積み上げ。C.外面タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面3段斜めハケ後に1～2段ナデ、口縁部ヨコナデ。D.片岩粒、チャート。E.外-橙色、内-にぶい橙色。F.2/3弱。G.外面3段に「×」字状の線刻。H.V区北西部。
8	円筒埴輪	A.残存高19.6、底部径12.8、1段高13.3。B.粘土紐積み上げ。C.外面タテハケ。内面2段以下ナデ。D.粗粒チャート。E.内外-橙色。F.ほぼ完存する1段と2段の一部。H.V区北西部。
9	円筒埴輪	A.残存高17.7、底部径(16.0)、1段高15.8。B.粘土紐積み上げ。C.外面タテハケ。内面1段ナデ。D.片岩粒、チャート。E.内外-橙色。F.1段の1/3。G.底面に棒状圧痕。H.V区北西部。



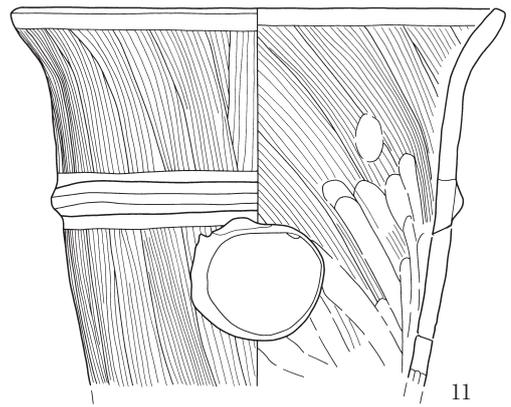
第17図 長沖15号墳出土埴輪（1）



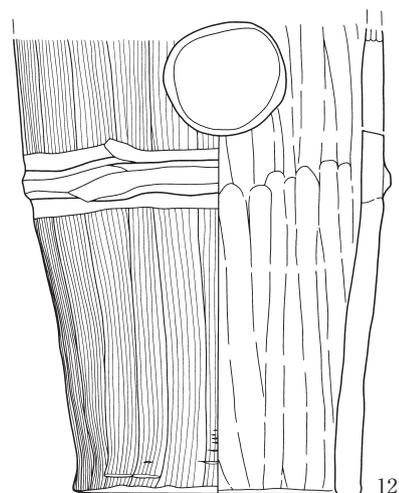
第18図 長沖15号墳出土埴輪（2）



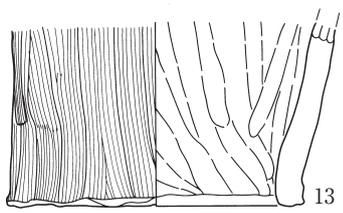
10



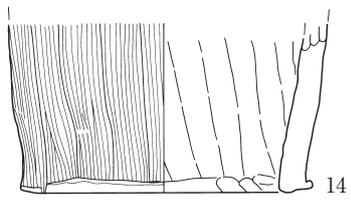
11



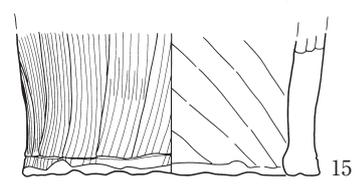
12



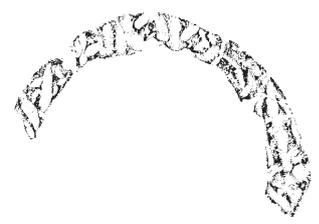
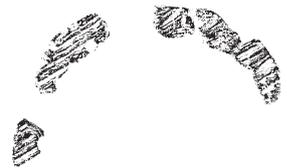
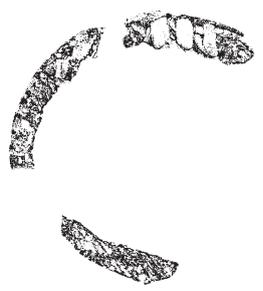
13



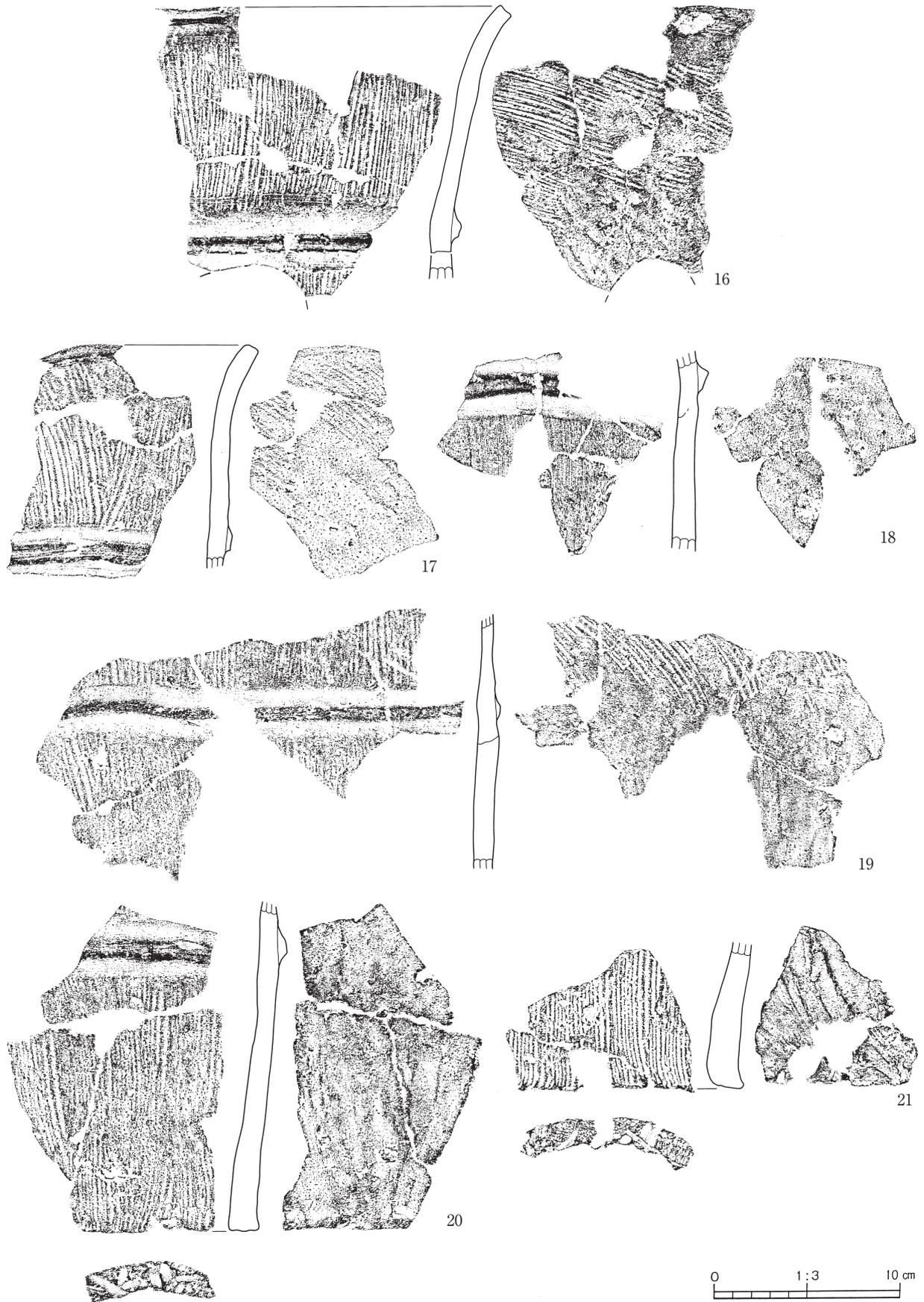
14



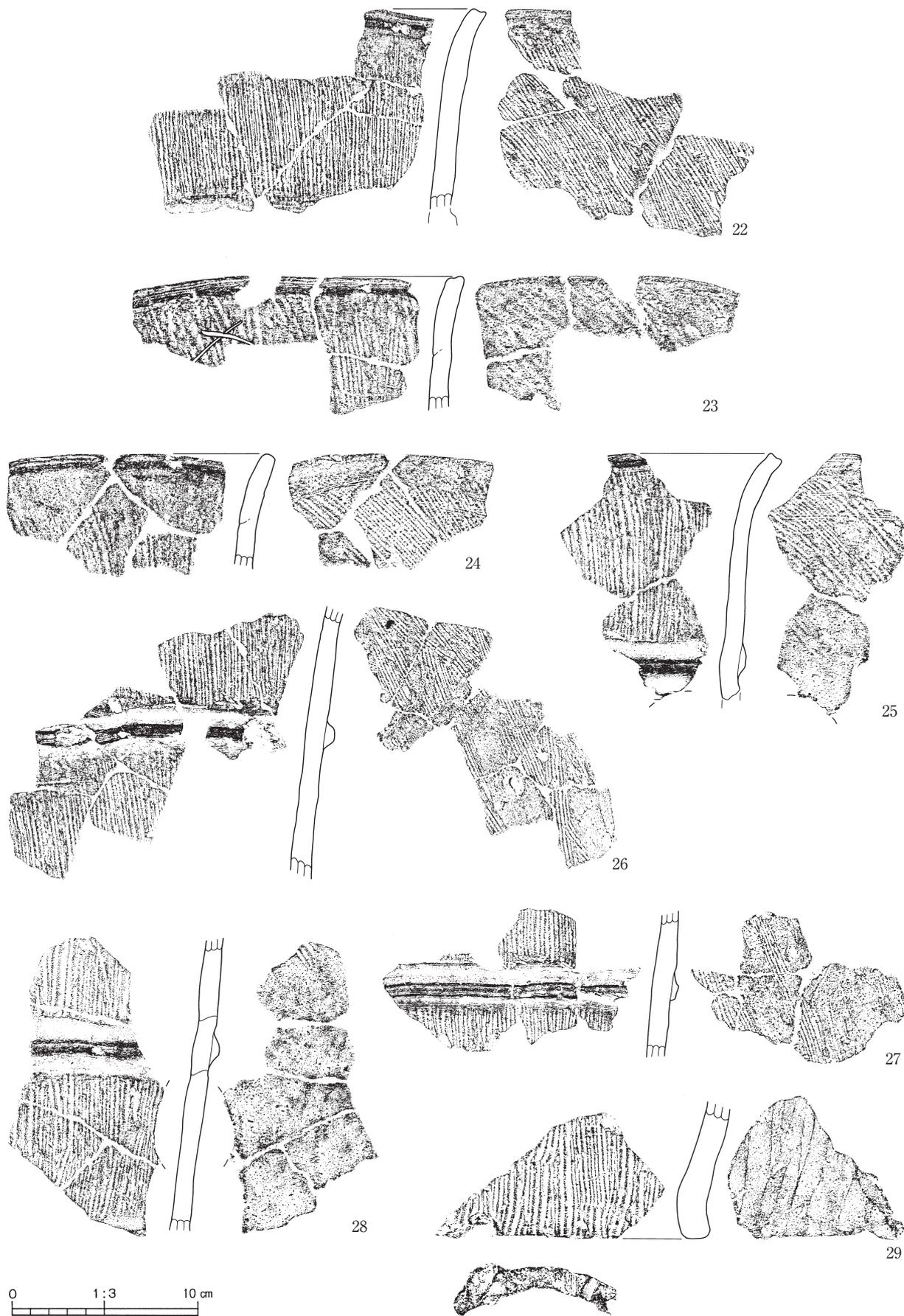
15



第19図 長沖15号墳出土埴輪 (3)



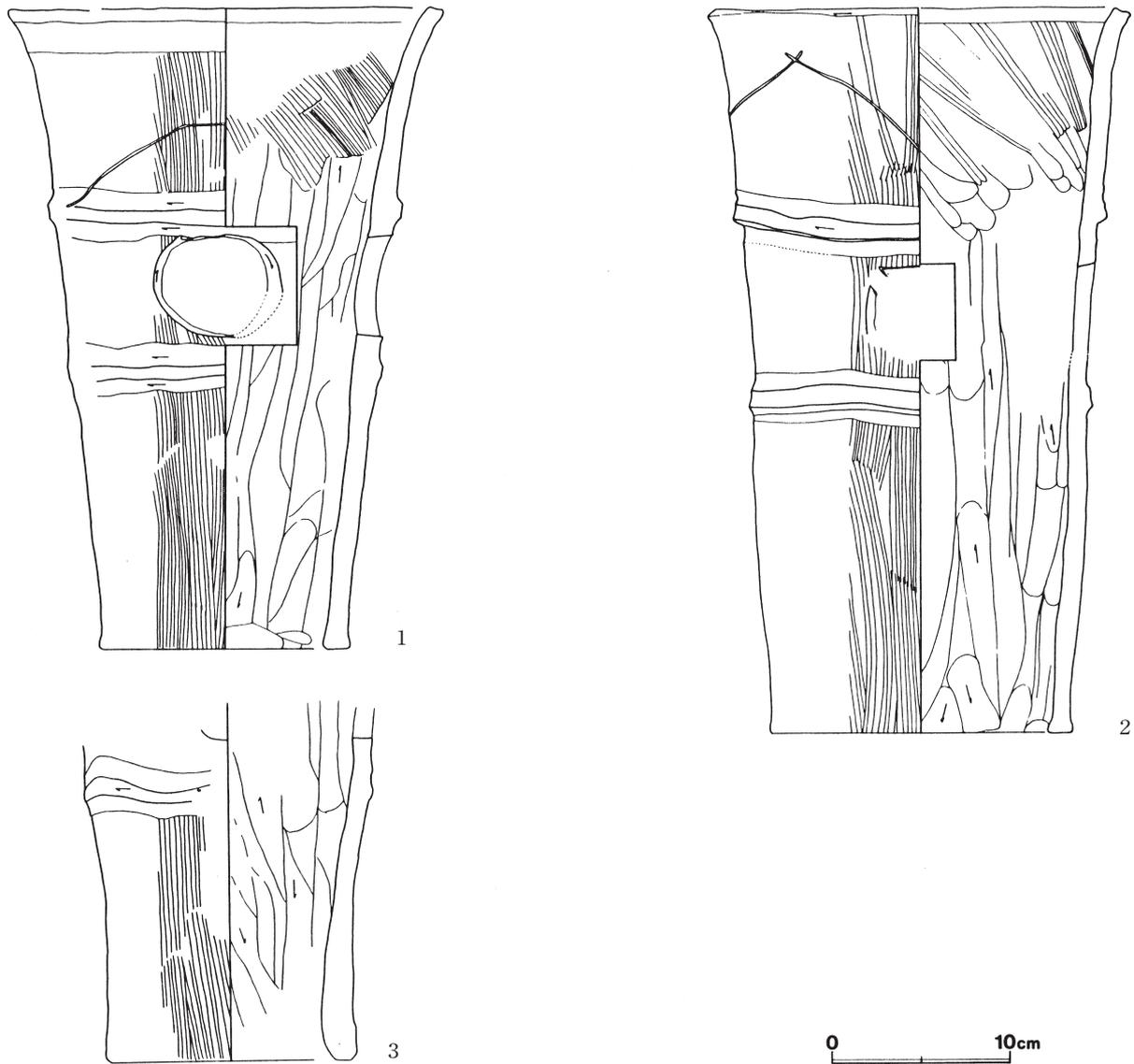
第20図 長沖15号墳出土埴輪（4）



第21図 長沖15号墳出土埴輪 (5)



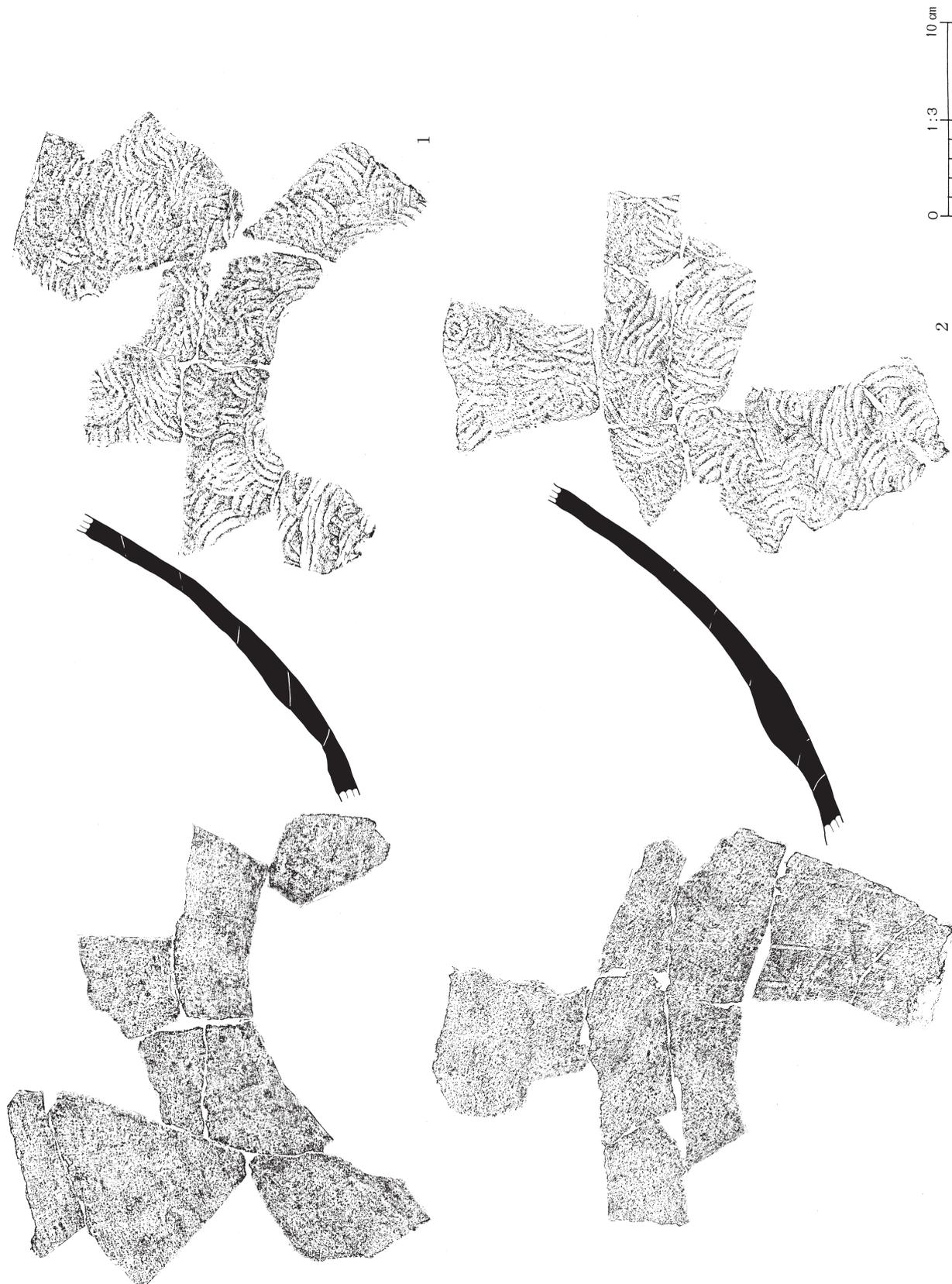
第22図 長沖15号墳出土埴輪 (6)



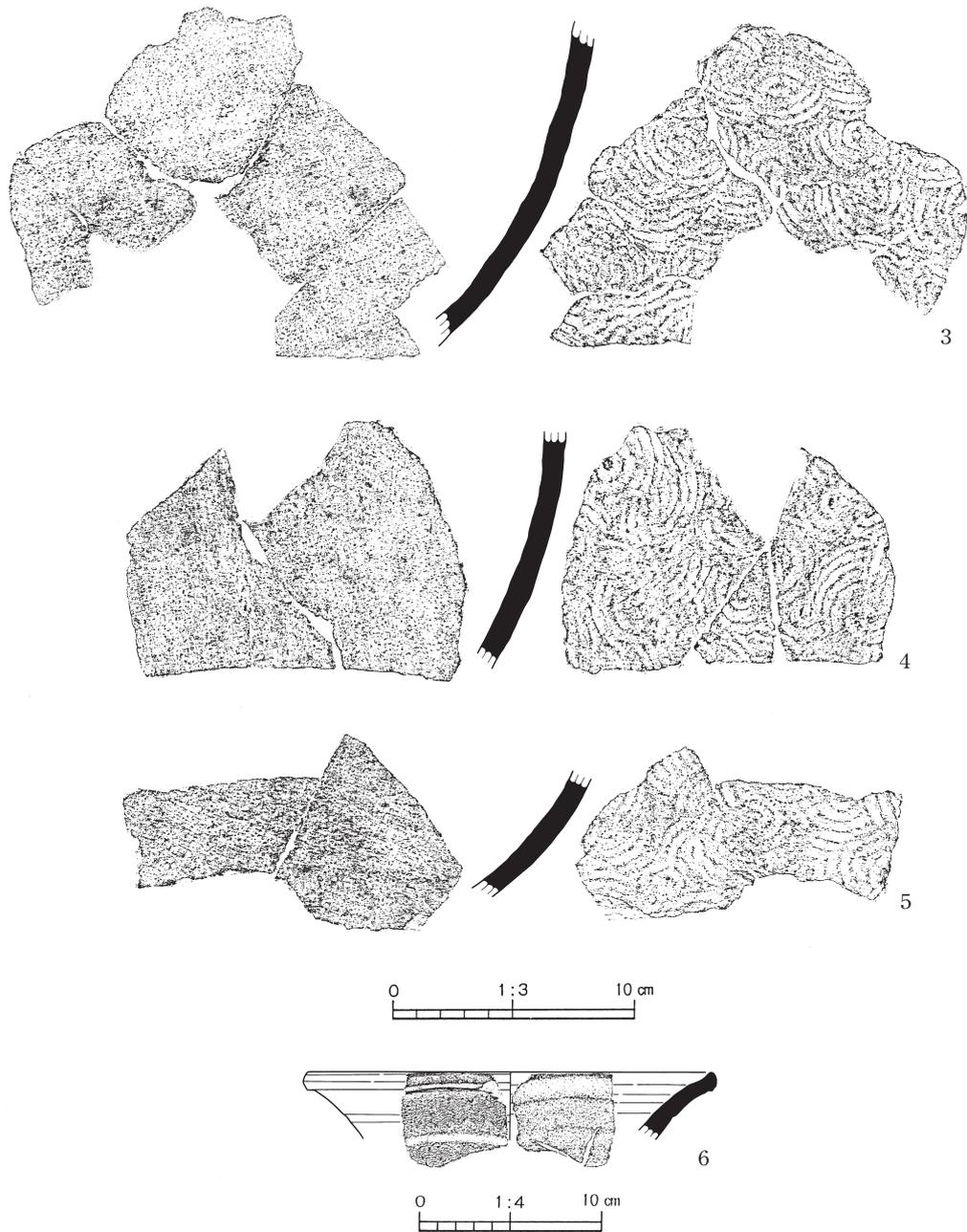
第23図 長沖15号墳第1次調査区出土埴輪（菅谷他1980より）

10	円筒埴輪	A. 口縁部径 (23.5)、器高 36.4、底部径 (11.9)、1 段高 10.3、2 段高 13.7、3 段高 12.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面 3 段上側をヨコハケ後、3 段中位以下を篋・木口状工具のナデ。D. チャート。E. 外-にぶい橙色、内-橙色。F. 2/3。G. 内面 3 段に「×」字状の線刻。H. V 区北西部。
11	円筒埴輪	A. 口縁部径 (26.0)、残存高 20.0、3 段高 10.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面ナナメハケ後、2 段以下ナデ、口縁部ヨコナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-橙色。F. 2~3 段の 1/3。H. V 区北西部。
12	円筒埴輪	A. 残存高 24.7、底部径 15.2、1 段高 17.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ。内面 2 段以下ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-橙色。F. ほぼ完存する 1 段と 2 段の一部。G. 底面に棒状圧痕。H. V 区北西部。
13	円筒埴輪	A. 残存高 9.7、底部径 15.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ。内面 3 段ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-橙色。F. 1 段の 1/2 弱。G. 底面に棒状圧痕。H. V 区北西部。
14	円筒埴輪	A. 残存高 8.9、底部径 15.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ。内面 3 段ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-にぶい橙色。F. 1 段の 1/3 弱。G. 底面に木目状圧痕。H. V 区北西部。
15	円筒埴輪	A. 残存高 7.5、底部径 (15.6)。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ。内面 3 段ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-明赤褐色。F. 3 段の 1/4 弱。G. 外面底部に紐状、底面に棒状圧痕。H. V 区北西部。
16	円筒埴輪	A. 残存高 14.7、3 段高 11.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面 3 段ナナメハケ後に下位以下ナデ、口縁部ヨコナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-明赤褐色。F. 3 段 1/5。H. 周溝内土坑 D 上面。

17	円筒埴輪	A. 残存高 12.1、3 段高 11.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ、口縁部弱いヨコナデ。内面 3 段ナナメハケ後に中位以下ナデ、口縁部弱いヨコナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-明赤褐色。F. 3 段片。H. 周溝内。
18	円筒埴輪	A. 残存高 10.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ。内面ナデ。D. 黒色粒、チャート。E. 外-橙色。内-明褐色。F. 胴部片。H. 周溝内。
19	円筒埴輪	A. 残存高 13.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ。内面ナナメハケ後ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 外-明赤褐色、内-明褐色。F. 胴部片。H. 周溝内。
20	円筒埴輪	A. 残存高 17.7、1 段高 15.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ。内面ナデ。D. 片岩粒、粗粒チャート。E. 内外-橙色。F. 1 段片。G. 底面に棒状圧痕。H. 周溝内。
21	円筒埴輪	A. 残存高 6.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ。内面ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-明赤褐色。F. 1 段片。G. 底面に布目状と棒状の圧痕。H. 周溝内。
22	円筒埴輪	A. 残存高 10.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ、口縁部弱いヨコナデ。内面 3 段ナナメハケ、口縁部ヨコナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-明赤褐色。F. 3 段片。H. V 区北西部。
23	円筒埴輪	A. 残存高 8.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ、口縁部弱いヨコナデ。内面 3 段上側ナナメハケ、口縁部ヨコナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-橙色。F. 3 段片。H. V 区北西部。
24	円筒埴輪	A. 残存高 5.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ、口縁部弱いヨコナデ。内面 3 段上側ナナメハケ、口縁部ヨコナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-橙色。F. 3 段片。H. V 区北西部。
25	円筒埴輪	A. 残存高 13.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ、口縁部弱いヨコナデ。内面 3 段ナナメハケ後、中位以下ナデ、口縁部ヨコナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-橙色。F. 3 段片。H. V 区北西部。
26	円筒埴輪	A. 残存高 14.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ。内面ナナメハケ後、ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-明赤褐色。F. 胴部片。H. V 区北西部。
27	円筒埴輪	A. 残存高 7.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ。内面ナナメハケ後、ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-明赤褐色。F. 胴部片。H. V 区北西部。
28	円筒埴輪	A. 残存高 15.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ。内面ナナメハケ後、ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-橙色。F. 胴部片。H. V 区北西部。
29	円筒埴輪	A. 残存高 7.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面タテハケ。内面ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-明赤褐色。F. 底部片。G. 底面に棒状圧痕。H. V 区北西部。
30	人物埴輪	A. 残存高 15.9。B. 頭部は島田髻で閉塞。C. 外面ハケ後にナデ、顔部はナデ。内面ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-赤褐色。F. 女子人物の頭部～顔部右側。頭部の島田髻の周縁部欠損。右耳下に耳環が欠損。H. V 区北西部。
31	人物埴輪	A. 残存長 7.2。B. 中実造り。C. ハケ後にナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 外-明褐色。F. 腕部の一部。H. V 区北西部。
32	人物埴輪	A. 残存長 5.4。B. 中実造り。C. ハケ後にナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 外-明赤褐色。F. 腕部の一部。H. V 区北西部。
33	人物埴輪	A. 頭部残存高 8.5。C. 外面ハケで、顔部・美豆良・垂髪はナデ、垂髪縁部はナデと押圧。内面ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 外-にぶい赤褐色、内-明赤褐色。F. 男子人物の頭部～顔部左上側と顎部の一部。美豆良と垂髪下側欠損。H. V 区北西部。
34	人物埴輪	A. 残存長 9.7。B. 中実造り。C. ハケ後にナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 外-明褐色。F. 右腕の一部で指先は欠損。H. V 区北西部。
35	形象埴輪	A. 残存高 5.4。C. 表面ハケ後に周縁部ナデ。裏面ハケ後にナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 表-にぶい褐色、裏-橙色。F. 馬形埴輪鞍部の一部か。H. V 区北西部。
36	馬形埴輪	A. 残存高 5.4。C. ハケ。D. 片岩粒、チャート。E. 外-明赤褐色～赤褐色。F. 鞍部の一部。H. V 区北西部。
37	(鞍形埴輪)	A. 残存長 11.6。B. 円筒部に下板部貼付か。C. 外面ハケ後にナデ。内面ナデ。D. 片岩粒子、チャート。E. 外-明赤褐色、内-にぶい黄褐色。F. 下板部の一部か。H. V 区北西部。
38	(盾形埴輪)	A. 残存長 7.3。B. 円筒部に盾面貼付か。C. 外面ハケ後にナデ、斜位の線刻。内面ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 外-明赤褐色、内-灰黄褐色。F. 盾面の破片か。H. V 区北西部。
39	馬形埴輪	A. 径 3.2 × 3.6。B. 中実造りで切り込みを入れる。C. ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 外-灰黄褐色。F. 鈴で一部欠損。H. V 区北西部。
40	馬形埴輪	A. 径 3.1 × 3.3。B. 中実造りで切り込みを入れる。C. ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 外-にぶい黄褐色～橙。F. 鈴で一部欠損。H. V 区北西部。
41	(形象埴輪)	A. 残存高 13.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ハケ後、部分的にナデ。内面ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 外-灰黄褐色、内-明褐色。F. 人物埴輪の胴部の一部か。H. B トレンチ内。
42	馬形埴輪	A. 残存高 12.2、底部径 (9.6)。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ハケ後、部分的にナデ。内面ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 外-灰黄褐色、内-明赤褐色。F. 脚部の底部。G. 底部に傾いた三角形の切り込み。H. B トレンチ内。
43	馬形埴輪	A. 残存高 10.0、底部径 (9.5)。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ハケ後、部分的にナデ。内面ナデ。D. 片岩粒、チャート。E. 内外-橙色。F. 脚部の底部片。G. 底部に三角形の切り込み。H. B トレンチ内。



第24図 長沖15号墳出土須恵器（1）



第25図 長沖15号墳出土須恵器（2）

長沖15号墳出土須恵器観察表

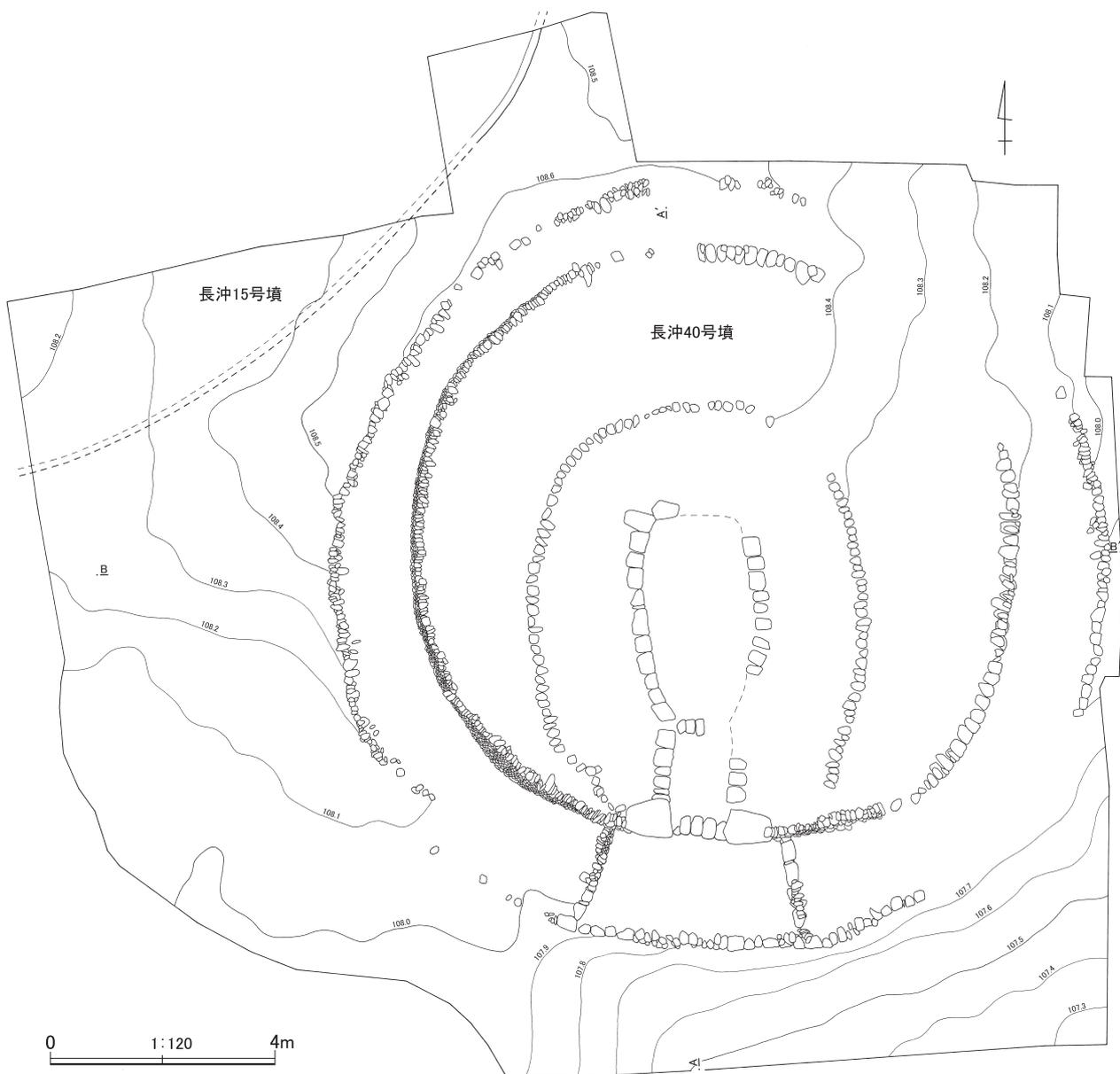
1	須恵器	A.残存高14.5。B.粘土紐積み上げ後タタキ成形。C.外面ナデ。内面同心円文当て具痕の後ナデ。D.石英、白色粒。E.外-暗灰色、内-灰黄色。F.底部付近破片。H.V区北西部。
2	須恵器	A.残存高15.1。B.粘土紐積み上げ後タタキ成形。C.外面ナデ。内面同心円文当て具痕の後ナデ。D.石英、片岩粒、白色粒。E.外-灰色、内-黄灰色。F.底部付近破片。H.V区北西部。
3	須恵器	A.残存高13.7。B.粘土紐積み上げ後タタキ成形。C.外面平行タタキの後ナデ。内面同心円文当て具痕の後ナデ。D.片岩粒、石英、白色粒。E.内外-灰色。F.胴部破片。H.V区北西部。
4	須恵器	A.残存高9.7。B.粘土紐積み上げ後タタキ成形。C.外面平行タタキの後ナデ。内面同心円文当て具痕の後ナデ。D.片岩粒、石英、白色粒。E.内外-灰色。F.胴部破片。H.V区北西部。
5	須恵器	A.残存高10.1。B.粘土紐積み上げ後タタキ成形。C.外面ナデ。内面同心円文当て具痕の後ナデ。D.石英、片岩粒、白色粒。E.外-にぶい黄色、内-灰黄色。F.破片。H.V区北西部。
6	須恵器	A.口縁部径(22.4)、残存高3.7。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。外面に櫛描波状文。D.石英、白色粒。E.外-黄灰色、内-暗灰黄色。F.口縁部破片。H.V区北西部。

長沖40号墳（第29図、図版4～7）

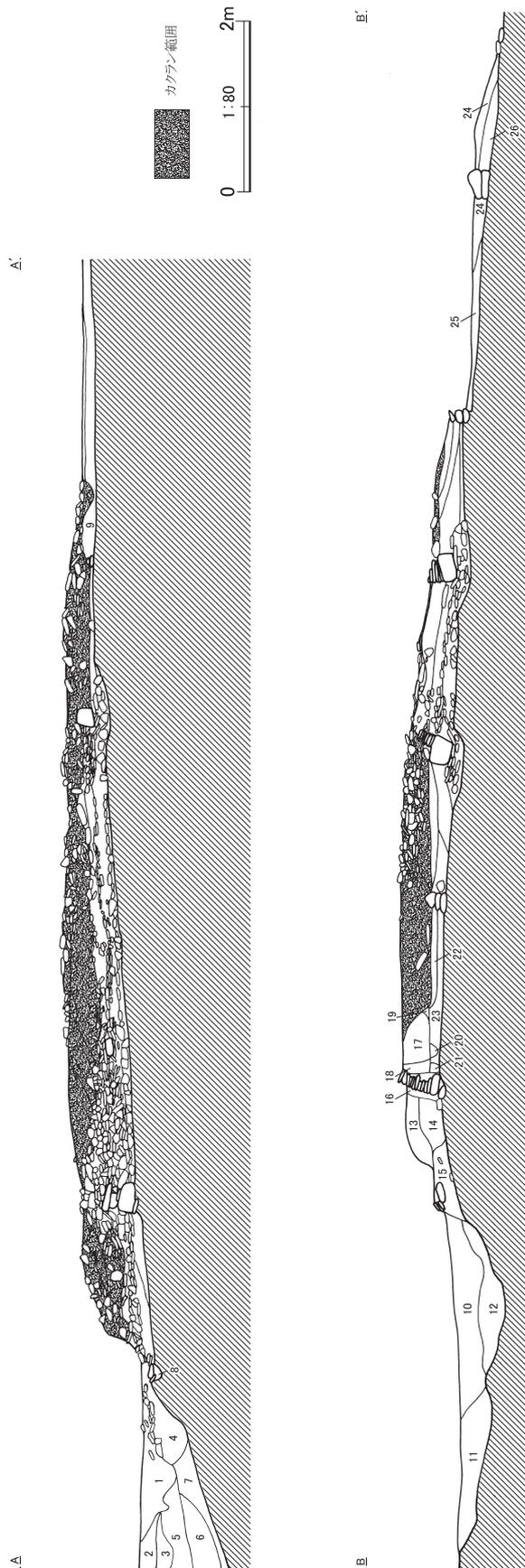
北東方向に尾根状に延びる丘陵部の南東側に緩やかに傾斜する標高108m～109mを測る斜面下に立地している。本古墳の北西側には長沖15号墳が、西側には金屋南地区B地点で検出された長沖193号墳が近接している。調査前の状況は、古墳の墳丘は明確ではなく、若干の地膨れと地表面に多量の石が見られる程度であった。

本古墳は、墳丘直径が南北方向13.90m、東西方向13.95mの円墳で、墳丘の削平が著しく残存状態は良好ではないが、墳丘には石垣状に小口積みした葺石が二重に巡っていた痕跡が認められ、南側には石室の前庭部が残存している。

第1葺石は、南北・東西方向とも直径10.80mの円形に巡り、南側は高さ80cm、西側は高さ60cm、北側は高さ25cm、東側は高さ6cm程度が残存している。内側の石室控積みとの間隔は均一ではなく、



第26図 長沖40号墳調査区全体図



長沖40号墳丘土層説明

- 第1層：明褐色土層（しまり、粘性若干あり。径1mm程度の白色粒子、径1～10mm程度の川床礫を多く含む。また、第1層上内側は拳大の川床礫を主体としている。）
- 第2層：明褐色土層（第1層に類似するが、色調がやや暗い。）
- 第3層：暗褐色土層（しまり、粘性若干あり。径1～10mm程度の川床礫を含む。）
- 第4層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1～10mmの川床礫を若干含む。）
- 第5層：黒褐色土層（しまり、粘性あり。径1～5mm程度の川床礫を少量含む。）
- 第6層：黒褐色土層（しまり、粘性あり。径1～5mm程度の川床礫をやや多く含む。）
- 第7層：暗褐色土層（しまり、粘性強い。径1～20mm程度の川床礫を多く含む。）
- 第8層：黒褐色土層（しまり、粘性強い。径1～30mm程度の川床砂利を多く含む。）
- 第9層：黒色土層（しまり、粘性強い。縄文時代中期の土器片を若干包含する。）
- 第10層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm以下の白色粒子、浅間山系B軽石を若干含む。暗褐色であるが、やや赤黄色がかっている。）
- 第11層：暗褐色土層（第10層に類似するが、色調がやや暗い。）
- 第12層：黒褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。）
- 第13層：暗褐色砂利層（しまり、粘性なし。径10～30mm程度の砂利を主体とする。）
- 第14層：明褐色砂利層（第13層に類似するが、色調が明るい。）
- 第15層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。若干砂利を多く含む。）
- 第16層：暗褐色土層（砂利を多く含む。）
- 第17層：灰白色砂利層
- 第18層：褐色砂利層（裏込め。）
- 第19層：明黒褐色土層（砂利を多量に含む。）
- 第20層：褐色砂利層（第13層からのくい込み。）
- 第21層：黒褐色土層（小礫を若干含む。）
- 第22層：黒褐色土層（砂利を少量含む。）
- 第23層：黒褐色土層（全体に赤みを帯びる。）
- 第24層：明灰色土層（砂利層。）
- 第25層：黒褐色土層（砂利を若干混入し、色調は茶色が強い。しまり、粘性共に有する。）
- 第26層：黒褐色土層（しまり、粘性あり。）

第27図 長沖40号墳丘土層断面図

西側が2.10m、北側が2.80m、東側が2.78mを測り、他に比べて西側が極端に狭くなっている。石の積み方は、長さ25cm～40cm程度の比較的大きな石を根石にして、その上に長さ15cm～20cm程度の扁平な片岩系の川原石を、石の小口面を揃えてやや斜めに傾斜させて積み上げている。

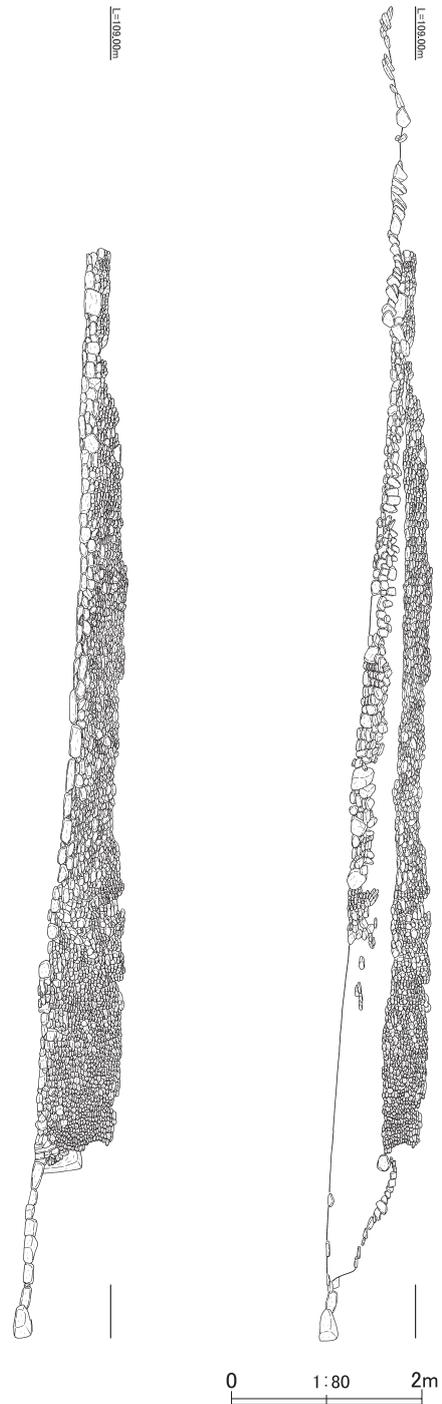
墳丘外縁を巡る第2葺石は、西側で高さ30cm、北側・東側・南側でいずれも高さ15cm程度が残存している。内側の第1葺石との間隔は均一ではなく、西側が1.45m、北側が1.20m、東側が1.70m、南側が1.90mを測り、北側から西側が最も狭く、前庭部のある南側が一番広がっている。石の積み方や使用石材は第1葺石とほぼ同じである。第1葺石と第2葺石の間の裏込めや第1葺石と石室控積みの間の裏込めには、砂利層が充填されている。

この第1葺石と第2葺石は、墳丘平面形的设计企画が「玄室内中心型」(永井2005)で、いずれもほぼ正円の平面形である。しかしながら、第1葺石と第2葺石の北側から西側の間隔や、第1葺石と石室控積みの西側の間隔が、それぞれ東側に比べて狭くなっていることから、両者は同心円ではなく、第1葺石・第2葺石の順にその中心を東側に若干ずらして設計されているようである。これは、本古墳の北西側に近接する長沖15号墳との位置関係によって、十分な空間がとれなくなってしまったための処置と思われる、古墳の石室と墳丘築造の順番を知ることができる点で注目される。

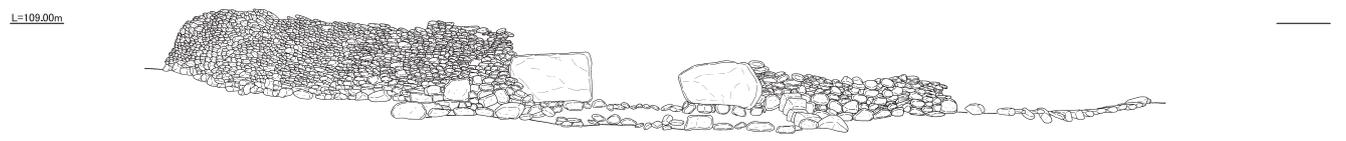
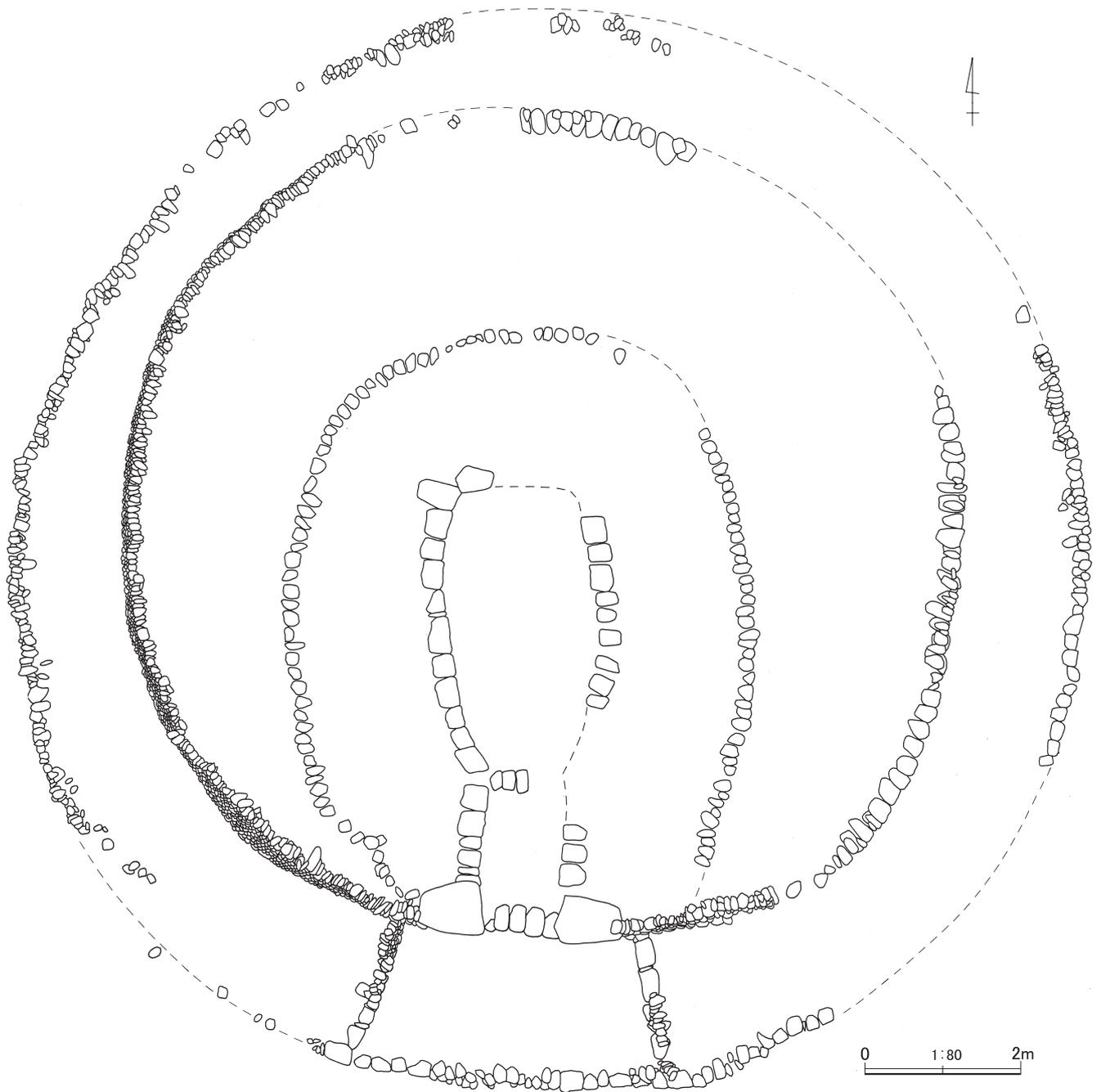
周溝は、北西側の長沖15号墳と本古墳の第2葺石との間に若干間隔があり、墳丘西側や南側の土層断面でもそれらしき落ち込みが見られ、墳丘の周りを巡っていた可能性も推測されるが、地山が谷埋没土の黒色土であったため、平面的には明確に確認することができなかった。

主体部は、石室の外側に控積みをもつ当地域で一般的に見られる川原石積みの胴張り横穴式石室である(第32図)。主軸方位は南北方向にとり、ほぼ真南に向いて開口している。石室の遺存状態はあまり良好ではなく、棺床面や壁面の根石付近にまで後世の削平と攪乱が及んでいる。石室の規模は、羨門から奥壁外側の控積みまで南北方向の全長が8m、両側壁外側の控積みまで東西方向の全長が6mを測る。天井石は、墳丘上や石室内には一枚も見られなかったことから、すでに持ち去られたものと思われる。

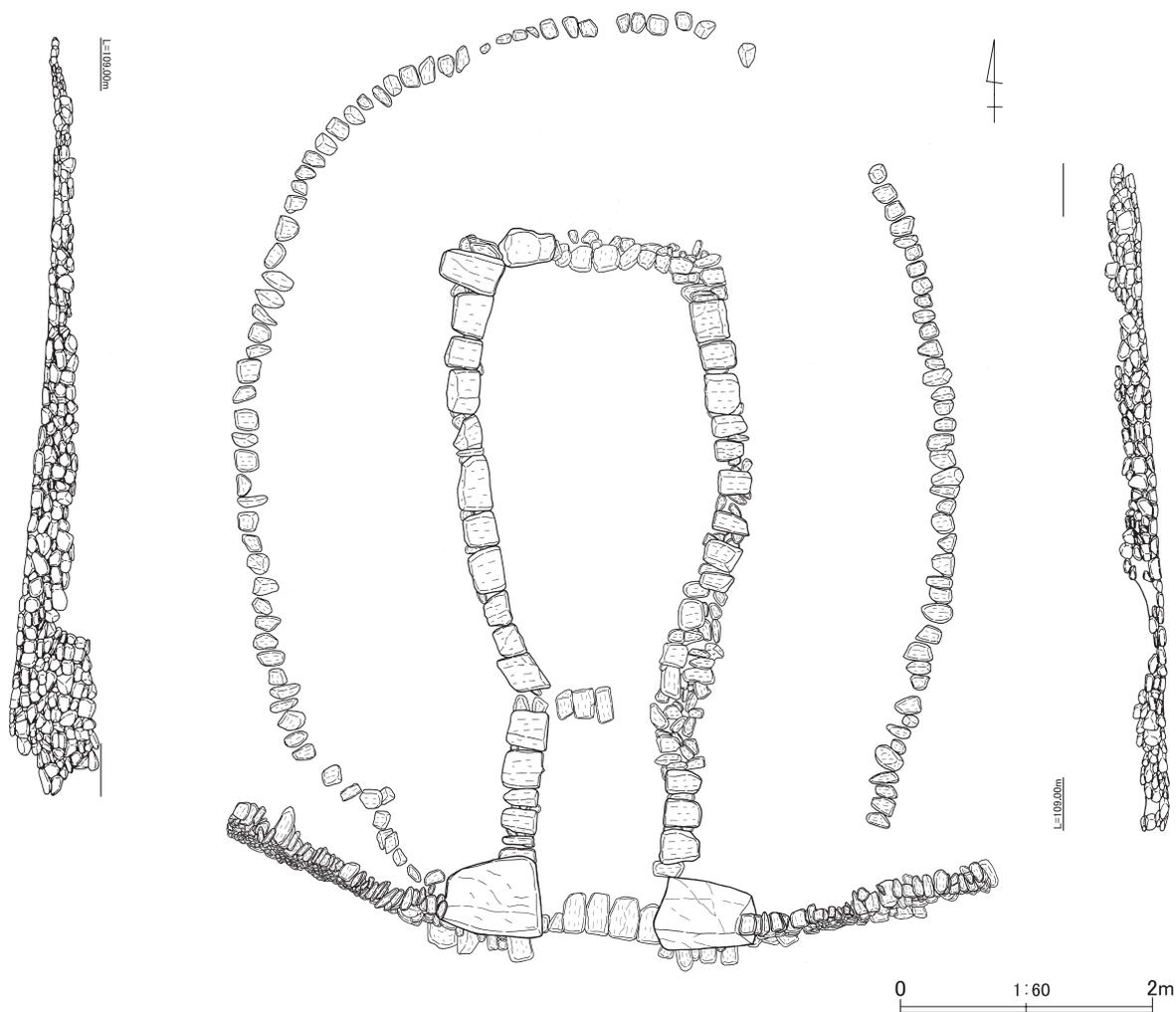
石室外側の控積みは、高さが南西側で最高75cm、西側と東側でそれぞれ30cm、北側で5cm残存して



第28図 墳丘西側葺石側面図



第29図 長沖40号墳墳丘平面図

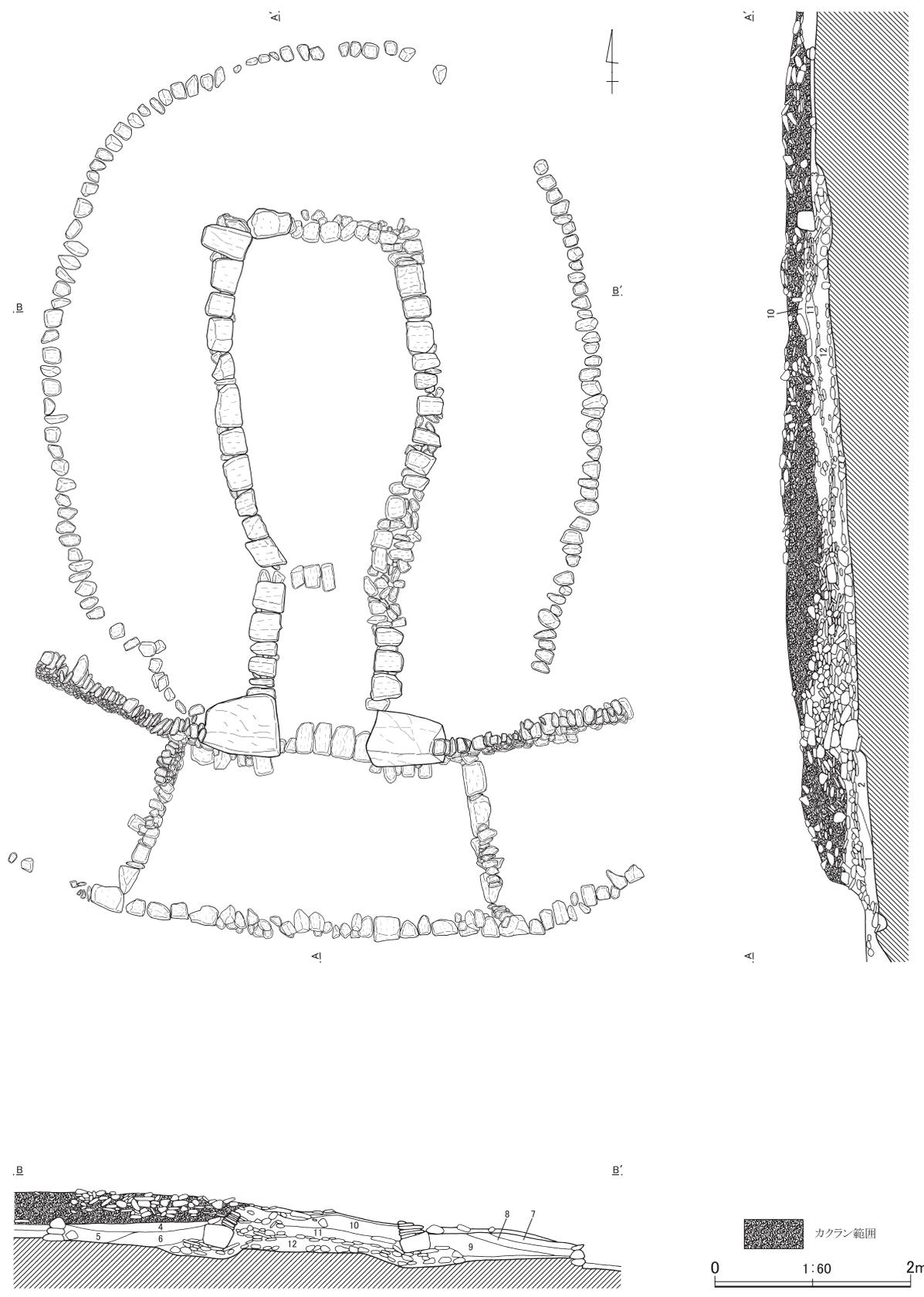


第30図 長沖40号墳石室控え積み側面図

いる程度である。玄室壁面からの幅は、側壁の西側が2.00m・東側が2.04m、奥壁の北側が2.15mを測り、側壁側に比べて若干奥壁側が広がっている。石の積み方は、長さ20cm～25cmのやや扁平の川原石を根石として馬蹄形に配列した後、15cm～20cm程度の小型の礫状の転石を主体に、石の面を揃えないうで乱石積み風に積み上げている。玄室壁面と控え積みの間は、黒色土と砂利の互層によって充填しているが、底面の基底部分には玄室の壁石下周辺以外には、転石を敷き詰めた形跡は見られない。

前庭部は、平面形が横長の台形の形態を呈し、羨門から第2葺石までの南北方向が1.95m、東西方向は北側の羨門側が3.00m、南側の第2葺石側が4.10mを測る。北側の石室入口側の壁は、大きな羨門石の平坦面を壁の下部にしている。東西両側の壁は、西側が最高82cm、東側が最高20cm程度残存している。壁面の石積みは、葺石の石積みと同じく、比較的大きな石を根石にして、その上に長さ15cm～20cm程度の扁平で棒状のやや小形の片岩系川原石を、石の小口面を揃えて垂直ぎみに積み上げている。底面は、羨道部底面よりも20cm程度低く、砂利を厚さ15cm程度平坦に埋め戻した上に、長さ5cm～20cmの大小様々な石を雑に敷いて形成している。

羨道部は、玄室の主軸線から若干西側に曲がって設置されている。規模は、羨門から玄門までの南北方向が2.15m、東西方向が1.08mを測る。羨門は、両側とも幅85cm・長さ65cm・高さ50cm程度の立



第31図 長沖40号墳石室土層断面図

長沖40号墳石室土層説明

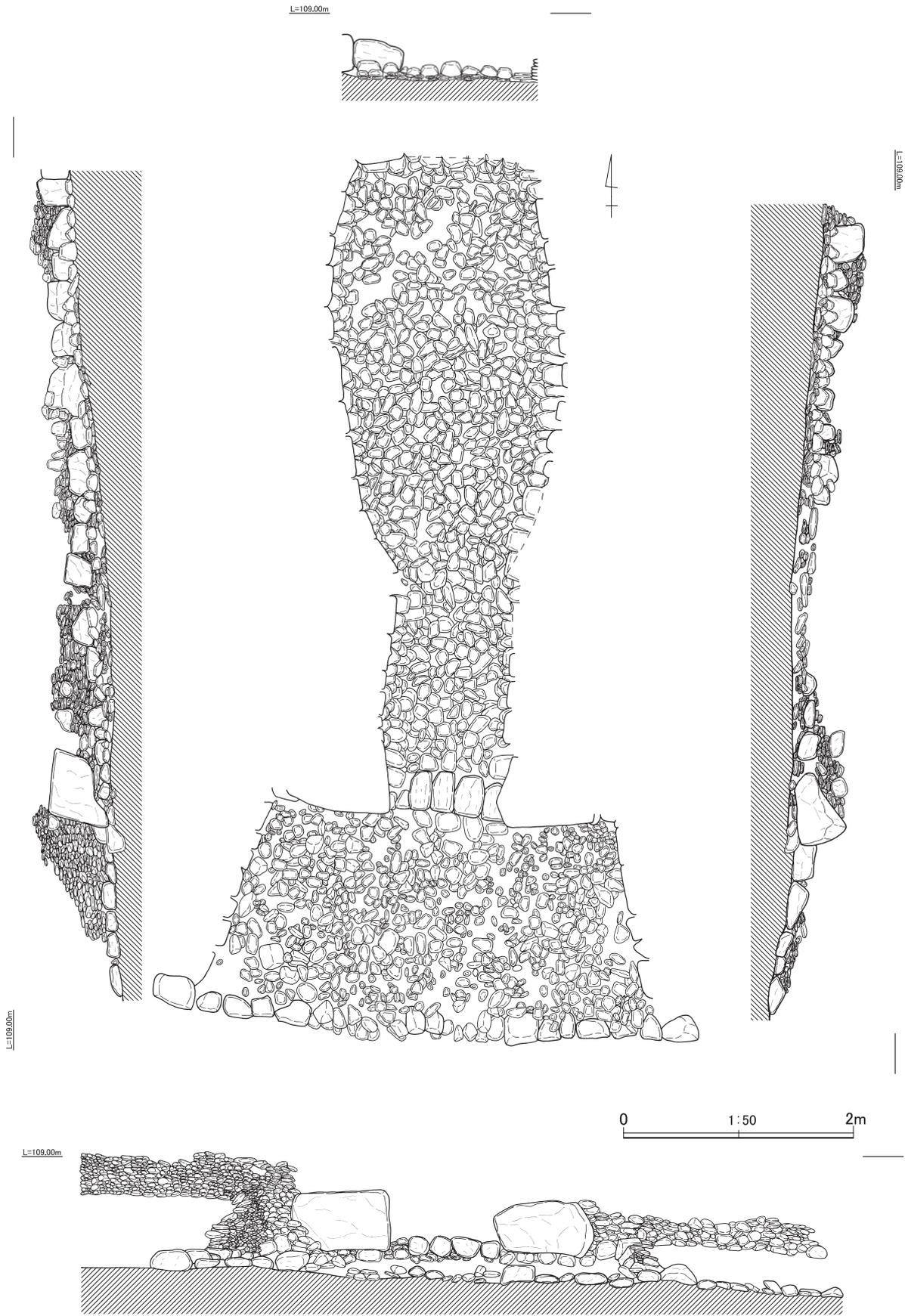
- 第1層：明褐色砂利層（しまり、粘性なし。径1～50mm程度の砂利が主体である。）
- 第2層：暗褐色土層（しまり、粘性強い。径1～20mm程度の礫を多く含む。）
- 第3層：明灰茶褐色砂利層（やや大きめの河川礫を若干含む砂利層。しまり、粘性なし。）
- 第4層：灰褐色砂利層
- 第5層：黒褐色土層（砂利を若干含み、色調は褐色味が強い。）
- 第6層：褐色砂利層
- 第7層：黒褐色土層（基盤の土質に近く、色調は黒味を帯びる。しまり、粘性共に有する。）
- 第8層：黒褐色土層（砂利を若干混入し、色調は茶色が強い。しまり、粘性共に有する。）
- 第9層：灰褐色砂利層（小礫を含む。）
- 第10層：暗褐色土層（しまり、粘性若干あり。径5～20mm程度の小礫を若干含む。）
- 第11層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1～5mm程度の小礫を若干含む。）
- 第12層：褐色砂利層（小礫をほとんど含まない。）

方体状の大形の石を基部とし、その間の前庭部との境に長さ35cm・幅20cm・厚さ20cm程度の長方形ぎみの石を小口を揃えて並べて段にし、北側の玄門には長さ25cm～30cm・幅15cm程度の若干小ぶりの長方形ぎみの石を並べて玄室との境にしている。壁面は、西側壁で最高54cm・東側壁で最高50cmほど残存している。石の積み方は、当地域で一般的な片岩系川原石による「模様積み」で、「二列交互重ね積み」（恋河内2011）の手法によって構築されている。底面は、玄室の棺床面とほぼ同じ高さで、長さ15cm～20cmの扁平な川原石を厚く敷き並べて平坦面を作っている。羨道部入口の閉塞状況は、羨門から羨道部の南側半分の範囲を主体に、長さ15cm～30cm程度の多量の角状の石を使用して、底面上から乱雑に積み上げて密閉している。

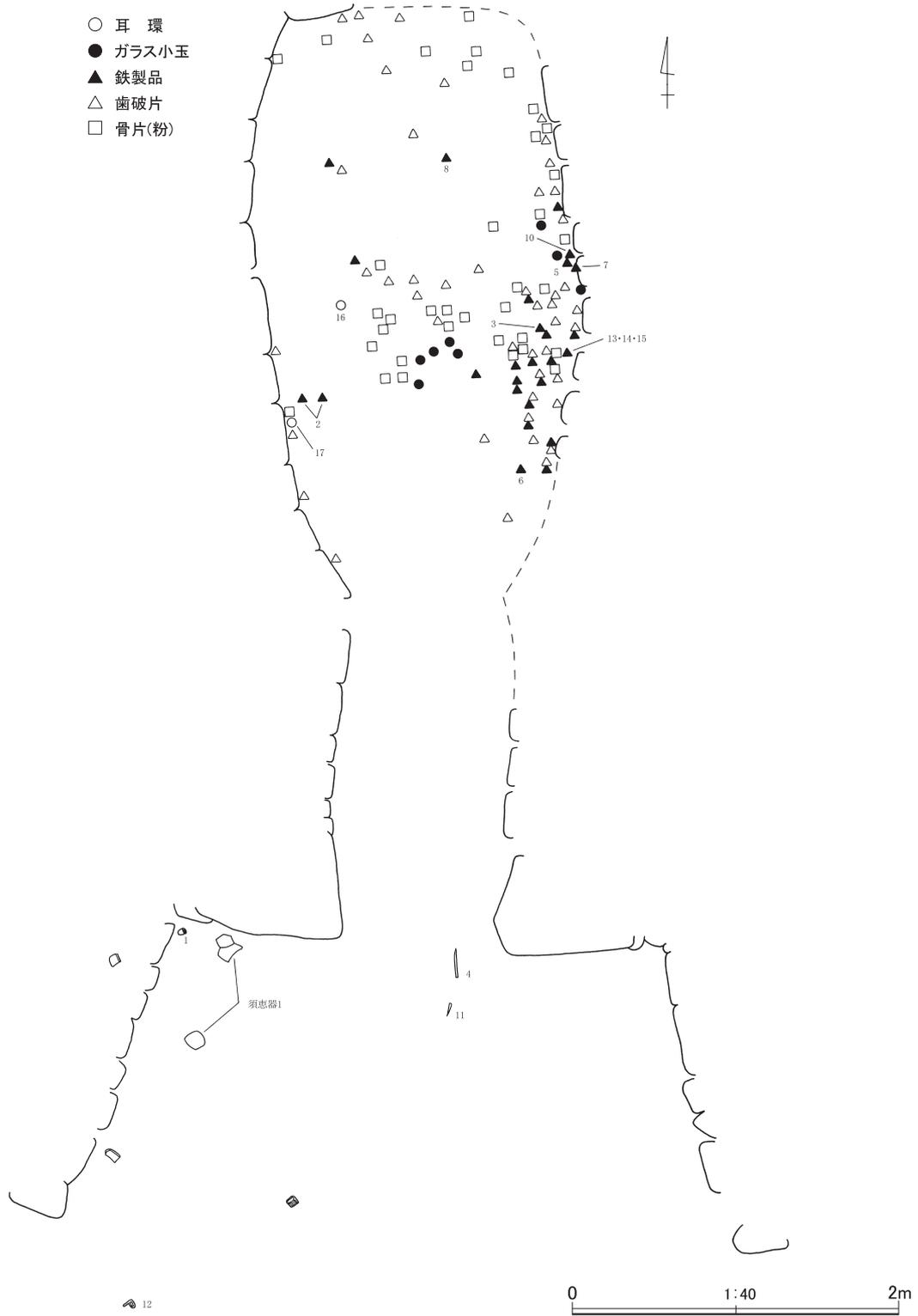
玄室は、南北方向に細長く玄門幅よりも奥壁幅の方がやや広く、最大幅を中位にもつ両袖型の胴張形態であるが、玄門の袖部は不明瞭な形態である。規模は、玄門から奥壁までの南北方向が3.65m、玄門幅が94cm、奥壁幅が1.48m、最大幅が1.94mを測る。壁は、側壁・奥壁とも高さ40cm～45cm程度で、いずれも根石部分が残存している程度である。側壁の石の積み方は、羨道部側壁と同じ片岩系川原石による「模様積み」で、「二列交互重ね積み」の手法によって構築されていたようであり、上方に向かって持ち送りが認められる。奥壁については、ほとんど残存していないため不明であるが、西端に比較的大きな根石が1個水平に置かれていることから、おそらく側壁と同様の「模様積み」であったと考えられる。玄門は、両側とも残存していないが、西側ではその部分に石積みが見られず抜かれたような痕跡が見られることから、一枚石の門柱石であったかもしれない。棺床面は、褐色の砂利層（第12層）を20cm前後埋め戻した上に、長さ15cm～20cmの扁平な川原石を薄く敷き詰め、地山の傾斜に沿って若干傾斜して平坦面を形成している。玄室内からは、骨片（粉）や歯のかけらと思われるようなものが多数散乱して出土しているが、原形を留めるものはない。

石室の掘り方は、地山の切り盛り等による造成等は見られず、玄室壁の根石の部分に、根石の配列や角度を調整するための馬蹄形の浅い掘り込みが見られ、羨道部から玄室にかけてそれらの壁面根石周辺の地山上に、幅70cm～110cmの馬蹄形に多量の礫を敷き詰めて石室の基底面にしている（第34図）。

出土遺物は、比較的少なく、石室内の玄室や前庭部から、刀装具・鉄鏃・耳環などの金属製品、ガラス小玉、提瓶や甕などの須恵器が出土している（第35～38図）。本古墳は、すでに盗掘によって石室内の主要な副葬品はすでに持ち去られていると考えられることから、これらの出土遺物は盗掘の際に取り残されたもので、その出土状態や位置から見て、盗掘時やその後の攪乱によって攪拌され、原



第32図 長沖40号墳石室



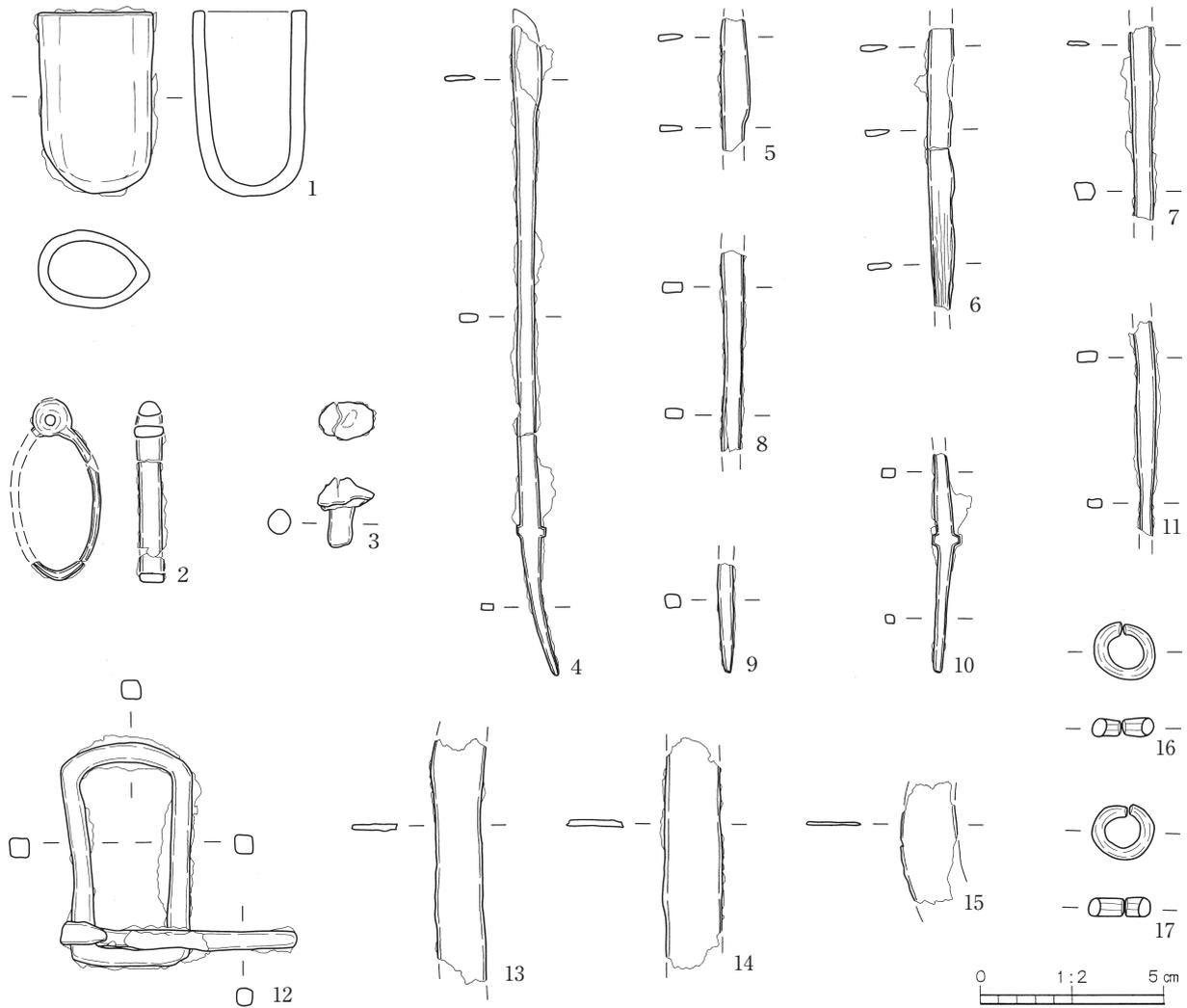
第33図 長沖40号墳石室内遺物出土位置図

置からはかなり移動していると思われる。

金属製品は、刀装具、鉄鎌、耳環、鉸具、鋌、板状製品が出土している(第35図)。刀装具は、鞘尻金具と吊金具があり、いずれも鉄製である。同一の鞘に装着されていたものか分からないが、鞘尻金具は前庭部の北西端から、吊金具は玄室内の西側壁際から出土している。



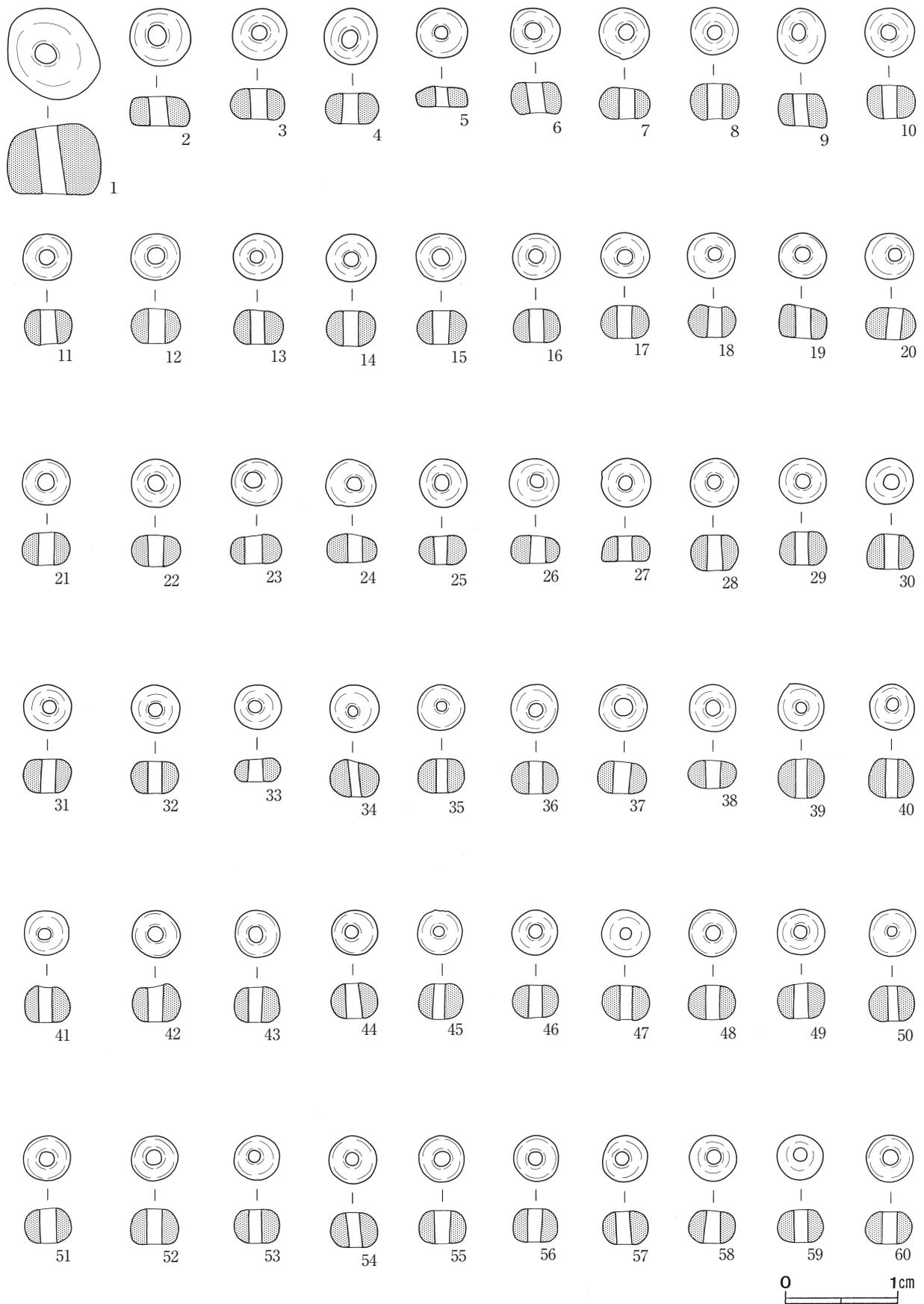
第34图 長沖40号墳石室基底面



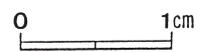
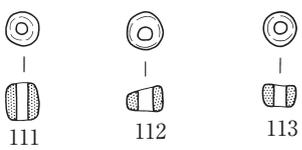
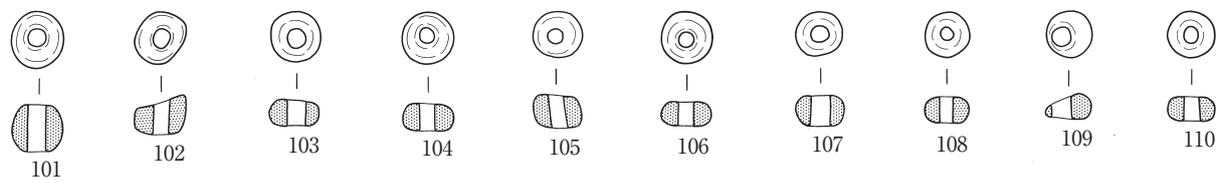
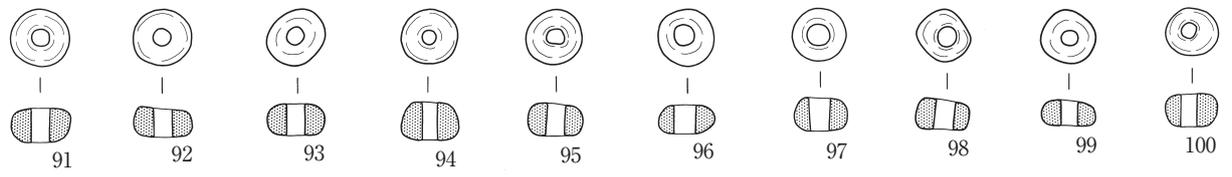
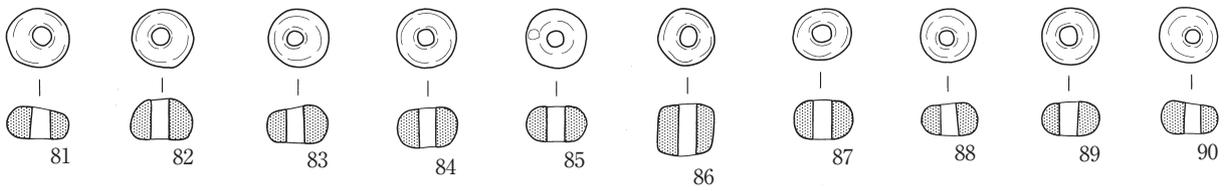
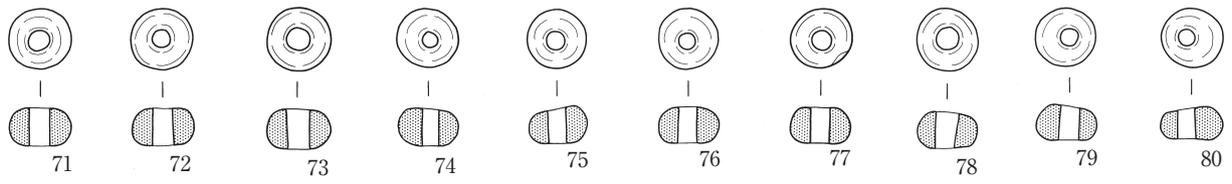
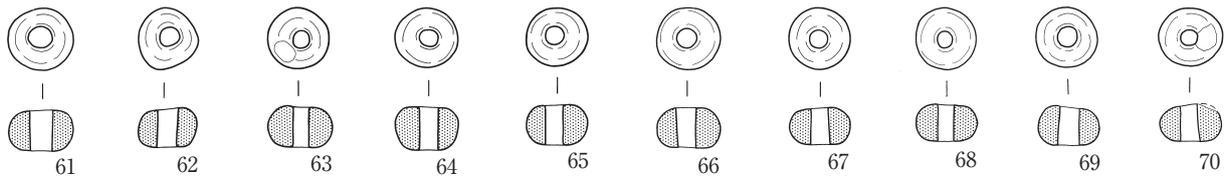
第35図 長沖40号墳石室出土金属製品

長沖40号墳石室出土金属製品観察表

1	鞘尻金具	A.長さ4.8、幅3.1、厚さ2.0、重さ78.40。D.鉄製。F.完形。H.前庭部。
2	吊金具	A.縦5.0、幅0.6、厚さ0.2、重さ3.81。D.鉄製。F.2/3弱。H.玄室内。
3	鋌	A.長さ1.9、頭部径1.0×1.4、軸部径0.6、重さ2.90。D.鉄製。F.完形。H.玄室内。
4	鉄 鍔	A.残存長17.9、頸部11.3、重さ13.21。D.鉄製。F.鍔身上側を欠損。G.片刃鍔。H.前庭部。
5	鉄 鍔	A.残存長3.6、重さ2.15。D.鉄製。F.鍔身の一部。G.片刃鍔。H.玄室内。
6	鉄 鍔	A.残存長7.8、重さ4.68。D.鉄製。F.鍔身と頸部の一部。G.片刃鍔。頸部に木質残存。H.玄室内。
7	鉄 鍔	A.残存長5.2、重さ3.32。D.鉄製。F.鍔身と頸部の一部。H.玄室内。
8	鉄 鍔	A.残存長5.5、重さ4.12。D.鉄製。F.頸部の一部。H.玄室内。
9	鉄 鍔	A.残存長3.0、重さ1.04。D.鉄製。F.茎部の一部。H.玄室内。
10	鉄 鍔	A.残存長6.0、茎部3.3、重さ2.85。D.鉄製。F.頸部の一部～茎部。H.玄室内。
11	鉄 鍔	A.残存長5.9、重さ4.32。D.鉄製。F.頸部の一部。H.前庭部。
12	鉸 具	A.長さ6.1、幅3.5、刺金具6.3、重さ28.67。D.鉄製。F.ほぼ完形。H.前庭部。
13	板状製品	A.残存長6.7、幅1.4、重さ4.61。D.鉄製。F.破片。H.玄室内。
14	板状製品	A.残存長6.3、幅1.5、重さ4.60。D.鉄製。F.破片。H.玄室内。
15	板状製品	A.残存長3.3、幅1.4、重さ1.02。D.鉄製。F.破片。H.玄室内。
16	耳 環	A.縦1.6、横1.6、幅0.5、厚さ0.3、重さ3.30。D.銅地金貼り。F.完形。G.中実。H.玄室内。
17	耳 環	A.縦1.5、横1.6、幅0.5、厚さ0.25、重さ3.44。D.銅地金貼り。F.完形。G.中実。H.玄室内。



第36図 長沖40号墳石室内出土ガラス小玉（1）

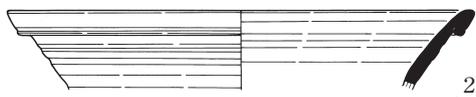
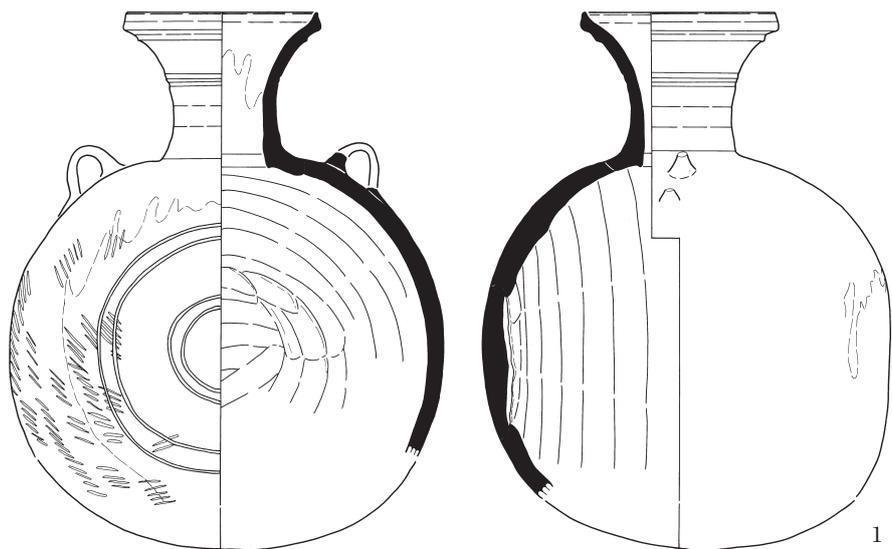


第37図 長沖40号墳石室内出土ガラス小玉（2）

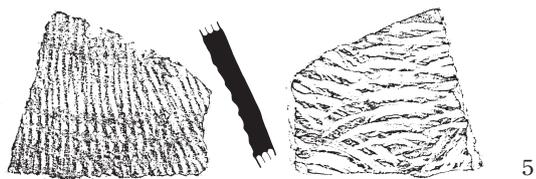
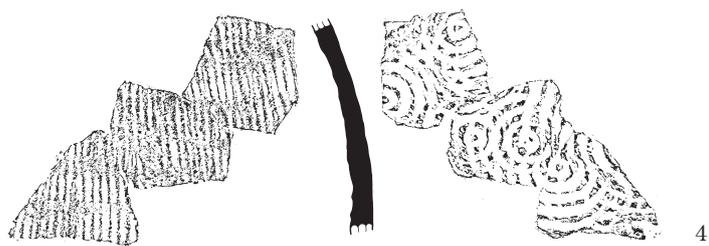
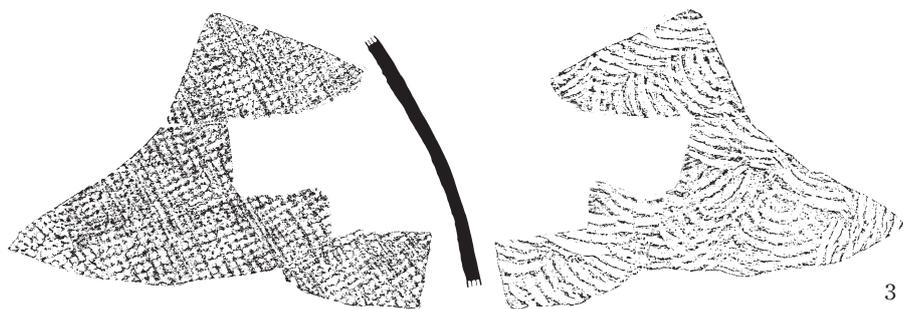
長沖40号墳出土ガラス小玉観察表

1	小	玉	A.直径0.80、高さ0.63、重さ0.60。B.管切りか。D.ガラス製。E.濃紺色。F.完形。G.表面は比較的きれいだ、一部に溶着物。気泡を含む。H.玄室内。
2	小	玉	A.直径0.53、高さ0.25、重さ0.11。B.型作り。D.ガラス製。E.淡緑色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
3	小	玉	A.直径0.48、高さ0.28、重さ0.09。B.型作り。D.ガラス製。E.黄緑色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
4	小	玉	A.直径0.45、高さ0.28、重さ0.09。B.型作り。D.ガラス製。E.黄緑色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
5	小	玉	A.直径0.45、高さ0.18、重さ0.06。B.型作り。D.ガラス製。E.黄緑色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
6	小	玉	A.直径0.44、高さ0.28、重さ0.06。C.研磨。D.鉄石英製。E.暗赤色。F.完形。G.表面は比較的きれい。H.玄室内。
7	小	玉	A.直径0.44、高さ0.28、重さ0.06。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚い。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
8	小	玉	A.直径0.43、高さ0.31、重さ0.07。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
9	小	玉	A.直径0.43、高さ0.30、重さ0.09。B.型作り。D.ガラス製。E.淡緑色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
10	小	玉	A.直径0.43、高さ0.30、重さ0.07。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
11	小	玉	A.直径0.43、高さ0.30、重さ0.07。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れとバリが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
12	小	玉	A.直径0.43、高さ0.30、重さ0.06。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
13	小	玉	A.直径0.43、高さ0.30、重さ0.07。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
14	小	玉	A.直径0.43、高さ0.30、重さ0.05。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚い。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
15	小	玉	A.直径0.43、高さ0.30、重さ0.06。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚い。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
16	小	玉	A.直径0.43、高さ0.30、重さ0.05。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚い。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
17	小	玉	A.直径0.43、高さ0.30、重さ0.05。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
18	小	玉	A.直径0.43、高さ0.29、重さ0.06。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚い。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
19	小	玉	A.直径0.43、高さ0.28、重さ0.08。B.型作り。D.ガラス製。E.淡緑色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
20	小	玉	A.直径0.43、高さ0.28、重さ0.06。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
21	小	玉	A.直径0.43、高さ0.28、重さ0.06。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚い。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
22	小	玉	A.直径0.43、高さ0.28、重さ0.06。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
23	小	玉	A.直径0.43、高さ0.25、重さ0.06。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
24	小	玉	A.直径0.43、高さ0.25、重さ0.06。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚い。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
25	小	玉	A.直径0.43、高さ0.25、重さ0.05。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
26	小	玉	A.直径0.43、高さ0.25、重さ0.05。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
27	小	玉	A.直径0.43、高さ0.23、重さ0.07。B.型作り。D.ガラス製。E.黄緑色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。

82	小	玉	A.直径0.39、高さ0.28、重さ0.05。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
83	小	玉	A.直径0.39、高さ0.25、重さ0.05。B.型作り。D.ガラス製。E.濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
84	小	玉	A.直径0.39、高さ0.25、重さ0.05。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れとバリが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
85	小	玉	A.直径0.39、高さ0.23、重さ0.04。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れとバリが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
86	小	玉	A.直径0.38、高さ0.33、重さ0.07。C.研磨。D.鉄石英製。E.暗赤色。F.完形。G.表面は比較的きれい。H.玄室内。
87	小	玉	A.直径0.38、高さ0.25、重さ0.05。B.型作り。D.ガラス製。E.マリンプール色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
88	小	玉	A.直径0.38、高さ0.23、重さ0.04。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
89	小	玉	A.直径0.38、高さ0.23、重さ0.04。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚い。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
90	小	玉	A.直径0.38、高さ0.23、重さ0.04。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
91	小	玉	A.直径0.38、高さ0.23、重さ0.04。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れとバリが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
92	小	玉	A.直径0.38、高さ0.20、重さ0.04。B.型作り。D.ガラス製。E.濃紺色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
93	小	玉	A.直径0.38、高さ0.20、重さ0.03。B.型作り。D.ガラス製。E.マリンプール色。F.完形。G.表面はやや汚い。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
94	小	玉	A.直径0.37、高さ0.25、重さ0.05。B.型作り。D.ガラス製。E.濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れとバリが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
95	小	玉	A.直径0.36、高さ0.20、重さ0.04。B.型作り。D.ガラス製。E.マリンプール色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
96	小	玉	A.直径0.36、高さ0.18、重さ0.04。B.型作り。D.ガラス製。E.マリンプール色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
97	小	玉	A.直径0.35、高さ0.23、重さ0.04。B.型作り。D.ガラス製。E.濃紺色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
98	小	玉	A.直径0.35、高さ0.20、重さ0.03。C.研磨。D.鉄石英製。E.暗赤色。F.完形。G.表面は比較的きれい。H.玄室内。
99	小	玉	A.直径0.35、高さ0.16、重さ0.02。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
100	小	玉	A.直径0.34、高さ0.24、重さ0.03。B.型作り。D.ガラス製。E.濃紺色。F.完形。G.表面はやや汚い。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
101	小	玉	A.直径0.33、高さ0.30、重さ0.05。B.型作り。D.ガラス製。E.マリンプール色。F.完形。G.表面はやや汚い。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
102	小	玉	A.直径0.33、高さ0.25、重さ0.03。C.研磨。D.鉄石英製。E.暗赤色。F.完形。G.表面は比較的きれい。H.玄室内。
103	小	玉	A.直径0.33、高さ0.18、重さ0.03。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
104	小	玉	A.直径0.33、高さ0.18、重さ0.02。B.型作り。D.ガラス製。E.濃紺色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
105	小	玉	A.直径0.31、高さ0.23、重さ0.03。B.型作り。D.ガラス製。E.黄色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
106	小	玉	A.直径0.31、高さ0.15、重さ0.03。B.型作り。D.ガラス製。E.にぶい淡緑色。F.完形。G.表面はやや汚い。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
107	小	玉	A.直径0.30、高さ0.20、重さ0.02。B.型作り。D.ガラス製。E.濃紺色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
108	小	玉	A.直径0.30、高さ0.18、重さ0.02。B.型作り。D.ガラス製。E.淡緑色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。



0 1:4 10 cm



0 1:3 10 cm

第38图 長沖40号墳出土須恵器

109	小玉	A.直径0.30、高さ0.16、重さ0.02。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
110	小玉	A.直径0.30、高さ0.15、重さ0.02。B.型作り。D.ガラス製。E.くすんだ濃紺色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
111	小玉	A.直径0.23、高さ0.25、重さ0.02。B.型作り。D.ガラス製。E.黄緑色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
112	小玉	A.直径0.23、高さ0.18、重さ0.01以下。B.型作り。D.ガラス製。E.黄緑色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。
113	小玉	A.直径0.21、高さ0.15、重さ0.01以下。B.型作り。D.ガラス製。E.淡緑色。F.完形。G.表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H.玄室内。

長沖40号墳出土須恵器観察表

1	須恵器 提瓶	A.口縁部径10.0、残存高25.8。B.粘土紐積み上げ後ロクロ成形。C.外面、口縁部回転ナデ。頸部二条沈線。胴部平行タタキ後回転ナデ。正面同心円文。背面回転ナデ。内面、口縁～頸部回転ナデ。胴部、回転ナデ。背面・正面閉塞部はナデ。D.黒色粒、白色粒。E.外-オリーブ黒色・灰白色、内-灰オリーブ色・灰色。F.2/3。G.外面と口縁部内面に自然釉。H.前庭部。
2	須恵器 甕	A.口縁部径(24.7)、残存高4.2。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.外-暗灰色、内-灰色。F.口縁部破片。G.内面に自然釉。H.墳丘南東部。
3	須恵器 甕	A.残存高10.1。B.粘土紐積み上げ後タタキ成形。C.外面疑格子目タタキの後ナデ。内面同心円文当て具痕の後ナデ。D.黒色粒。E.内外-灰色。F.破片。H.前庭部。
4	須恵器 甕	A.残存高8.6。B.粘土紐積み上げ後タタキ成形。C.外面平行タタキの後ナデ。内面同心円文当て具痕の後ナデ。D.石英、片岩粒、白色粒。E.内外-灰色。F.破片。H.周辺。
5	須恵器 甕	A.残存高5.8。B.粘土紐積み上げ後タタキ成形。C.外面平行タタキの後ナデ。内面同心円文当て具痕。D.石英、片岩粒、白色粒。E.内外-灰色。F.破片。H.墳丘。

鉄鏃は、玄室内の東側と前庭部の羨門前から出土している。破片が多く散乱して出土しているが、形態が分かるものは長頸鏃が主体で、棘関を持つ鏃身がやや長めの片刃のものである。

耳環は、玄室内の西側からやや離れて2個体が出土している。いずれも、直径1.6cmの小形品で、中実作りの銅地金貼りである。これらは、同じ作りの同一形態のものであることから、一対のものとして被葬者に装着されていた可能性が高いのではないかとと思われる。

鉸具や鉾は、馬具や帯など関係する可能性があるもので、鉸具は前庭部の南西端から出土している。鉾は、かなり変形して玄室内の東側から単独で出土している。

板状製品は、玄室内の東側壁際からかたまって出土している。いずれも形状は分からないが、非常に薄いものであり、板状に剥離した破片である可能性が高い。

ガラス製品は、玄室内の中央部と東側壁際から小玉が113個出土している(第36・37図)。大きさは、直径8mm・高さ6mmのもの(No1)から直径2.1mm・高さ1.5mmのもの(No113)までであるが、主体は直径3mm～4mm・高さ2mm～3mm程度のものである。製作技法は、大半がその特徴から鋳型による型作りと思われる。色調は、大半が濃紺色で、それ以外ではマリンプルー・淡緑色・暗赤色・黄色などが極少数ながら見られる。

須恵器は、提瓶と甕の破片が出土している(第38図)。No1の提瓶は、前庭部の北西側コーナー部付近から複数の破片になって出土している。形態は、胴部がかなり張り、片側が球形で片側に平坦面を残すタイプのもので、本古墳の被葬者に対する前庭部での墓前祭祀に使用されたものであろう。No3の外面に疑格子目の叩きを施す甕の胴部破片も、前庭部から出土している。その他の破片は、墳丘やその周辺から出土したもので、No4とNo5の胴部破片は本古墳と関係する時期のものと考えられる。

第2節 竪穴式住居跡

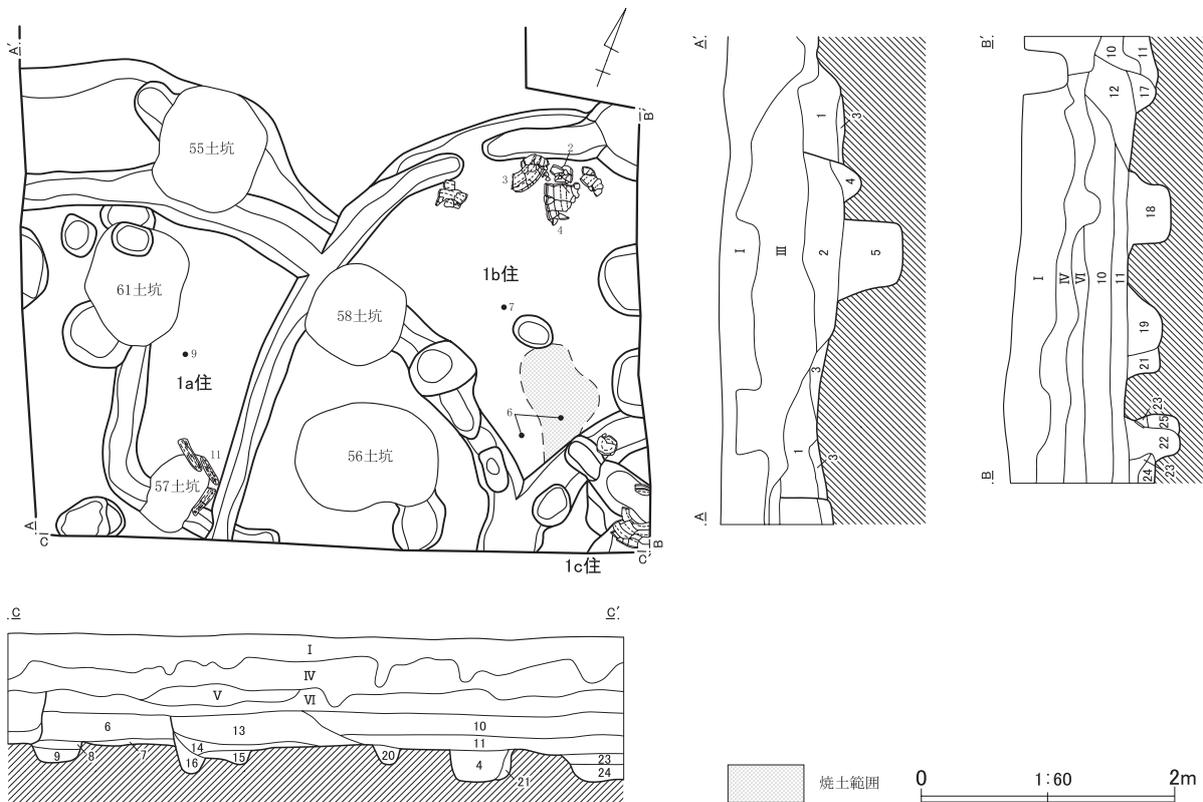
第1 a・1 b・1 c号住居跡（第39図、図版8）

Ⅱ区の調査区南側に位置する。第1 a・1 b・1 c号住居跡の3軒が重複しているが、調査区内で検出されたのはいずれも住居跡の北側の一部だけであるため、遺構の全容は不明である。

第1 a号住居跡は、Ⅱ区の調査区南西端に位置し、住居跡の東側を第1 b号住居跡に、北側壁溝の一部を第55号土坑に切られている。住居跡内に第57号土坑と第61号土坑があるが、新旧関係は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模等は不明である。壁下には幅25cm～45cmの壁溝が巡っており、床面からの深さは15cm～25cmある。炉は、調査区内では確認されておらず、南側の調査区外にあるものと思われる。柱穴も不明であるが、土坑とした第56号土坑と第61号土坑がその形態や位置から支柱穴の可能性も考えられる。遺物は、比較的少なく、覆土中から土器片や石器が少量出土しただけである。

第1 b号住居跡は、Ⅱ区の調査区南東側に位置し、重複する第1 a号住居跡と第1 c号住居跡を切り、第58号土坑に切られている。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模等は不明である。壁は、緩やかに立ち上がり、壁下には幅20cm～30cm、床面からの深さが20cm程度の壁溝が巡っている。炉は、明確な施設や付属物を伴わないが、住居中央部の床面が不整形に焼けている箇所と思われる。柱穴は不明である。覆土中からは、比較的多くの土器片や少数の礫などが出土している。

第1 c号住居跡は、Ⅱ区の調査区南東隅に位置し、重複する第1 b号住居跡に切られている。調査区内では住居北西端の壁溝の一部が検出されただけであるため、遺構の詳細なことは不明であるが、



第39図 第1 a・1 b・1 c号住居跡

第1号住居跡土層説明

第I層：暗褐色土層（瓦礫を多量含む。）

第II層：暗褐色土層（浅間山系A軽石を多量含む。）

第III層：茶褐色土層（浅間山系A軽石を多量に、ローム粒子を少量含む。しまりは有るが、粘性は無い。）

第IV層：明黒褐色土層（ローム粒子を微量含む、暗褐色土を若干混入する。しまり、粘性共に有する。）

第V層：暗茶褐色土層（明褐色土と黒褐色土を若干混入する。しまり、粘性共に有する。）

第VI層：暗茶褐色土層（白色粒子を微量含む、黒褐色土を斑点状に若干混入する。しまり、粘性共に有する。）

<第1a号住居跡>

第1層：明黒褐色土層（ローム粒子、白色粒子を少量、ローム風化土をブロック状に若干含む。しまり、粘性共に有する。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子、白色粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性共に有する。）

第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ロームブロック、炭化物粒を微量含む。しまり強く、粘性を有する。）

第5層：暗褐色土層（炭化物粒を少量、ローム粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第6層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量。ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第7層：暗黄褐色土層（ロームブロック主体の層。しまり強く、粘性を有する。）

第8層：暗褐色土層（ローム小ブロック、炭化物粒を少量均一に、ローム粒子を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第9層：暗褐色土層（組成は第8層に類似するが、含有物の量が少なくやや粘性が強い。）

<第1b号住居跡>

第10層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を微量含む、黒褐色土をブロック状に少量含む。しまり、粘性共に有する。）

第11層：暗茶褐色土層（組成は第10層に類似するが、含有物の量が若干多く色調がやや暗い。）

第12層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量、炭化物粒、ロームブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第13層：明黒褐色土層（炭化物粒を少量、ローム粒を微量含む。しまり、粘性・共に有する。）

第14層：暗茶褐色土層（炭化物粒を少量、ローム粒、ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第15層：明黒褐色土層（ローム粒子を少量含む。しまり、粘性共に有する。）

第16層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ロームブロック、炭化物粒を均一に含む。しまり、粘性共に有する。）

第17層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ローム小ブロックを少量均一に含む。しまり、粘性と共に有する。）

第18層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ローム小ブロックを均一に含む。しまり、強く粘性を有する。）

第19層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性を有する。）

第20層：暗茶褐色土層（ロームブロック、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

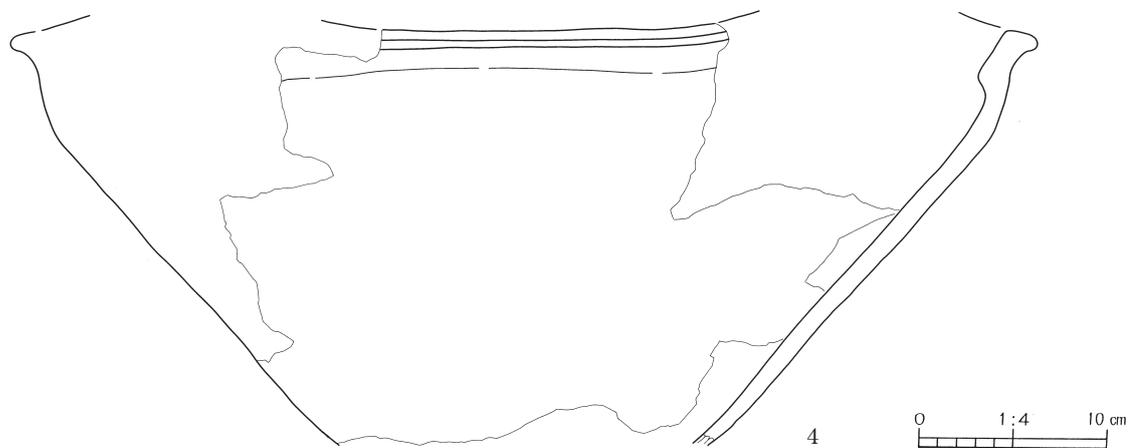
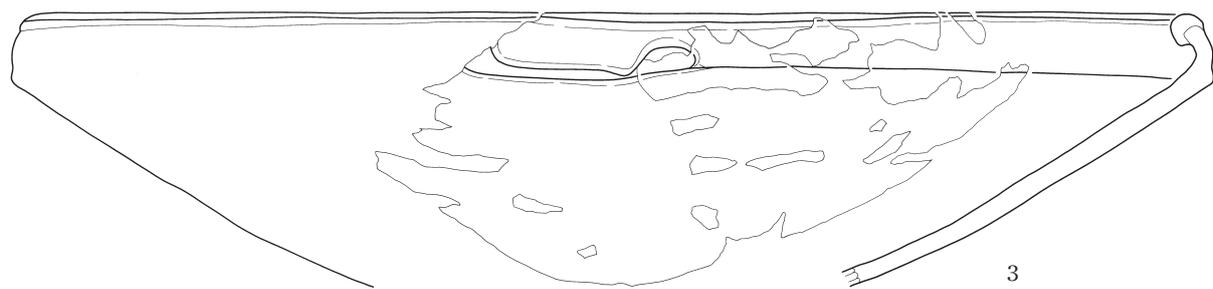
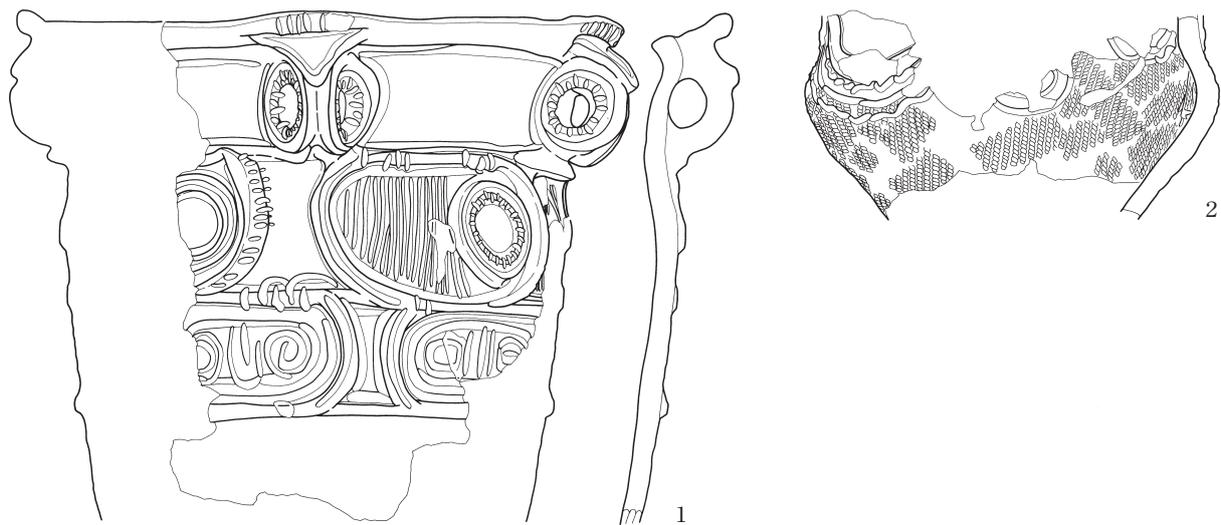
<第1c号住居跡>

第21層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

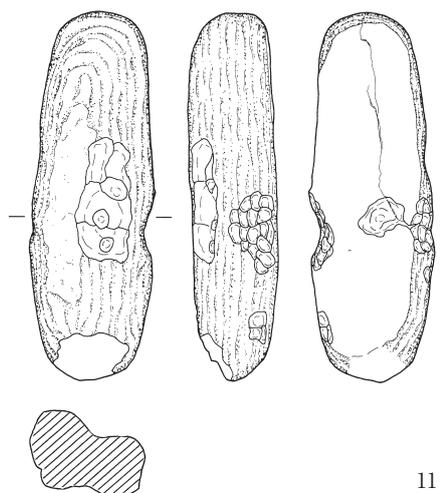
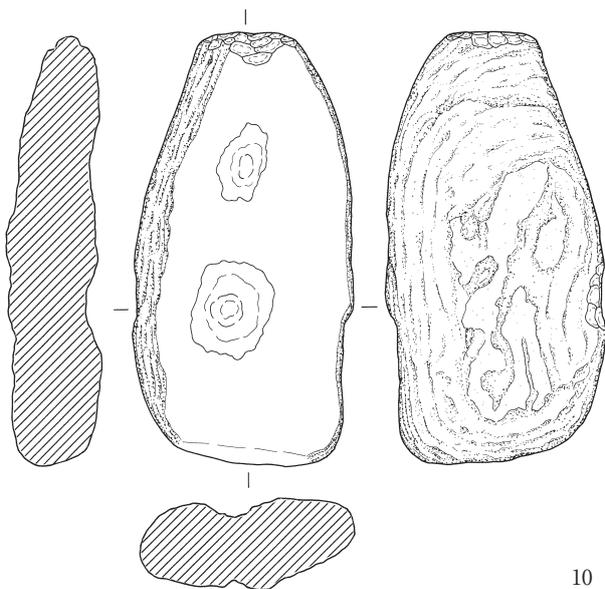
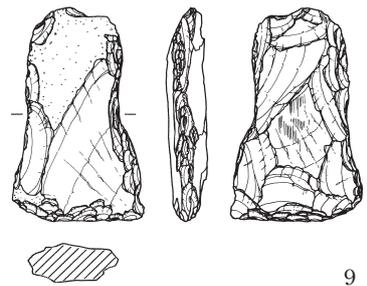
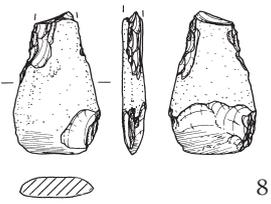
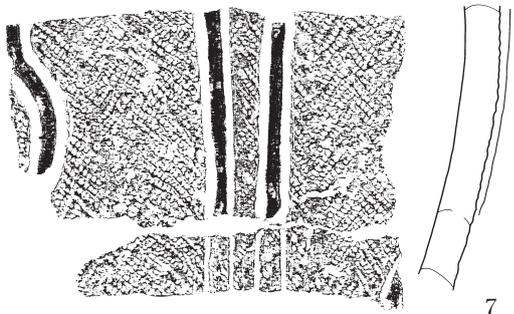
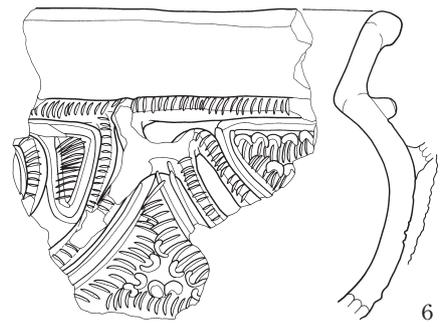
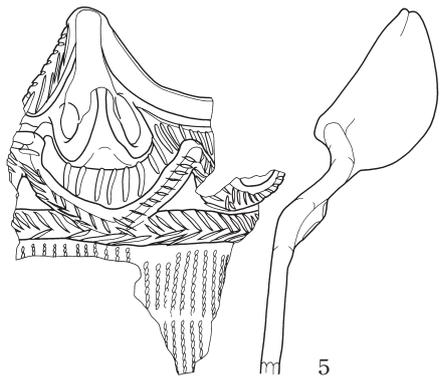
第22層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第1a・1b号住居跡出土遺物観察表

1	深鉢	A.口縁部径(31.5)、残存高27.0。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部に4単位の眼鏡状突起。胴部に二段の楕円区画文を施す。区画文内には沈線による充填文。内面ミガキ。D.片岩粒、チャート粒、砂粒。E.内外-にぶい橙色。F.1/6。H.1ab住覆土中。
2	深鉢	A.残存高10.9。B.粘土紐積み上げ。C.頸部に隆帯を施す。沈線による文様表出。地文に単節縄文LRを斜位施文。内面ミガキ。D.角閃石、砂粒。E.内外-にぶい黄橙色。F.胴部片。H.1b住覆土中。
3	浅鉢	A.口縁部径(60.0)、残存高14.5。B.粘土紐積み上げ。C.波状口縁もしくは口縁部に大型突起が貼付。内外面ともに良く磨かれている。D.片岩粒、白色粒。E.内外-にぶい黄橙色。F.1/6。H.1b住覆土中。
4	浅鉢	A.口縁部径(54.7)、残存高22.0。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部に隆帯による文様表出。内外面ともに良く磨かれる。D.片岩粒、白色粒。E.内外-明黄褐色。F.1/5。H.1b住覆土中。
5	深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部に大形把手を配す。口縁部にキザミをもつ隆帯が廻る。胴部に無節縄文1の捺糸文を縦に施文。内面ミガキ。D.角閃石、片岩粒、黒色粒。E.内外-にぶい橙色。F.口縁部片。H.1ab住覆土中。
6	深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.頸部と胴部に刻みをもつ隆帯が廻る。隆帯区画内に蓮華文と集合沈線を施す。内面ミガキ。D.角閃石、片岩粒、白色粒。E.内外-にぶい橙色。F.口縁部片。H.1b住覆土中。
7	深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.2条1対の懸垂文。地文に単節縄文RLとLRの縦位施文による羽状縄文。内面ミガキ。D.片岩粒、チャート粒。E.内外-にぶい黄橙色。F.胴部片。H.1b住覆土中。
8	磨製石斧	A.全長5.7、幅3.4、厚さ0.9、重さ21.26g。C.撥形の礫を素材とし、礫の形状を利用して刃部と基部に部分的な加工を施す。D.頁岩。F.欠損。G.撥形。刃縁と平行するように擦痕がみられる。H.1ab住覆土中。
9	打製石斧	A.全長8.4、幅5.1、厚さ1.6、重さ75.98g。C.礫皮をもつ剥片を素材とし、周縁に両面加工を施す。D.結晶片岩。F.完形。G.撥形。裏面の素材の主要剥離面に磨耗痕がみられる。H.1a住覆土中。
10	磨/敲/凹石	A.長さ17.2cm、幅8.8cm、厚さ3.7cm、重さ871.3g。C.表面に凹穴2穴。表面から下端にかけて磨耗しており、下端部は特に顕著。上端は敲打痕とみられる剥離痕が連続する。D.結晶片岩。F.完形。H.1a住覆土中。
11	凹石	A.長さ14.6cm、幅5.0cm、厚さ3.6cm、重さ340.1g。C.表・裏・側面中央部に敲打による凹穴。裏面全体は磨耗のため平滑。裏面に亀裂痕が認められる。D.結晶片岩。F.完形。H.1a住覆土中。

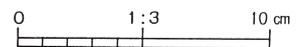


第40図 第1a・1b号住居跡出土遺物(1)



10

11



第41图 第1a·1b号住居跡出土遺物(2)

位置関係から見ると、東側のⅢ区で検出された第2 b号住居跡と同一住居の可能性もある。

第1 a・1 b号住居跡の時期は、一部覆土中に加曾利E 1式後半段階の土器片(No 7)の混入が見られるが、出土遺物の様相や遺構の重複関係から見て、第1 a号住居跡が縄文時代中期の勝坂3式の古い段階、第1 b号住居跡が勝坂3式の新しい段階と考えられる。

第2 a・2 b号住居跡(第42図、図版8)

Ⅲ区の調査区西側に位置する。北側には第4号住居跡の炉や第51号土坑が、南側には第5号住居跡が近接している。第2 a・2 b号住居跡の2軒が重複しているが、調査区内で検出されたのはいずれも住居跡の東側の一部だけであるため、遺構の全容は不明である。

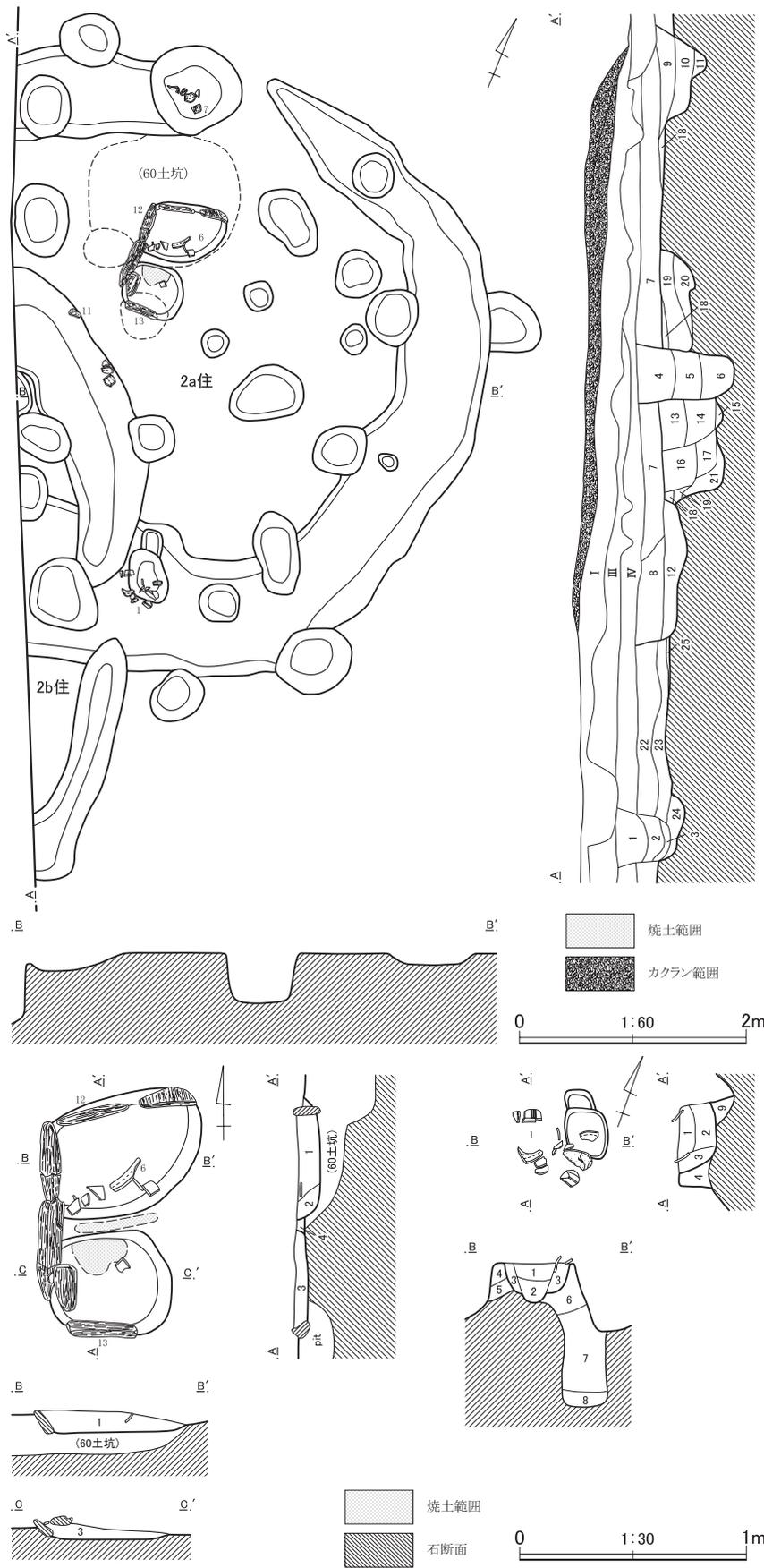
第2 a号住居跡は、Ⅲ区の調査区中央部の西端に位置し、重複する第2 b号住居跡と第60号土坑を切っている。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、南北方向が5.45m、東西方向は4.30mまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cm程度ある。壁下には、幅80cm～100cm、床面からの深さ10cm～20cmのかなり幅広の壁溝が巡っているが、北側で一部途切れている。炉は、住居中央部のやや北側寄りに位置する。棒状の片岩を100cm×80cmの長方形に配列した石囲炉と考えられるが、東側の石列はすでに残存していなかった。床面からの掘り込みは10cm程度で、一部良く焼けて赤色化した部分が見られる。炉内から出土しているNo 6の土器片が、炉体土器の一部であったかもしれない。柱穴は、直径50cm程度のしっかりした掘り込みをもつ円形のピットが、壁溝の内側を距離を置いて巡っているようである。炉と反対側の壁に近い壁溝内に、胴部下半を欠いた深鉢(No 1)が据えられており、いわゆる埋甕の可能性が考えられる。遺物は、埋甕や炉石の他には、覆土中から縄文時代中期の加曾利E 1式を主体とする土器の破片や石器が少量出土しただけである。

第2 b号住居跡は、Ⅲ区の調査区西側の壁際で、住居跡の東側の一部が検出されただけである。平面形は不明であるが、Ⅱ区の第2 c号住居跡と同一住居と考えられるならば、円形もしくは楕円形に近い形態と思われる。壁は緩やかに立ち上がり、壁下には幅40cm～80cm、床面からの深さが15cm程度の幅広の壁溝が巡っている。炉や柱穴は不明である。遺物は比較的少ないが、壁溝内から縄文時代中期の勝坂3式の土器(第43図No 3)が出土している。

第2 a・2 b号住居跡の時期は、出土遺物の様相や第60号土坑との重複関係から見て、第2 a号住居跡が縄文時代中期の加曾利E 1式後半段階、第2 b号住居跡が出土土器からⅡ区の第1 c号住居跡と同じく勝坂3式段階ではないかと思われる。

第2 a・2 b号住居跡観察表

1	深鉢	A. 口縁部径(23.4)、残存高14.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に2条の平行沈線を横に施文。胴部に3条1対の垂下沈線を等間隔に配置。地文に単節縄文RLとLRを縦位羽状施文。内面ミガキ。D. 片岩粒、砂粒。E. 内外-橙色。F. 1/4。H. 2a住埋甕。
2	深鉢	A. 口縁部径(56.0)、残存高20.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 4単位の小波状口縁部。口縁部に隆帯区画。区画内に無節縄文1の撚糸文を縦位施文。内面ミガキ。D. 石英、片岩粒、白色粒。E. 内外-明黄褐色。F. 口縁部片。H. 2a住ピット内。
3	深鉢	A. 残存高17.2、底部径14.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部上半に横位隆帯区画。胴部下半ミガキ。内面ミガキ。D. 片岩粒、チャート、白色粒。E. 内外-橙色。F. 底部から胴部下半1/5。H. 2b住壁溝内。
4	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に渦巻状貼付文と沈線文。胴部に単節縄文LRを横位施文。内面ミガキ。D. 角閃石、片岩粒、チャート。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 口縁部片。H. 2a住埋甕下ピット内。



第42図 第2a・2b号住居跡

第2a・2b号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（表土層）

第Ⅲ層：明黒褐色土層

第Ⅳ層：茶褐色土層

第1層：明黒褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第3層：茶褐色土層（ローム粒子、ロームブロック、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第4層：明黒褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第5層：明黒褐色土層（組成は第4層に類似するが、ローム小ブロックをまばらに含み、しまりがやや強い。）

第6層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを少量含む。少々ザラついており、しまり、粘性共に有するがやや弱い。）

第7層：茶褐色土層（ローム粒子を少量、ローム小ブロックをまばらに含む。しまり、粘性共に有する。）

第8層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第9層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第10層：茶褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第11層：褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを少量含む。しまり強く、粘性有する。）

第12層：茶褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロックをまばらに、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第13層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量含む。しまり強く、粘性を有する。）

- 第14層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量、ローム小ブロック、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）
 第15層：暗黄褐色土層（ローム粒子、ローム小第17層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）
 第16層：茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を少量含み、ローム風化土を若干混入する。しまり、粘性共に有する。）
 第17層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）
 第18層：黄褐色土層（ロームブロック主体の層。張り床面。）
 第19層：茶褐色土層（ローム粒子を均一に、ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）
 第20層：褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを少量含み、黒褐色土を斑点状に若干混入する。しまりを有し、粘性はやや強い。）
 第21層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性共に有するがやや強い。）
 第22層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

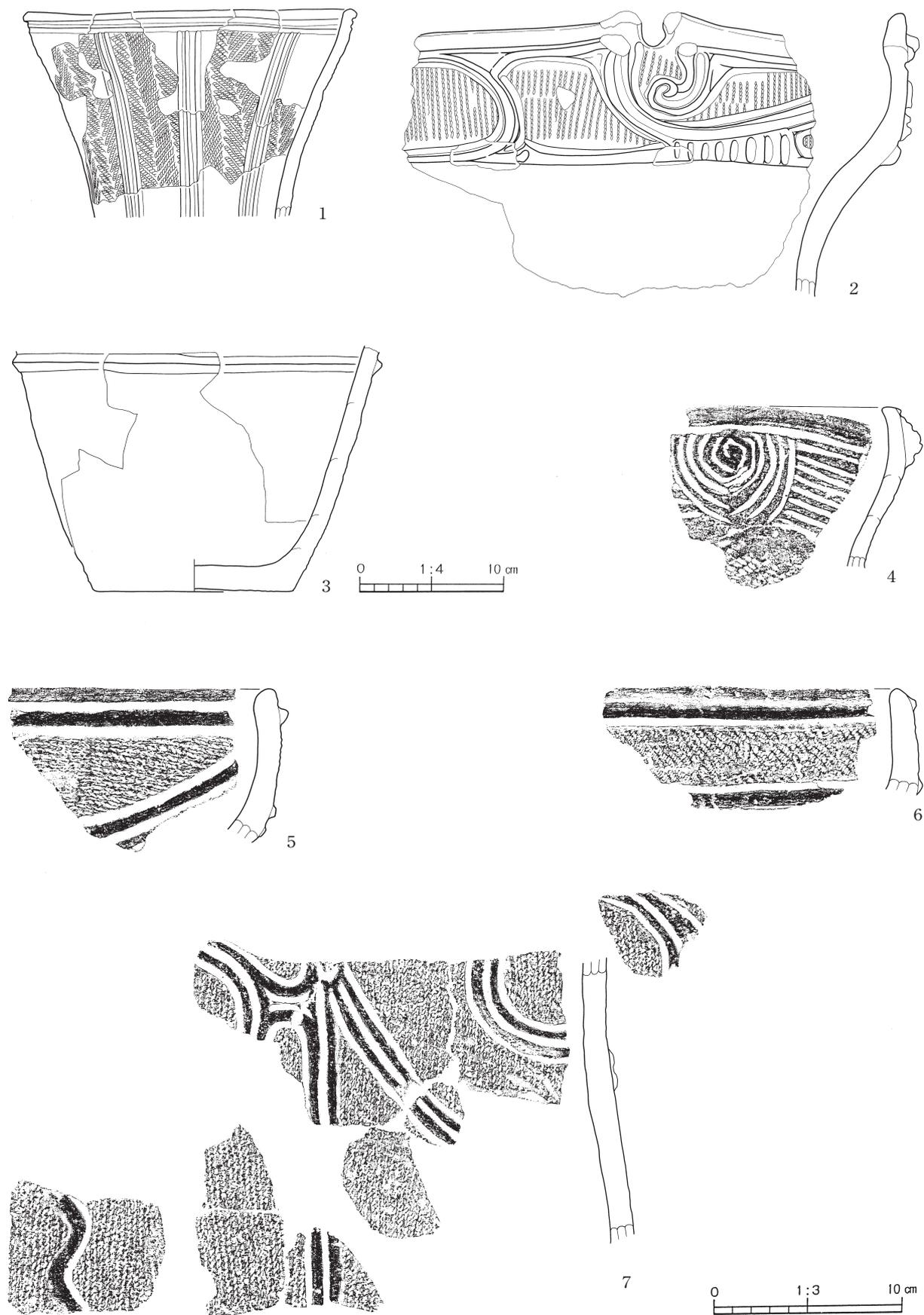
第2a号住居跡炉土層説明

- 第1層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm以下の白色粒子を若干含む。）
 第2層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm程度のローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を多く含む。）
 第3層：暗褐色土層（第2層に類似するが、ローム粒子の含有量がやや多い。）
 第4層：暗褐色土層（第3層に類似するが、径1mm以下の焼土、ローム粒子を若干含む。）

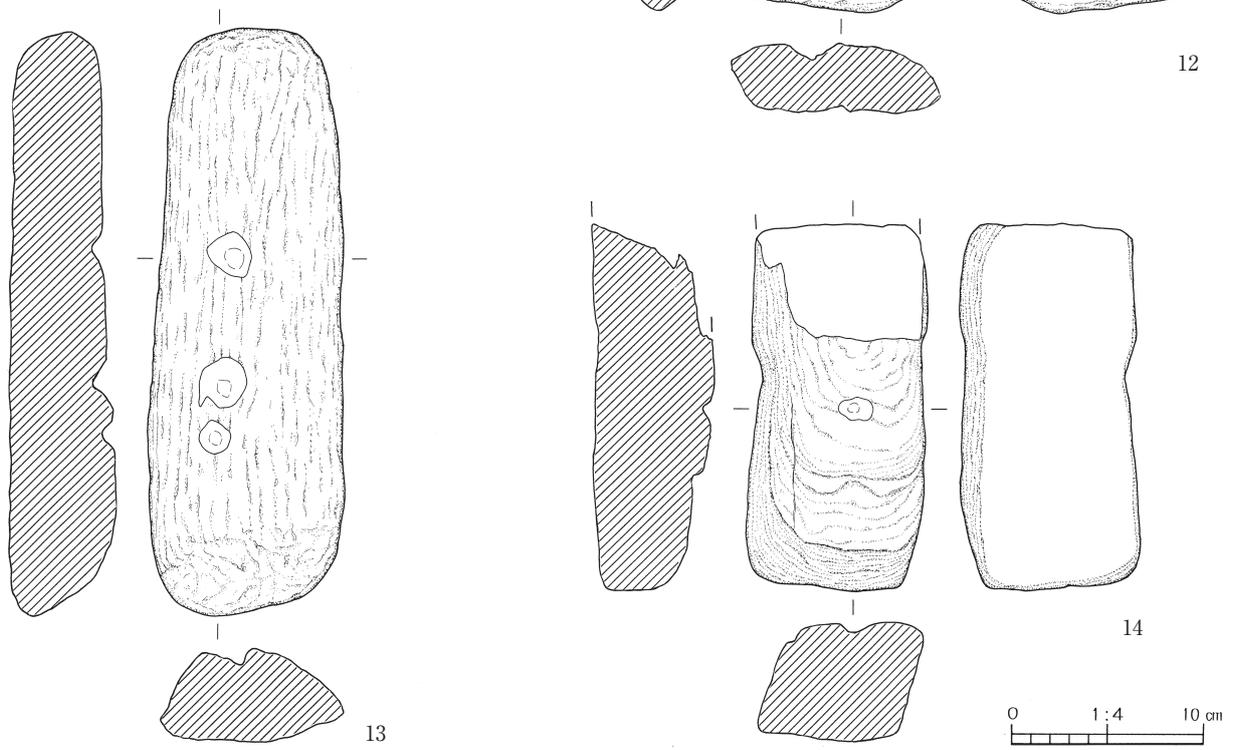
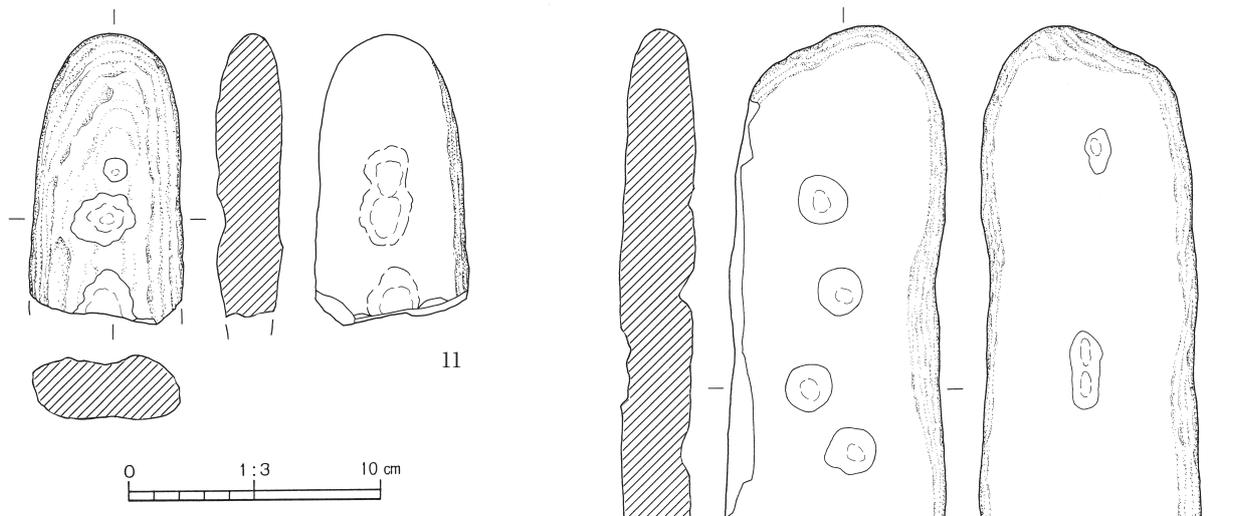
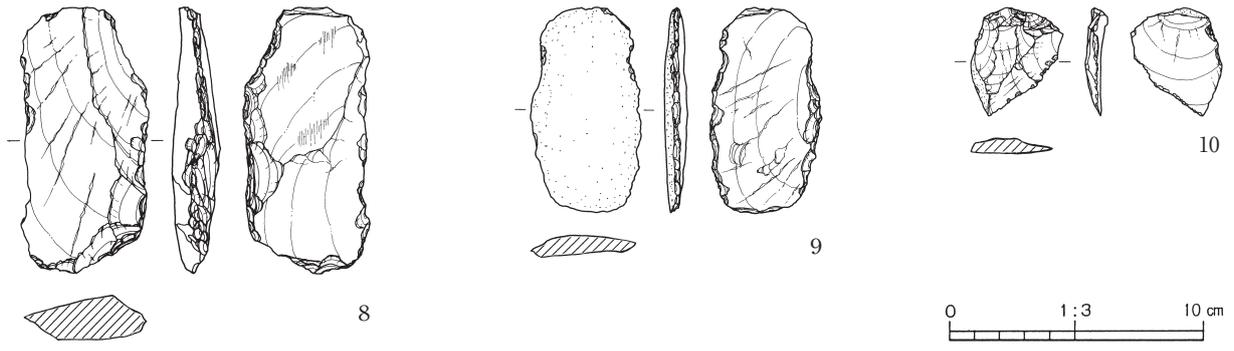
第2a号住居跡埋壘土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子、白色粒子を微量含む。しまり、粘性共に有する。）
 第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）
 第3層：明黒褐色土層（ローム粒子、ローム小ブロックを少量均一に含む。しまり、粘性共に有する。）
 第4層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化物粒を極微量含む。しまり、粘性共に有する。）
 第5層：暗黄褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性共に有する。）
 第6層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を均一に、ロームブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）
 第7層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒、ローム小ブロックを微量含む。やや粒状感があり、しまりを有するが粘性はやや強い。）
 第8層：茶褐色土層（ローム粒子を少量含む。粒状感が強く、しまりを有し粘性は強い。）
 第9層：明黒褐色土層（ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性共に有する。）

5	深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部は隆帯区画。区画内に無節縄文rの捺糸文を横位施文。内面ミガキ。D.片岩粒・白色粒。E.内外-にぶい黄橙色。F.口縁部片。H.2b住覆土中。
6	深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部に隆帯区画。区画内に単節縄文RLを横位施文。D.角閃石、片岩粒、赤色粒。E.内外-にぶい黄橙色。F.口縁部片。H.2a住炉内。
7	深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.胴部に隆線文。地文に無節lの捺糸文を縦位施文。内面ミガキ。D.角閃石、片岩粒、赤色粒。E.内外-浅黄橙色。F.胴部片。H.2a住ピット上面。
8	両面加工石器	A.全長10.6、幅5.0、厚さ1.9、重さ96.69g。C.剥片を素材として、左側縁を主体的に加工を施す。D.ホルンフェルス。F.完形。G.裏面の素材剥離面に磨耗痕がみられる。H.2a住覆土中。
9	スクレイパー	A.全長8.2、幅4.3、厚さ0.9、重さ38.56g。C.礫皮をもつ剥片を素材とし、素材腹面を主体として周縁に加工を施す。D.ホルンフェルス。F.完形。H.2a住覆土中。
10	剥片	A.全長4.3、幅3.6、厚さ0.8、重さ8.72g。C.礫皮をもつ剥片を素材とし、縁辺に二次加工を施す。D.頁岩。F.完形。H.2a住覆土中。
11	凹/磨石	A.残存長11.5、幅5.1、厚さ1.7、重さ335.3g。C.下部欠損。表・裏面に凹穴各3穴。裏面は摩耗により凹穴が不明瞭。D.緑泥片岩。F.2/3。H.2a住覆土中。
12	台/多孔石	A.長さ30.35、残存幅11.7、残存厚3.95、重さ2422.6g。C.一部欠損。表面に4穴、裏面に2穴の凹穴がある。両面に磨耗痕が認められる。D.結晶片岩。F.ほぼ完形。H.2a住炉石。
13	凹石	A.長さ31.4、幅10.4、厚さ5.65、重さ2716.5g。C.表面に3つの凹穴がある。明確な摩耗は認められない。D.結晶片岩。F.完形。H.2a住炉石。
14	台/凹石	A.残存長19.6、残存幅9.65、残存厚6.5、重さ1990.0g。C.上部欠損。表面中央に凹穴1穴。裏面には摩耗によりやや平滑。D.結晶片岩。F.ほぼ完形。H.2a住覆土中。



第43図 第2 a・2 b号住居跡出土遺物(1)



第44图 第2 a · 2 b号住居跡出土遺物 (2)

第3号住居跡（第45図、図版8）

Ⅲ区の調査区南東端に位置し、北側には第6号住居跡の炉と第7号住居跡の炉が近接している。調査区内で検出されたのは、住居跡の北西側の一部だけであるため、遺構の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強く、壁がやや張る方形ぎみの形態ではないかと思われる。壁は緩やかに立ち上がり、壁下には幅が30cm～60cm、床面からの深さが15cm程度の壁溝が巡っている。炉は、住居中央部のやや北側寄りに位置する。規模が40cm×45cmの円形の掘り方の中に、長さ20cm弱のやや大形の片岩系の石を敷並べるように多数充填した、該期の集石土坑と同様の形態のものである。住居跡内には小規模な不定形で浅いピットが多く見られるが、柱穴の形態や配列の仕方は不明である。遺物は、炉内や覆土中から加曾利E1式を主体とする土器の破片や石器が少量出土している。

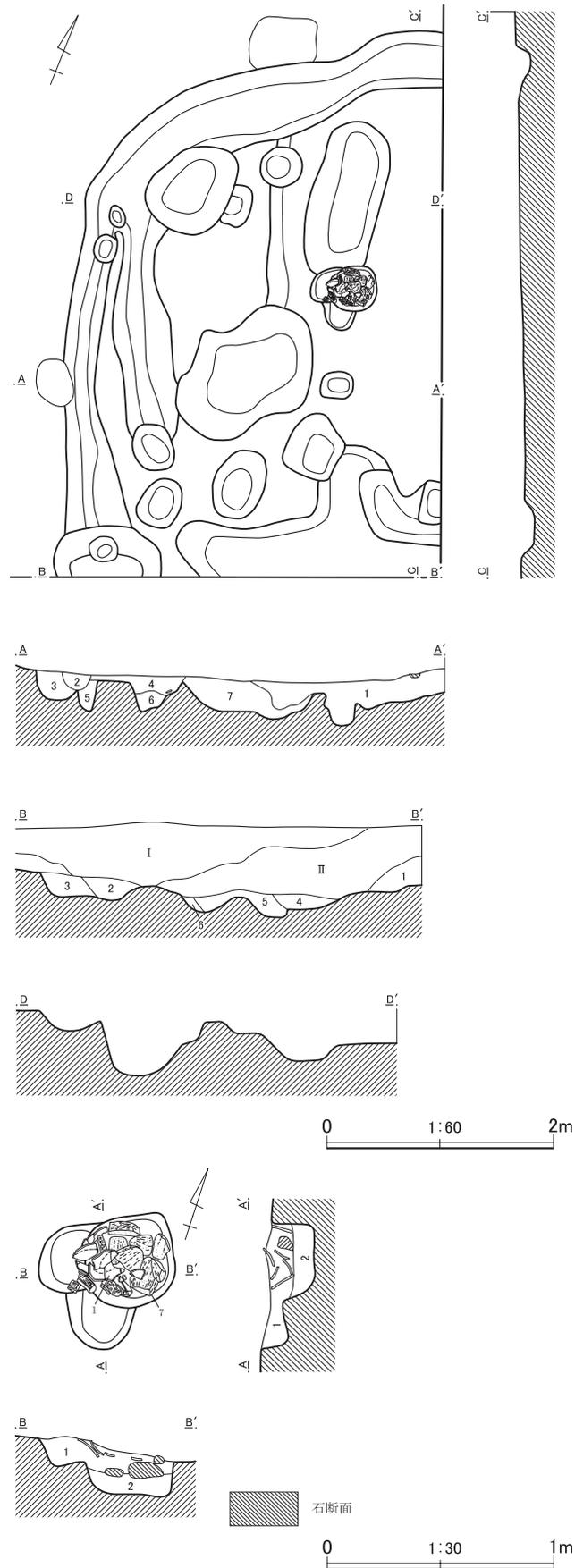
本住居跡の時期は、出土遺物の様相から、縄文時代中期の加曾利E1式の後半段階と考えられる。

第3号住居跡土層説明

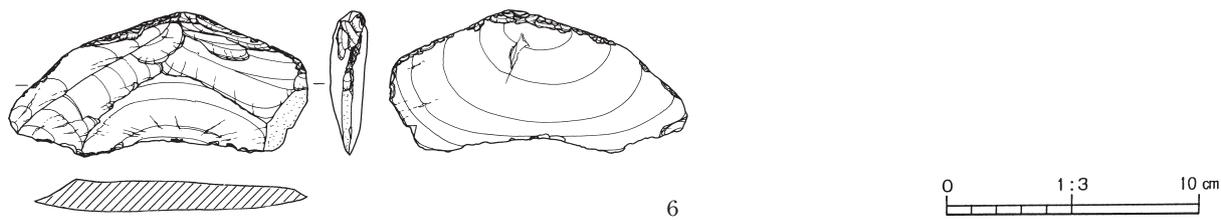
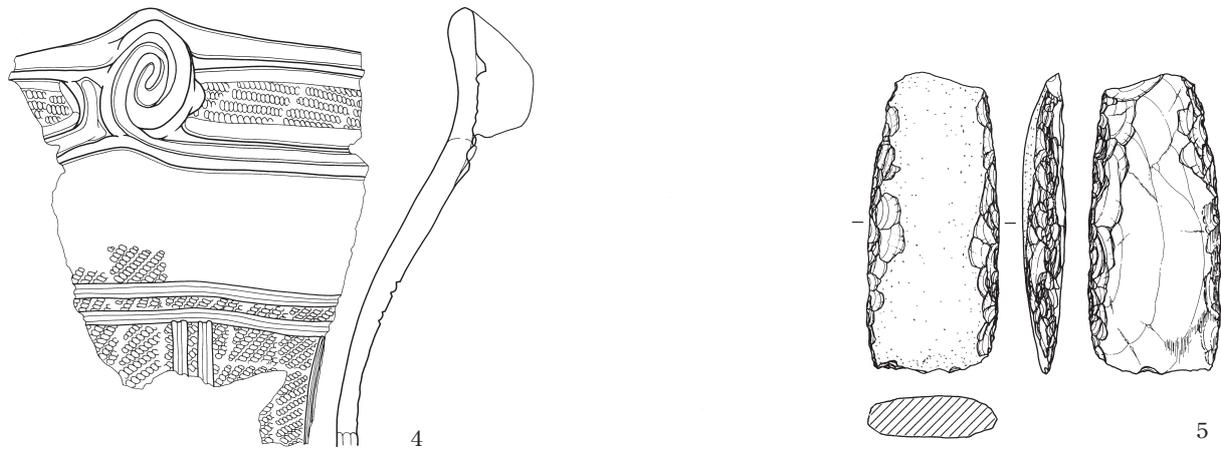
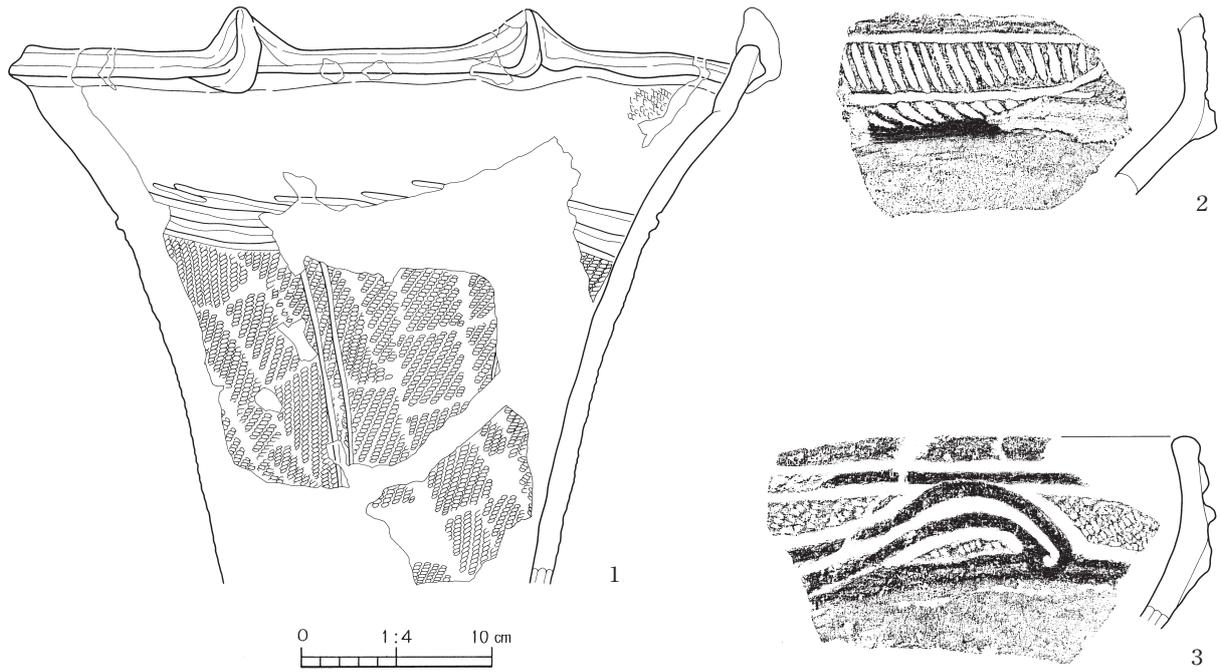
- 第1層：暗褐色土層（しまり、粘性若干あり。径1～5mm程度のローム粒子を多く、炭化物粒を若干含む。）
- 第2層：暗褐色土層（しまり、粘性若干あり。径1mm程度のローム、炭化物粒を若干含む。）
- 第3層：明褐色土層（しまり、粘性あり。径1～2mm程度のローム粒を多く含む。）
- 第4層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1～2mm程度のローム粒子を若干含む。）
- 第5層：明褐色土層（しまり、粘性あり。径1～2mm程度のローム粒子を多く含む。）
- 第6層：明褐色土層（しまり、粘性あり。第5層に類似する。）
- 第7層：暗褐色土層（しまり、粘性非常に強い。径1mm程度の白色粒子を多く含む。土質が非常に硬質である。）

第3号住居跡炉土層説明

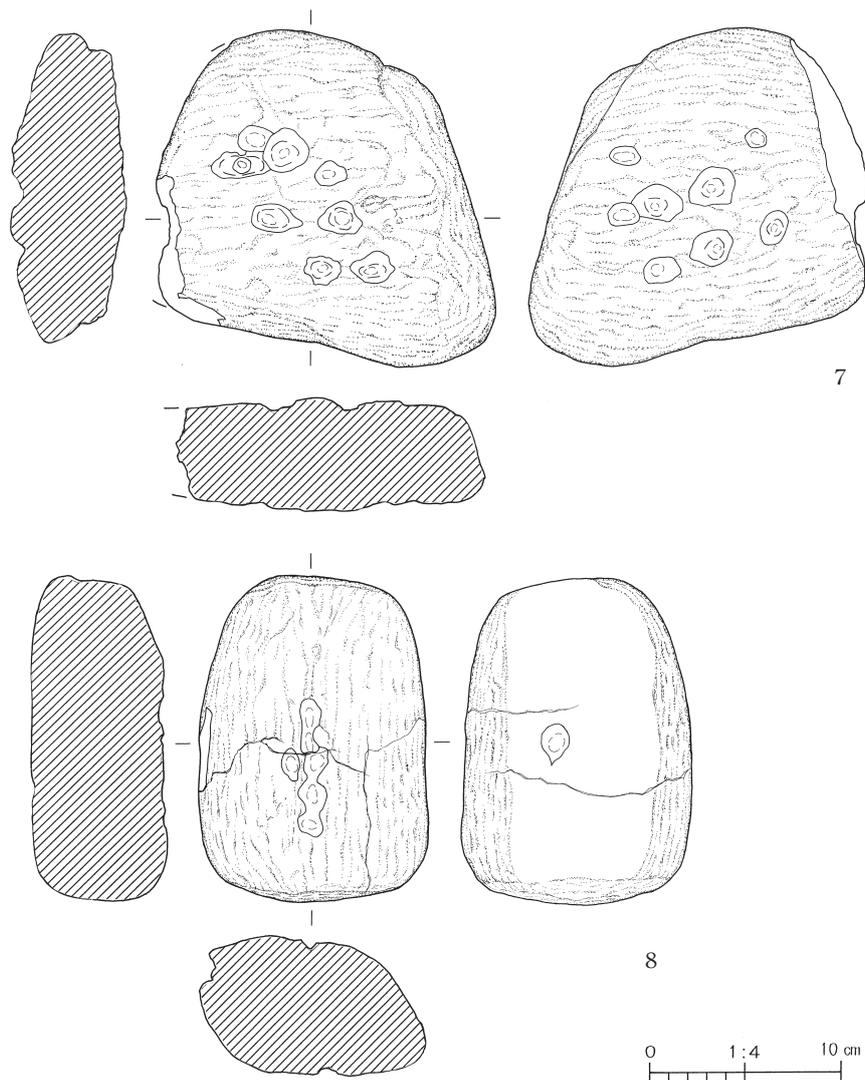
- 第1層：明黒褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化物粒、ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有するが弱い。）
- 第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを多量、焼土粒子、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有するが弱い。）



第45図 第3号住居跡



第46图 第3号住居跡出土遺物（1）



第47図 第3号住居跡出土遺物（2）

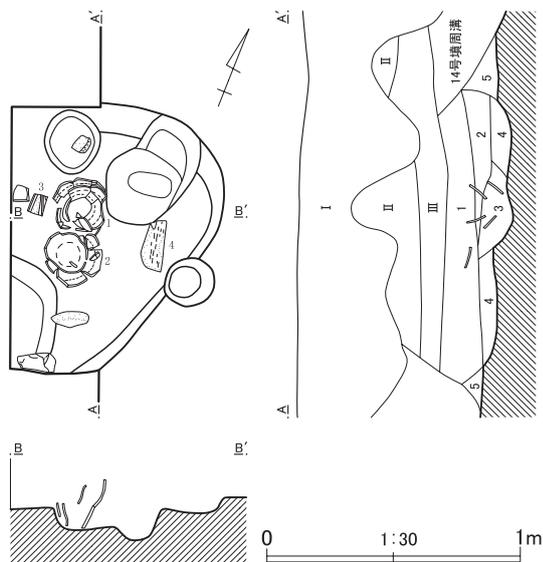
第3号住居跡出土遺物観察表

1	深鉢	A. 口縁部径 (38.4)、残存高 30.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に2個1対の突起を貼付。頸部無文。胴部に2条の懸垂文。単節縄文 RL を縦位施文。内面ミガキ。D. 角閃石、片岩粒、白色粒。E. 内外- 灰黄褐色。F. 1/3。H. 炉内。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部にキザミをもつ隆帯区画。区画内には縦位沈線を充填施文。内面ミガキ。D. 角閃石、片岩粒、砂粒。E. 内外- 浅黄色。F. 胴部片。H. 炉内。
3	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に隆帯区画。区画内単節縄文 LR を充填施文。内面ミガキ。D. 角閃石、片岩粒、砂粒。E. 内外- にぶい黄橙色。F. 口縁部片。H. 覆土中。
4	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に隆帯区画と渦巻状突起。区画内に単節縄文 RL を斜位施文。頸部無文。胴部に半截竹管状工具による2段の横位上端区画と2条の懸垂文。単節縄文 RL を縦位施文。内面ミガキ。D. 角閃石、片岩粒、白色粒。E. 内外- にぶい黄橙色。F. 口縁部片。H. 炉内。
5	両面加工石	A. 全長 12.0、幅 5.2、厚さ 1.7、重さ 138.72 g。C. 礫皮をもつ剥片を素材とし、両側縁を主体的に両面加工を施す。D. 硬質砂岩。F. 完形。G. 短冊形。左側縁に磨耗痕がみられる。H. 覆土中。
6	スクレイパー	A. 全長 5.7、幅 11.7、厚さ 1.5、重さ 85.13 g。C. 礫皮をもつ剥片を素材とし、素材打面側を主体とした二次加工を施す。D. 頁岩。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
7	凹石	A. 長さ 17.9、残存幅 17.95、厚さ 6.05、重さ 2525.7 g。C. 一部欠損。表面に8穴、裏面に8穴の凹穴が認められる。磨耗痕は認められない。D. 結晶片岩。F. 1/2。H. 炉内。
8	凹/台石	A. 長さ 17.5、幅 12.15、厚さ 7.5、重さ 2287.5 g。C. 被熱の影響とみられる亀裂痕が表・裏面に認められる。表面6穴、裏面1穴の凹穴がある。裏面に磨耗痕とみられる平坦面をもつ。D. 片岩。F. 完形。H. 炉内。

第4号住居跡（第48図、図版8）

Ⅲ区の北側寄りの調査区西壁際に位置しており、住居跡の北側を長沖14号墳の周溝に切られている。南側には第2a号住居跡が近接しているが、時期的には本住居跡の方が新しい。残存していたのは、住居跡の炉だけであるため、本住居跡の詳細は不明である。

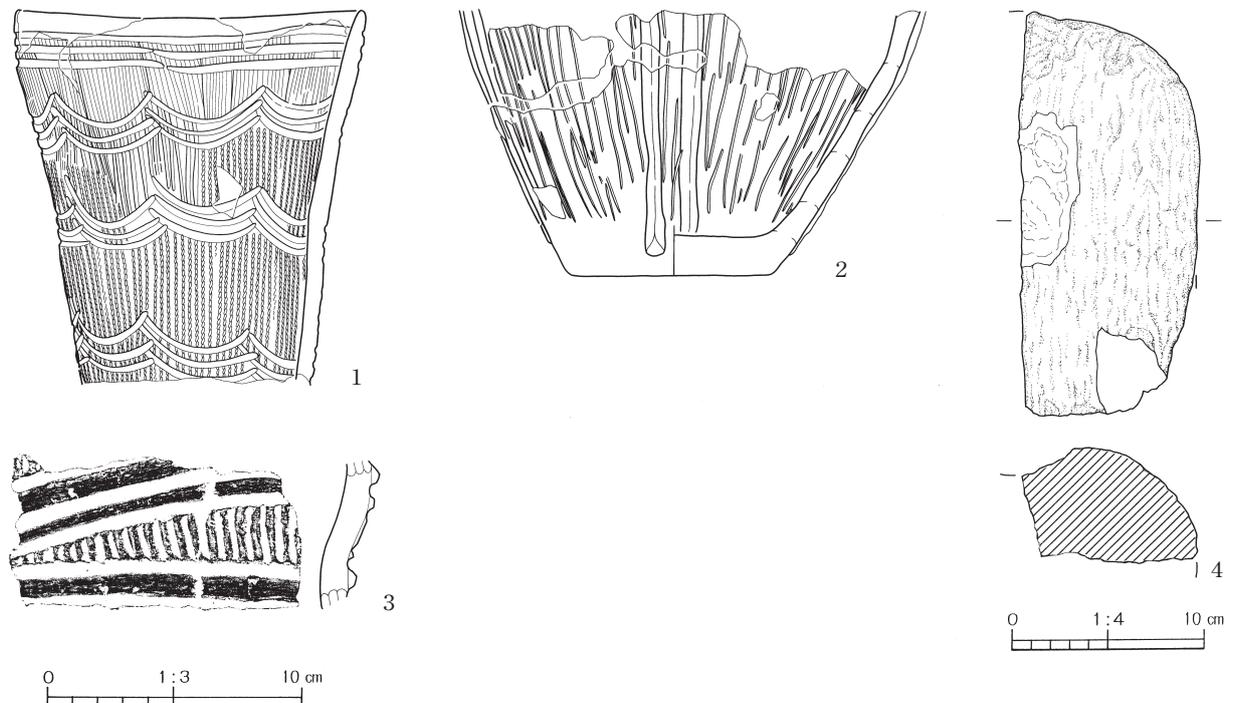
炉は、120cm×100cm程度の楕円形ぎみの形態で、確認面からは10cm程度の掘り込みをもつ。中央付近に、下半を欠いた深鉢形土器(No1)と上半を欠いた深鉢形土器(No2)が2個南北に並んで埋設さ



第4号住居跡炉土層説明

- 第Ⅰ層：暗褐色土層（現表土。）
- 第Ⅱ層：暗褐色土層（組成は表土に近いが浅間山系A軽石の含有量が少ない。）
- 第Ⅲ層：明黒褐色土層
 - 第1層：暗褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）
 - 第2層：茶褐色土層（炭化物粒を少量、ローム粒子を微量含む。しまり強く、粘性を有する。）
 - 第3層：暗褐色土層（ローム粒子、炭化物粒、焼土粒子を微量含む。しまり、粘性共に有する。）
 - 第4層：茶褐色土層（ローム粒子、ローム小ブロックを多量に、炭化物粒を少量含む。しまりを有するが、粘性は弱い。）
 - 第5層：暗茶褐色土層（ローム粒子を微量含む。しまり強く、粘性を有する。）

第48図 第4号住居跡炉



第49図 第4号住居跡炉内出土遺物

れている。周囲に長さ20cm程度の片岩が複数散在することから、あるいは石囲炉であったかもしれない。

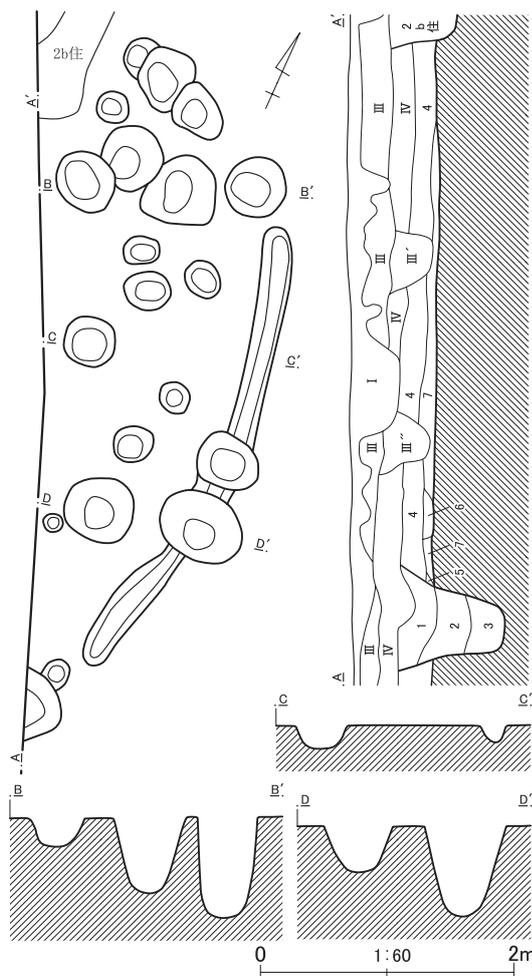
本住居跡の時期は、炉に埋設された炉体土器等から、縄文時代中期の加曽利E 2式の段階と考えられる。

第4号住居跡炉内出土遺物観察表

1	深鉢	A. 口縁部径(17.9)、残存高19.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に3条の平行沈線と胴部に3条単位の連弧文を3段施文。地文に口縁部付近は櫛歯状条線文、胴部は無節rの撚糸文を縦位施文。内面ミガキ。D. 片岩粒、砂粒。E. 内外-橙色。F. 2/3。H. 炉内。
2	深鉢	A. 残存高15.5、底部径15.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部に隆帯による2条1対の懸垂文。地文に縦位短沈線を施文。内面ミガキ。D. 角閃石・片岩粒・白色粒・黒色粒・砂粒。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 1/3。H. 炉内。
3	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部付近隆帯区画。区画内縦位沈線を充填施文。内面ミガキ。D. 片岩粒・黒色粒。E. 内外-にぶい橙色。F. 胴部片。H. 炉内。
4	凹石	A. 残存長21.55、残存幅9.55、残存厚6.25、重さ2022.5g。C. 欠損品。表面中央部に凹穴1穴あり。D. 結晶片岩。F. 1/2。H. 炉内。

第5号住居跡(第50図、図版9)

Ⅲ区の南側寄りの調査区西端に位置している。北側には第2b号住居跡が近接しているが、直接の新旧関係は不明である。調査区内で検出されたのは、住居跡の東側の壁溝の一部と性格不明の多くの



第50図 第5号住居跡

第5号住居跡土層説明

- 第I層：暗褐色土層（現表土。）
- 第II層：暗褐色土層（組成は表土に近い。）
- 第III層：明黒褐色土層
- 第III'層：明黒褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を微量含む。ややザラついており、しまり、粘性共に有する。）
- 第III''層：茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第IV層：茶褐色土層
- 第1層：茶褐色土層（ローム粒子を微量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化物粒を少量、ロームブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ローム小ブロックを多量に炭化物粒を微量含む、第2層より色調がやや明るい。しまり、粘性共に有する。）
- 第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量、ローム小ブロック、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を少量含む、ローム風化土を混入する。しまりを有するが、粘性はやや弱い。）
- 第6層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを均一に含む。しまり強く、粘性を有する。）
- 第7層：暗黄褐色土層（ロームブロックを主体とし、黒褐色土を混入する。しまり強く、粘性を有する。）

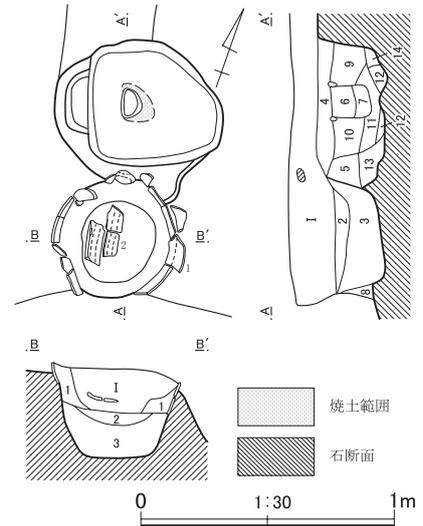
ピットだけであるため、本住居跡の詳細は不明である。遺物は、何も出土しなかった。

本住居跡の時期は、出土遺物がないため不明であるが、その後住居跡上に古墳時代中期の長沖14号墳の墳丘が構築されていたことを考えると、周囲の他の住居跡と同じく、縄文時代中期の可能性が高いと思われる。

第6号住居跡（第51図、図版9）

Ⅲ区の調査区南東側に位置し、南側に第3号住居跡が、西側に第7号住居跡の炉が近接している。住居跡の北側から東側は、後世の第1号溝跡によって削平されており、残存していたのは炉だけであるため、本住居跡の詳細は不明である。

炉は、南北に並んで2個検出されている。これらは、同時に存在していたものではなく、新旧関係を有することから作り変えによるものと考えられ、断面の土層観察の結果では、南側の炉が北側の炉を切っている。古い北側の炉は、54cm×50cmの不整形で、確認面からの深さは25cmあり、底面は広く平坦である。覆土途中に直径12cm程度のピット状の掘り込みがあり、ピットの縁は良く焼けて赤色化している。このピット状の掘り込みは、おそらく小形の炉体土器を抜き取った痕と思われる。新しい南側の炉は、直径50cmの円形の形態で、確認面からの深さは25cmあり、底面は広く平坦である。上半に、胴下半を欠いた大形の深鉢形土器（第52図No1）を炉体土器として埋設している。遺物は、炉内から土器の破片が少量出土しただけである。



第51図 第6号住居跡炉

本住居跡の時期は、出土土器の様相から見て、縄文時代中期の加曾利E3式後半段階と考えられる。

第6号住居跡炉土層説明

第1層：暗褐色土層（現代の攪乱。）

第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量含む。しまり、粘性共に有するがやや弱い。）

第2層：明黒褐色土層（炭化物粒を少量含む。しまり、粘性共に有する。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を微量含む、灰分を若干混入する。しまり、粘性共に有するがやや弱い。）

第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量、炭化物粒、ロームブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第5層：暗褐色土層（炭化物粒を微量含む。しまりはやや強く、粘性を有する。）

第6層：暗橙褐色土層（焼土ブロック、焼土粒子を多量に炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第7層：褐色土層（炭化物粒、ローム粒子を少量含む、灰粉を多量に混入する。しまり、粘性共に有するが弱い。）

第8層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第9層：明黒褐色土層（ローム粒子、ローム小ブロックを少量、炭化物粒、焼土粒子を微量含む。しまりはなく、粘性も弱い。）

第10層：暗茶褐色土層（炭化物粒を少量、焼土粒子、ローム粒子を微量含む。しまりを有するが、粘性はやや弱い。）

第11層：暗褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を極微量含む。しまり強く、粘性を有する。）

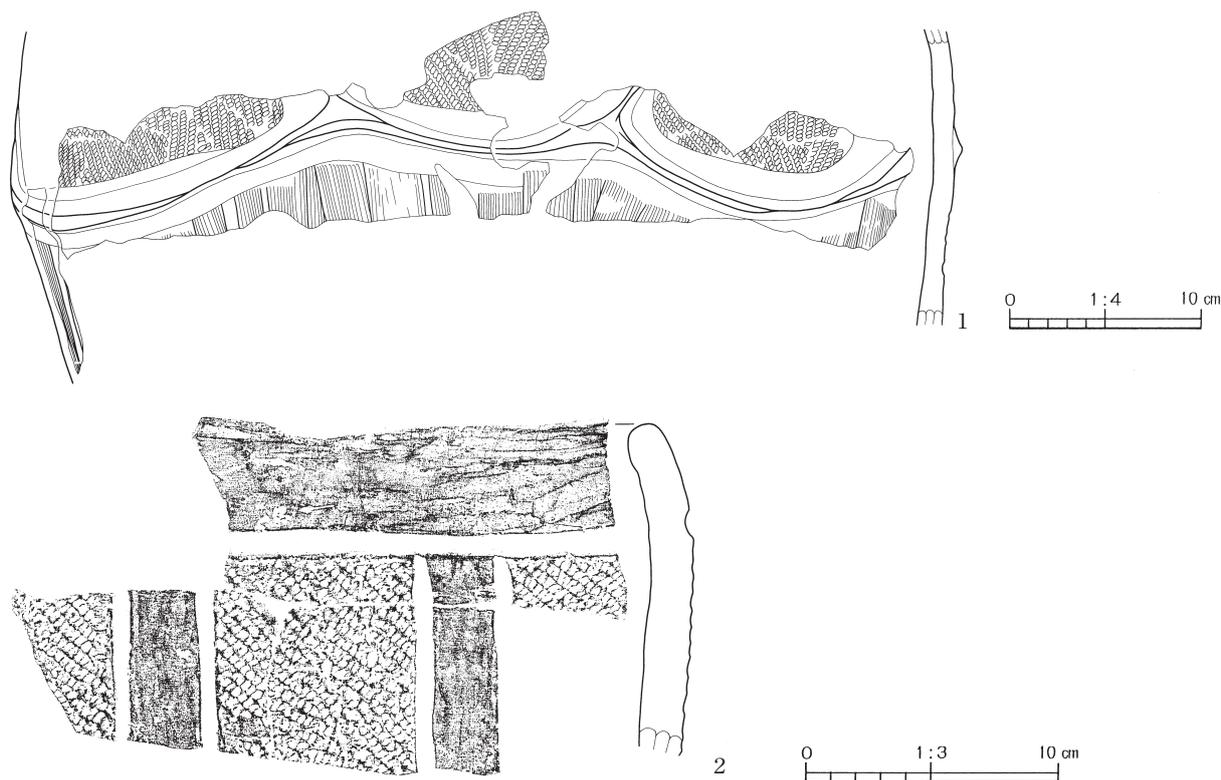
第12層：暗褐色土層（炭化物粒を極微量含む。色調は第11層より暗い。しまり強く、粘性を有する。）

第13層：暗褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を微量含む、黒褐色土を若干混入する。しまり、粘性共に強い。）

第14層：黄褐色土層（ローム。）

第6号住居跡炉内出土遺物観察表

1	深鉢	A. 残存高 18.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に隆帯区画。区画内に単節縄文 RL を充填施文。胴部に縦位の櫛歯状条線文。D. 角閃石・片岩粒・白色粒・黑色粒。E. 内外-浅黄橙色。F. 胴部片。H. 炉体。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に横位沈線区画。胴部に2条1対の懸垂文。胴部に単節縄文 LR を縦位施文。区画内磨消。D. 角閃石・片岩粒・白色粒。E. 内外-におい黄橙色。F. 口縁部片。H. 炉内。

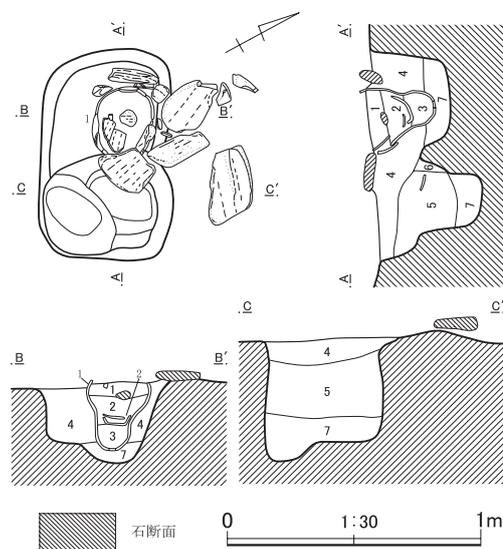


第52図 第6号住居跡炉内出土遺物

第7号住居跡（第53図、図版9）

Ⅲ区の調査区南東側に位置し、南側には第3号住居跡が、東側には第6号住居跡の炉が近接している。検出されたのは炉だけであるため、本住居跡の詳細は不明である。炉の周囲には、ピットが多数見られるが、いずれも本住居跡との関係は明確ではない。

炉は、平面形が80cm×50cmの隅丸長方形を呈するが、断面の形状では、確認面からの深さが40cm～45cmのピット状の掘り込みと、深さ30cm程度の土坑状の掘り込みが連結したような形態である。これらは同時に開口していたものではなく、南東側の深いピット状の掘り込みがある程度埋まった後に、北西側の土坑状の掘り込み内に底部を欠いた深鉢形土器（第54図No1）を正位に埋設して



第53図 第7号住居跡炉

第7号住居跡炉土層説明

- 第1層：明黒褐色土層（ローム粒子を少量、炭化物粒を微量含む。粒状感が強く、しまり、粘性共に弱い。）
- 第2層：明黒褐色土層（炭化物粒を少量含む。しまりを有するが粘性はやや弱い。）
- 第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを均一に含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ローム小ブロック、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有するがやや弱い。）
- 第5層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を少量含む。色調は第4層より暗く、しまり、粘性共に有する。）
- 第6層：明褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。しまり強く、粘性を有する。）
- 第7層：暗灰褐色土層（炭化物粒を少量含む、黒褐色土を混入する。しまり、粘性共に有する。）

いる。この埋設した土器には、口縁部の周囲を比較的長い棒状や拳大の片岩を主体とする石で囲繞していた形跡が見られる。また、その北東側には長さ25cm前後の板状の片岩系の石が4個敷かれていたような状態で出土していることから、部分的な敷石が施されていた可能性がある。遺物は、炉内から出土した土器だけで、埋設されたNo 1の深鉢形土器の中から、胴部の上半以上を欠いた深鉢形土器(第54図No 2)が出土している。

本住居跡の時期は、出土土器の様相から見て、縄文時代中期の加曽利E 3式後半段階と考えられる。



第54図 第7号住居跡炉内出土遺物

第7号住居跡炉内出土遺物観察表

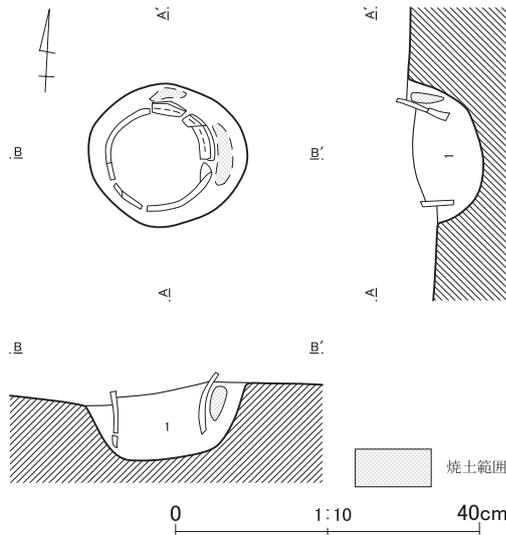
1	深鉢	A. 口縁部径(24.6)、残存高30.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 4単位の小波状口縁。胴部に渦巻文。渦巻文内磨消。地文に単節縄文RLを縦位施文。内面ミガキ。爆ぜ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-にぶい黄橙色。F. ほぼ完形。H. 炉内。
2	深鉢	A. 残存高9.6、底部径7.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部に懸垂文。地文に単節縄文LRを縦位施文。懸垂文脇を磨消。内面ミガキ。D. 角閃石、片岩粒、黒色粒。E. 内外-浅黄色。F. 1/3。H. No 1内。

第8号住居跡(第55図、図版9)

IV区のAトレンチ西端に位置する。検出されたのは炉だけであるが、周辺には住居跡に関する壁溝やピットなどの痕跡が全く見られないことから、住居に帰属する炉か明確ではない。

炉は、平面形が22cm×20cmの円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度で、底面は広く平坦である。炉の掘り込み内には、胴部下半を欠いた深鉢形土器が正位で埋設されているが、口縁部は削平により欠失している。炉体土器の内部や掘り込みの底面にはあまり焼けた痕跡は見られないが、炉体土器の外側には一部焼けて赤色化した部分が見られる。遺物は、炉内の炉体土器だけで、炉の周辺からも土器等は全く出土していない。

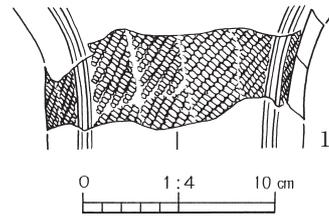
本炉の時期は、炉体土器の時期から、縄文時代中期の加曽利E 2式と考えられる。



第55図 第8号住居跡炉

第8号住居跡炉土層説明

第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を少量、焼土粒子を微量含む。しまり、粘性共に有するがやや弱い。）



第56図 第8号住居跡炉内出土遺物

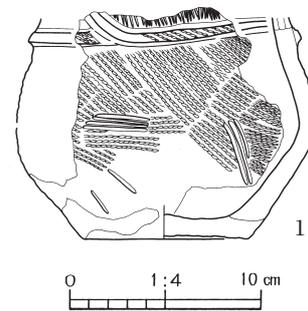
第8号住居跡炉内出土遺物観察表

1	深鉢	A. 胴部径 13.6、残存高 6.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部に縦位2条の沈線を4単位施文。地文に単節縄文RLを縦位施文。内面ミガキ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 胴部のみ。H. 炉体。
---	----	--

第3節 土坑

第48号土坑（第58図、図版9）

I区の調査区南側の東壁際に位置し、北側には第49号土坑が近接している。土坑の東側半分は調査区外のため、遺構の全容は不明である。平面形は不明で、規模は南北方向が65cm、東西方向が23cmまで測れる。壁は、上半が緩やかに傾斜しているのに対して、下半は傾斜が急になって深くなっている。確認面からの深さは、42cmある。底面は、広く平坦である。調査区壁面の土層観察では、この傾斜が緩やかな上半の覆土は、下半の覆土とは異なる浅間山系B軽石を含む茶褐色土（第1層）であり、下半とは遺構や時期が違う可能性が高い。遺物は、覆土中から縄文時代中期の加曽利E1式前半段階の深鉢形土器（第57図No1）が出土しただけである。



第57図 第48号土坑出土遺物

本土坑の時期は、部分的な調査であるため明確ではないが、出土遺物から縄文時代中期の加曽利E1式前半段階の可能性が高い。

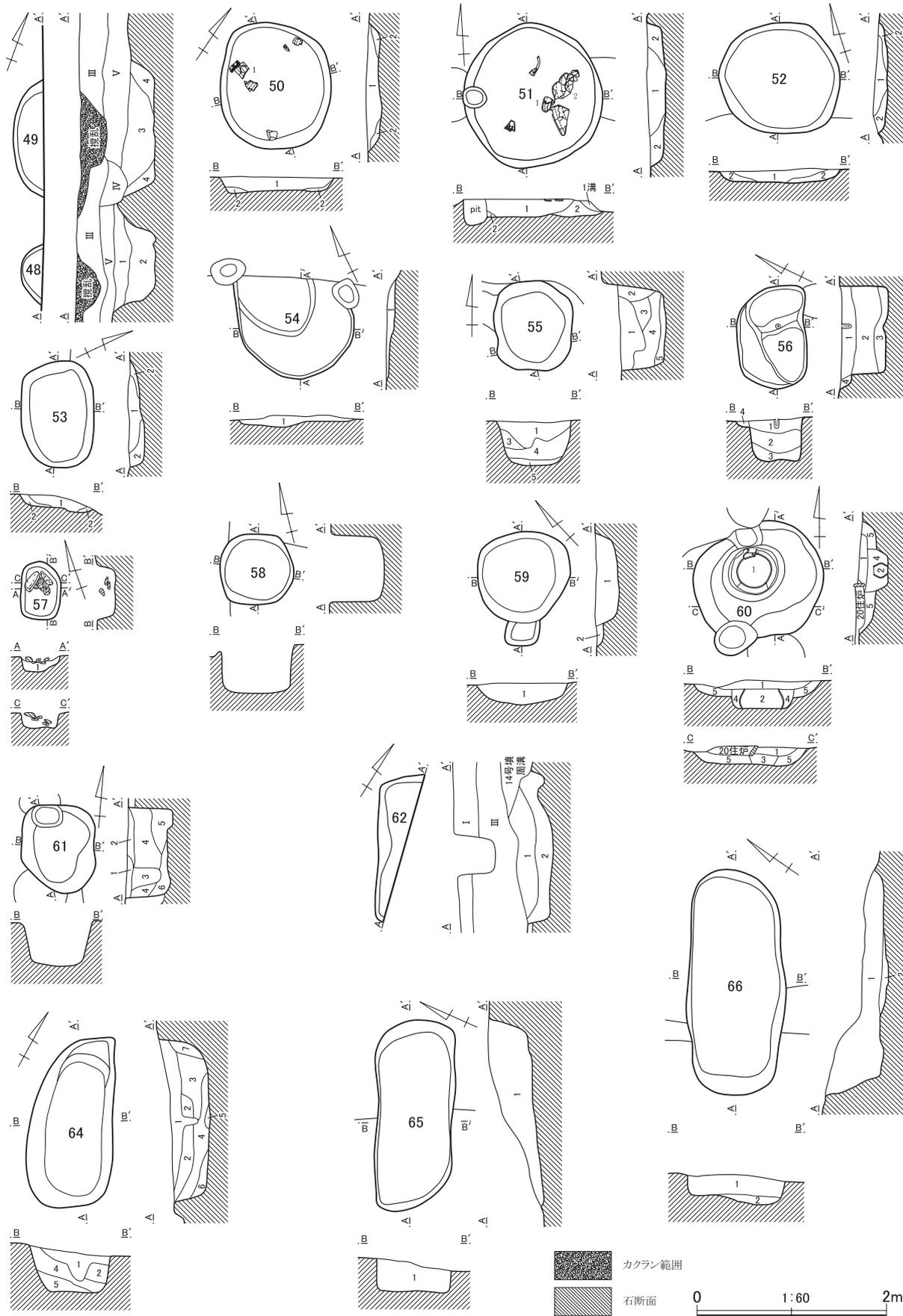
第48号土坑出土遺物観察表

1	深鉢	A. 残存高 (12.0)、底部径 9.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部に横位隆帯区画。区画内に単沈線を充填施文。胴部下半に無節rの撚糸文を斜位施文。D. 石英、砂粒。E. 内外一淡黄橙色。F. 1/2。H. 覆土中。
---	----	---

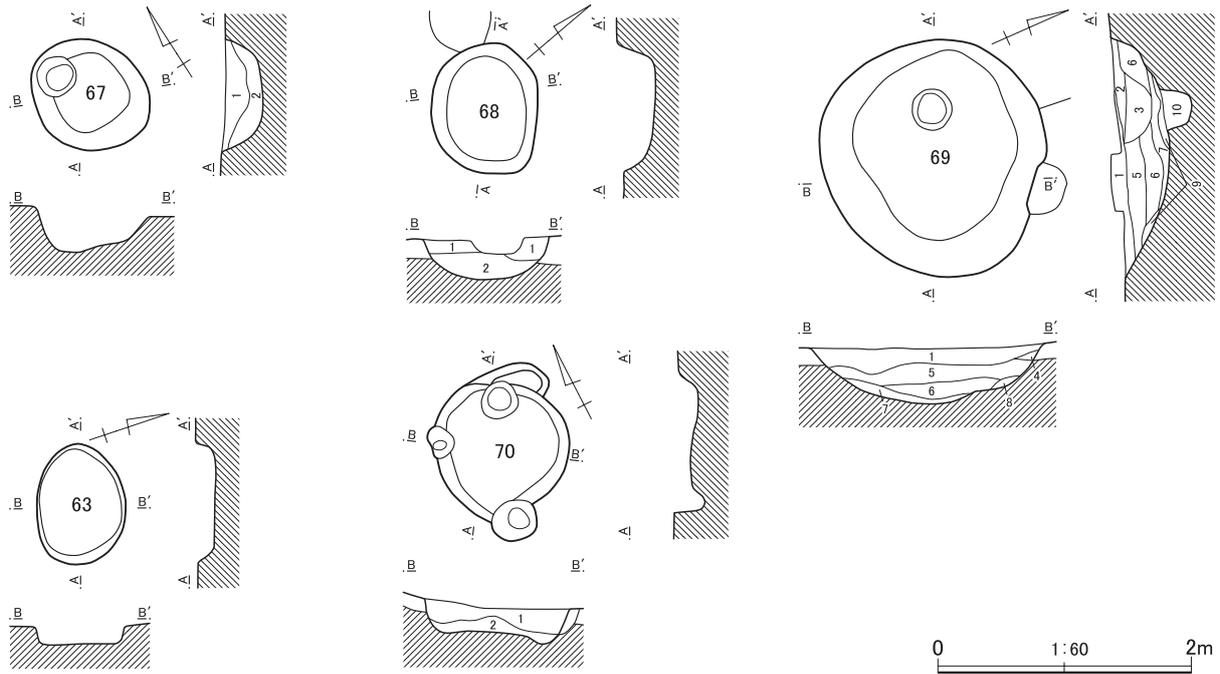
第49号土坑（第58図）

I区の調査区南側の東壁際に位置し、南側には第48号土坑が近接している。土坑の東側半分は調査区外のため、遺構の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形か楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、南北方向が125cm、東西方向が32cmまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは、25cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、不明である。



第58図 土坑 (1)



第59図 土坑（2）

第48・49号土坑土層説明

<第48号土坑>

第1層：茶褐色土層（ローム粒子を少量、浅間山系B軽石を極微量含む。しまりを有するが、粘性はやや弱い。）

第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロック、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

<第49号土坑>

第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子、炭化物粒を微量含む、黒褐色土を若干混入する。しまり、粘性共に有する。）

第4層：茶褐色土層（ローム粒子を少量、ローム小ブロック、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第50号土坑土層説明

第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子を多量に、ローム小ブロック、炭化物粒を少量含む、ローム風化土を混入する。しまり、粘性共に有する。）

第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性共に有する。）

第51号土坑土層説明

第1層：明褐色土層（しまり、粘性強い。径1～3mm程度のローム粒子及び焼土粒子を含む。）

第2層：明褐色土層（しまり、粘性強い。径1～3mm程度の焼土及び炭化粒子を若干、ローム粒子を多く含む。）

第52号土坑土層説明

第1層：明褐色土層（しまり、粘性強い。径1mm程度のローム粒子と白色粒子を若干含む。）

第2層：明褐色土層（しまり、粘性強い。径10～30mm程度のロームブロックを含む。）

第53号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm以下の白色粒子を含む。）

第2層：明褐色土層（しまり、粘性あり。径1～10mm程度のローム粒子を多く含む。）

第55号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（しまり、粘性強い。径10～30mm程度のローム粒子及びブロックを含む。）

第2層：明黄褐色土層（しまり、粘性強い。壁である。ハードローム風化土。）

第3層：明褐色土層（しまり、粘性強い。径10mm以下のローム粒子を若干含む。）

第4層：明黄褐色土層（しまり、粘性強い。径1～5mm程度のローム粒子を非常に多く含む。）

第5層：黒褐色土層（しまり、粘性強い。径1mm程度のローム粒子を含む。やや有機質多い層である。）

第56号土坑土層説明

- 第1層：明褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm以下のローム粒子、白色粒子、炭化物粒を含む。）
- 第2層：明褐色土層（しまり、粘性あり。径10～50mm程度のロームブロック、径1～5mm程度の炭化物を多く含む。）
- 第3層：明黄褐色土層（しまり、粘性あり。径10～30mm程度のローム粒子を多く含む。）
- 第4層：記載なし。

第59号土坑土層説明

- 第1層：明褐色土層（しまり、粘性あり。下層部はロームが多い。）
- 第2層：明褐色土層（第1層に類似する。径1～3mm程度のローム粒子がやや多い。）

第60号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm程度のローム粒子、白色粒子を含む。）
- 第2層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径10～20mm程度のローム粒子を多く含む。）
- 第3層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1～5mm程度のローム粒子をやや多く含む。）
- 第4層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1～10mm程度のローム粒子を含む。）
- 第5層：明黄褐色土層（しまり、粘性あり。ローム質を主体。）

第61号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm以下の白色粒子を含む。）
- 第2層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm程度のローム粒、炭化物粒を含む。）
- 第3層：明褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm以下のローム粒を多く含み、若干の径1mm程度の炭化粒子を含む。）
- 第4層：明褐色土層（しまり、粘性あり。径10～50mm程度のロームブロックを多く含む。）
- 第5層：明褐色土層（しまり、粘性あり。径10mm程度のローム粒と径1mm以下のローム粒子を多く含む。）
- 第6層：明褐色土層（しまり、粘性あり。径1～5mm程度のローム粒を多く含む。）

第62号土坑土層説明

- 第1層：褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子を微量含み、黒褐色土をブロック状に混入する。しまり、粘性共に有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを少量、白色粒子を微量含む。しまり強く、粘性を有する。）
- 第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子、焼土小ブロック、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性共に有するがやや弱い。）
- 第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性共に有するがやや弱い。）

第64号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを多量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第2層：暗灰褐色土層（灰白色粘土の風化土を主体とし、ロームブロックを少量混入する。しまり、粘性共に有する。）
- 第3層：明褐色土層（ローム粒子、ローム小ブロックを少量、灰白色粘土ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子、ロームブロックを均一に含み、黒褐色土を斑点状に若干混入する。しまり強く、粘性を有する。）
- 第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを主体とし、黒褐色土を少量混入する。しまり、粘性共に強い。）
- 第6層：暗灰褐色土層（組成は第2層に類似するが、色調が褐色味が強く、しまり、粘性共より強い。）
- 第7層：暗白褐色土層（白褐色粘土のブロックを主体とし、ロームブロックを若干混入する。しまりを有し、粘性は強い。）

第65号土坑土層説明

- 第1層：黒褐色土層（しまり、粘性若干あり。浅間山系A軽石を少量、径5～30mm程度のローム粒を多く含む。）

第66号土坑土層説明

- 第1層：黒褐色土層（しまり、粘性あり。径10～30mm程度のロームブロックを多く含む。）
- 第2層：黒褐色土層（しまり、粘性あり。径1mm程度のローム粒子を多く含む。）

第67号土坑土層説明

- 第1層：明黒褐色土層（ローム粒子を少量、灰白色粘土ブロックを微量含む。しまり、粘性共に強い。）
- 第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子、灰白色粘土ブロックを均一に、炭化物粒を極微量含む。しまり、粘性共に強い。）

第68号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（白色粒子を少量、炭化物粒を微量含み、灰褐色粘質土をブロック状に混入する。しまり、粘性共に有する。）
- 第2層：暗茶褐色土層（白色粒子を少量、焼土粒子、炭化物粒、灰褐色粘土ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）

第69号土坑土層説明

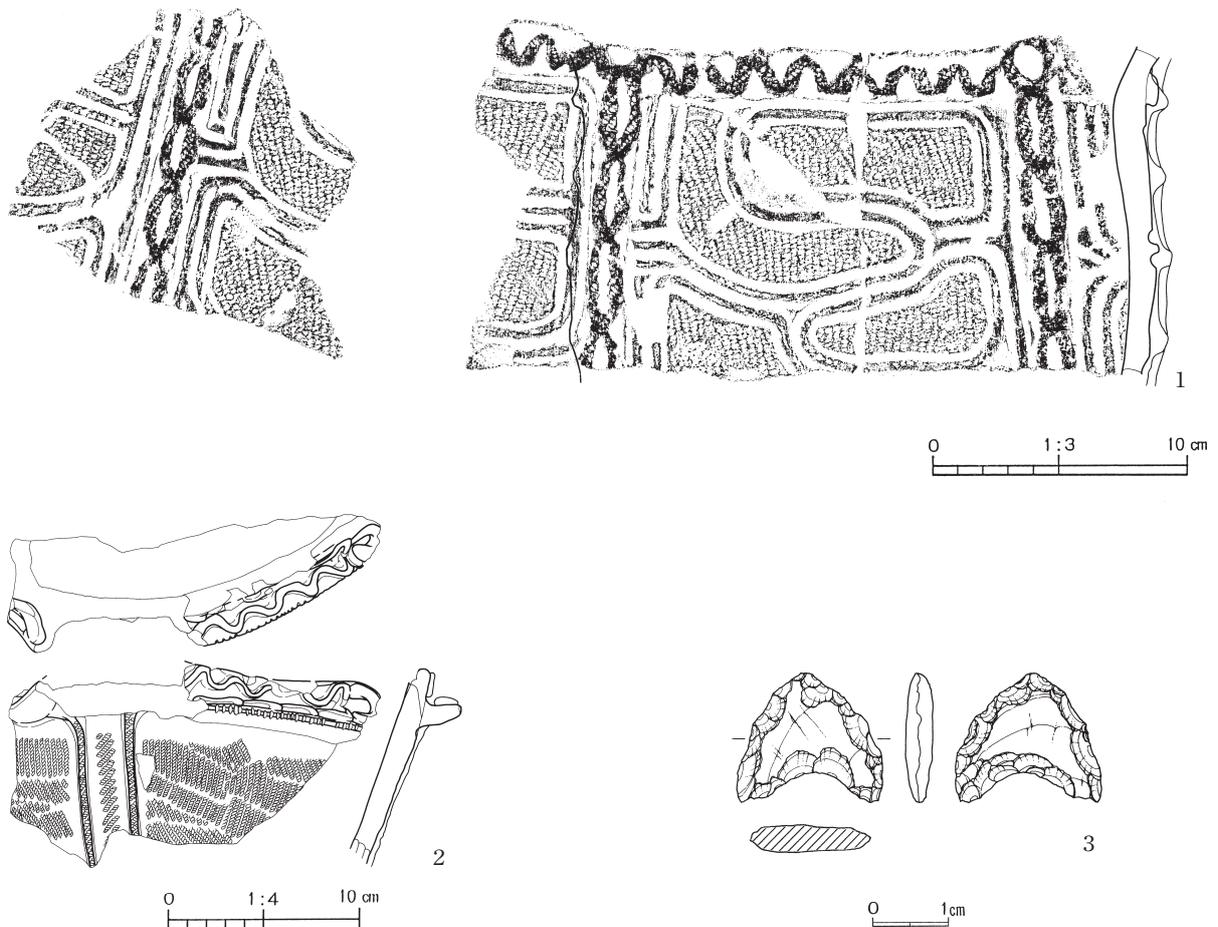
- 第1層：明黒褐色土層（ローム粒子、白色粒子を微量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第2層：暗褐色土層（灰褐色粘土ブロックを多量に、炭化物粒、白色粒子を微量含む。しまりを有し粘性は強い。）
- 第3層：暗茶褐色土層（灰褐色粘土、灰白色粘土のブロックを均一に、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に強い。）
- 第4層：暗茶褐色土層（灰白色粘土ブロックを均一に、白色粒子、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に強い。）
- 第5層：暗茶褐色土層（白色粒子、灰褐色粘土ブロック、灰白色粘土ブロックを少量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第6層：明黒褐色土層（白色粒子、焼土粒子、炭化物粒を少量、灰褐色粘土ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。）
- 第7層：暗灰褐色土層（灰白色粘土小ブロック、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に強い。）
- 第8層：暗茶褐色土層（炭化物を微量含み、灰白色粘土を混入する。しまり、粘性共に強い。）
- 第9層：暗白褐色粘土層（炭化物粒を微量含み、重金属の錆を混入する。しまり、粘性共に強い。）
- 第10層：茶褐色土層（炭化物粒を微量含み、灰白色粘質土を若干混入する。しまり強く、粘性を有する。）

第70号土坑土層説明

- 第1層：黒褐色土層（白色粒子を少量均一に、炭化物粒、灰白色粘土小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に強い。）
- 第2層：暗灰褐色土層（白色粒子、炭化物粒を少量含み、灰褐色粘質土を混入する。しまり、粘性共に強い。）

第50号土坑（第58図、図版9）

Ⅱ区の調査区中央部に位置し、東側には第62号土坑が、南側には第55号土坑が近接している。平面形は、円形に近い形態を呈している。規模は、南北方向132cm、東西方向が116cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは16cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、覆土中から縄文時代中期の東北地方大木8 a 式の系譜を引く土器片と、片岩製の石鏃が出土している（第60図）。



第60図 第50号土坑出土遺物

本土坑の時期は、出土土器から見て、縄文時代中期の加曽利E 1式前半段階と考えられる。

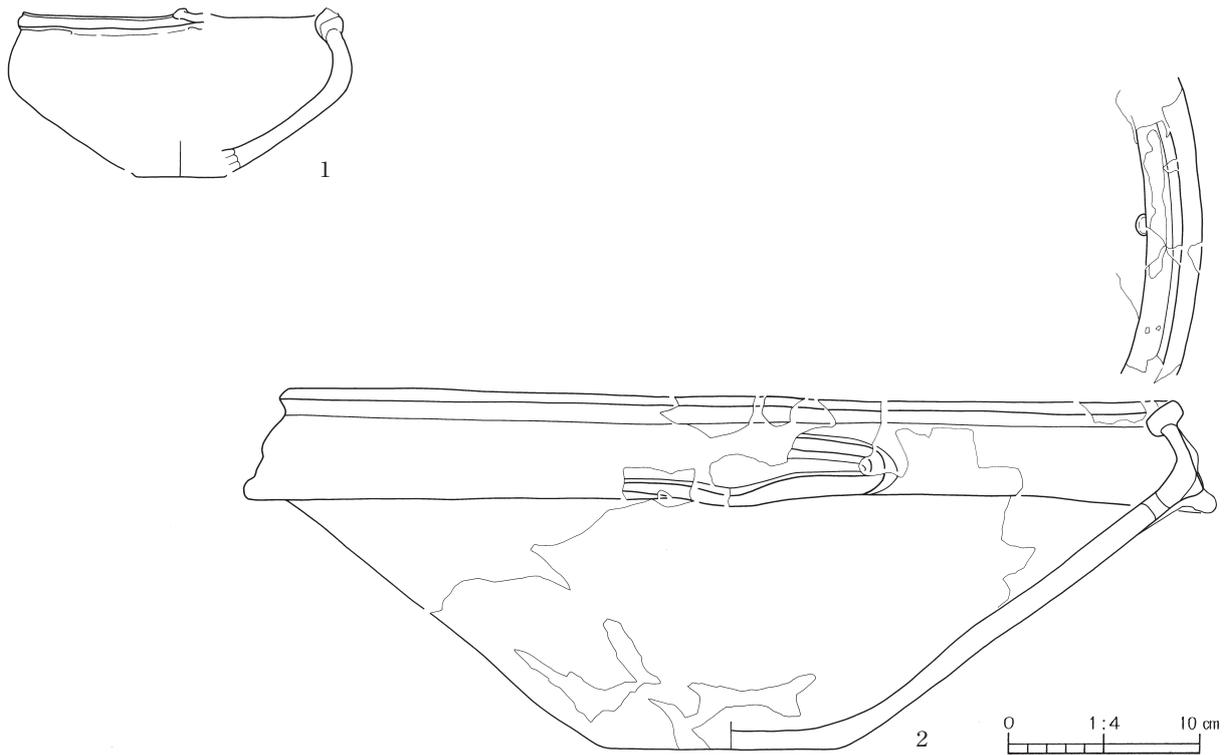
第50号土坑出土遺物観察表

1	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 鎖状隆帯による懸垂文で胴部区画。区画内に3条1対の沈線で文様施文。地文に単節縄文LRを斜位施文。内面ミガキ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外-にぶい橙色。F. 胴部片。H. 底面付近。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に貼付文とキザミをもつ横位隆帯区画。胴部に2条1対の懸垂文。地文に単節縄文RLを縦位、横位施文。内面ミガキ。D. 角閃石、チャート、白色粒。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 胴部片。H. 覆土中。
3	石鏃	A. 全長1.7、幅1.9、厚さ0.3、重さ1.17g。C. 剥片を素材とし、周縁に両面加工を施す。D. 結晶片岩。F. 完形。G. 凹基。H. 覆土中。

第51号土坑（第58図、図版9）

Ⅲ区の調査区中央部に位置し、南側に第2a号住居跡が、東側に第52号土坑が近接している。平面形は、円形に近い形態を呈している。規模は、南北方向150cm、東西方向が148cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、覆土中から縄文時代中期の加曽利E 1式の大形と小形の浅鉢が出土している。

本土坑の時期は、出土土器から縄文時代中期の加曽利E 1式前半段階と考えられる。



第61図 第51号土坑出土遺物

第51号土坑出土遺物観察表

1	浅鉢	A. 口縁部径(16.6)、残存高8.7、底部径(5.9)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に小突起を貼付。内外面ともにミガキ。D. 片岩粒、長石。E. 内外-橙色。F. 1/4。H. 覆土中。
2	浅鉢	A. 口縁部径(47.5)、器高18.7、底部径(13.7)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に隆起線文。口唇部に赤彩痕跡。補修孔あり。内外面ともにミガキ。D. 角閃石、片岩粒、黒色粒。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 1/6。H. 覆土中。

第52号土坑（第58図 図版9）

Ⅲ区の調査区中央部に位置し、東側には第54号土坑が、西側には第51号土坑が近接している。平面形は、円形に近い形態を呈している。規模は、南北方向が115cm、東西方向が130cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。本土坑の時期は、不明である。

第53号土坑（第58図 図版10）

Ⅲ区の調査区中央部に位置し、北側には第52号土坑が、西側には第2 a号住居跡が近接している。平面形は、楕円形に近い形態を呈している。規模は、北西～南東方向が110cm、南西～北東方向が76cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、不明である。

第54号土坑（第58図 図版10）

Ⅲ区の調査区中央部に位置し、東側には第52号土坑が近接している。本土坑の北側は長沖14号墳の周溝に切られており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。平面形は、残存する部分から推測すると、円形か楕円形に近い形態と思われる。規模は、東西方向が120cm、南北方向132cmまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度である。底面は広く平坦で、北側が一段深くなっている。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、不明である。

第55号土坑（第58図 図版10）

Ⅱ区の調査区中央部に位置し、重複する第1 a号住居跡を切っている。平面形は、隅丸長方形に近い形態を呈している。規模は、南北方向が94cm、東西方向が80cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは48cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、不明である。

第56号土坑（第58図 図版10）

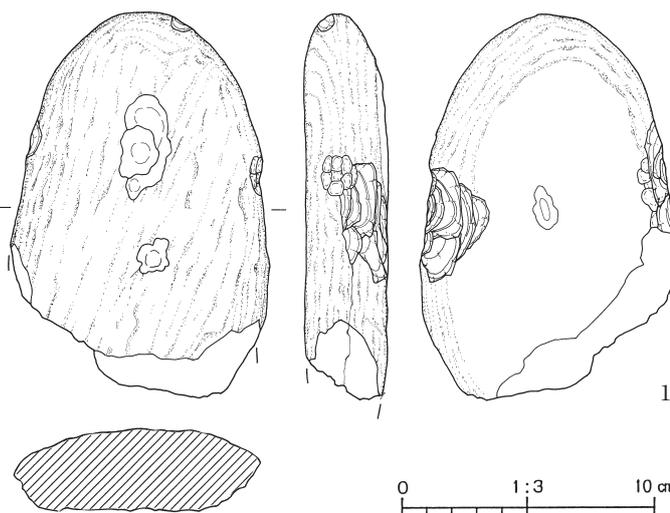
Ⅱ区の調査区南側に位置する。重複する第1 a・1 b号住居跡は不明である。平面形は、コーナー部が丸みを持ち、東西両側の壁がやや張る隅丸長方形ぎみの形態を呈している。規模は、東西方向が108cm、南北方向が72cmを測る。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。底面は、広く平坦で段を有する。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、不明である。

第57号土坑（第58図 図版10）

Ⅱ区の調査区南端に位置し、重複する第1 a号住居跡を切っている。北側には第58号土坑と第61号土坑が、東側には第56号土坑が近接している。平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形ぎみの

形態を呈している。規模は、南北方向が62cm、東西方向が42cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cmある。土坑北側の覆土中には、長さ10cm～20cmの礫が5個～6個集石されている。これらの礫には、焼けて部分的に赤色化しているものや、表面に煤のような黒色付着物が見られるものがあり、土坑の中で火を焚いていたことが窺える。遺物は、集石内から表裏面に凹穴をもつ結晶片岩の凹石が1個出土しただけである。



第62図 第57号土坑出土遺物

本土坑の時期は、土坑の性格が集石土坑と考えられることや出土遺物から、縄文時代中期と考えられる。

第57号土坑出土遺物観察表

1	凹石	A. 残存長 15.25、残存幅 10.3、残存厚 3.5、重さ 720.9 g。C. 下部欠損。凹穴が表面に2穴、裏面に1穴みられる。裏面には平坦面にやや摩耗痕がある。両側面には敲打痕とみられる剥離痕がある。D. 結晶片岩。F. 2/3。H. 覆土中。
---	----	---

第58号土坑（第58図、図版10）

Ⅱ区の調査区南側に位置し、重複する第1b号住居跡を切っている。平面形は、円形に近い形態を呈している。規模は、南北方向が74cm、東西方向が78cmを測る。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは55cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、不明である。

第59号土坑（第58図）

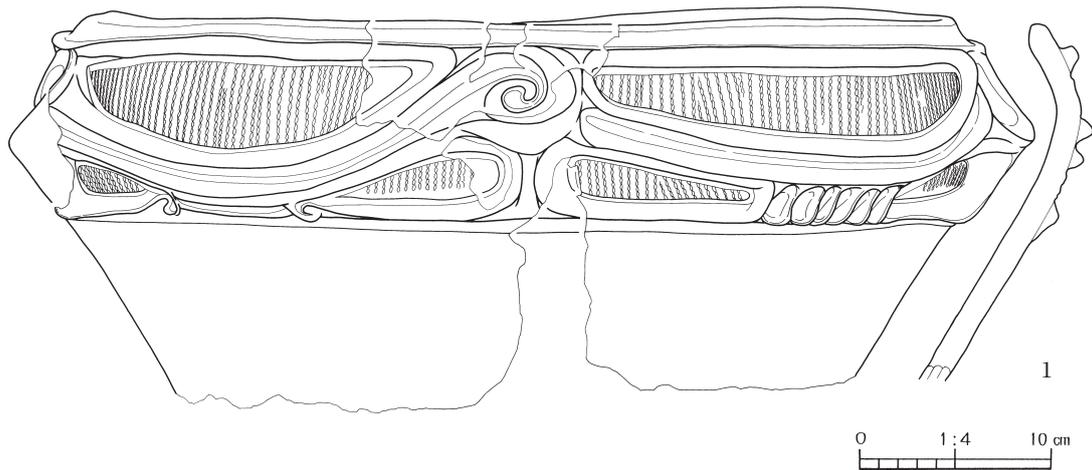
Ⅲ区の調査区中央部の南側寄りに位置する。平面形は、不整形円形を呈している。規模は、南北方向が95cm、東西方向が105cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、不明である。

第60号土坑（第58図、図版10）

Ⅲ区の調査区中央部の西側寄りに位置し、重複する第2a号住居跡に切られている。平面形は、円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が122cm、東西方向が138cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。底面は、広く平坦で、中央部に70cm×60cmの楕円形を呈する土器埋設用の穴が掘られている。この穴は、土坑が10cm程度埋まってから掘り込まれており、その中に胴部下半を粘土紐積み上げの部分で水平に欠いた加曾利E1式後半段階の大形の深鉢形土器（第63図No1）を、口縁部を土坑底面に密着させて逆位に埋設している。

本土坑の時期は、埋設土器の時期から、縄文時代中期の加曾利E1式後半段階と考えられる。



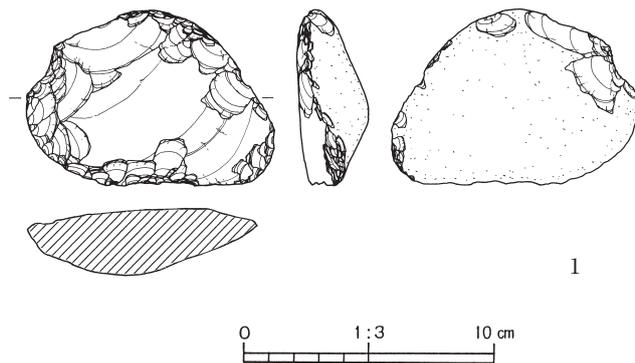
第63図 第60号土坑出土遺物

第60号土坑出土遺物観察表

1	深鉢	A. 口縁部径 44.5、残存高 21.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に隆帯区画。4 単位の渦巻文。区画内に無節縄文 1 の擦糸文を縦位施文。内面ミガキ。D. 片岩粒、白色粒、黑色粒。E. 内外 - 橙色。F. 1/4。H. 底面。
---	----	--

第61号土坑 (第58図、図版10)

Ⅱ区の調査区南側に位置する。重複する第1 a号住居跡との新旧関係は不明である。平面形は、不整形を呈する。規模は、南北方向が94cm東西方向が75cmを測る。壁は、やや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは42cmある。底面は、広く平坦で、北端に底面からの深さが5 cm程度の浅い小ピットを伴う。遺物は、覆土中から縄文時代中期と思われる両面加工石器が1点出土している。



第64図 第61号土坑出土遺物

本土坑の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代中期と考えられる。

第61号土坑出土遺物観察表

1	両面加工石器	A. 全長 7.0、幅 9.7、厚さ 2.8、重さ 188.07 g。C. 礫皮をもつ剥片を素材とし、素材腹面を主体的として周縁に両面加工を施す。D. 黒色頁岩。F. 完形。H. 覆土中。
---	--------	--

第62号土坑 (第58図)

Ⅱ区の調査区中央部東端に位置する。北側には長沖14号墳の周溝跡が、西側には第50号土坑が、南側には第1 b号住居跡が近接している。土坑の東側は調査区外のため、遺構の詳細は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みを持つ長方形か方形を呈するものと思われる。規模は、南北方向が158cm、東西方向は46cmまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cm程度ある。底面は、広く平坦であるが、やや緩やかな凹凸がある。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、不明である。

第63号土坑（第59図）

Ⅳ区の調査区南側に位置し、重複する長沖15号墳の周溝跡を切っている。西側には第67・68・70号土坑が、南側には第69号土坑が近接している。平面形は、楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、東西方向が96cm、南北方向が72cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cm程度ある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、古墳時代後期以降と考えられる。

第64号土坑（第58図）

Ⅳ区の調査区中央部西側寄りに位置し、重複する長沖15号墳の周溝跡を切っている。平面形は、やや不整な隅丸長方形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が180cm、東西方向が67cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは55cm程度ある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、古墳時代後期以降と考えられる。

第65号土坑（第58図）

Ⅳ区の調査区中央部に位置し、重複する長沖15号墳の周溝跡を切っている。平面形は、やや不整な隅丸長方形ぎみの形態を呈しているが、西端部削平が強く及んでいるため明確ではない。規模は、北東～南西方向が205cm、北西～南東方向が80cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは42cm程度ある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、古墳時代後期以降と考えられる。

第66号土坑（第58図）

Ⅳ区の調査区中央部の西側寄りに位置し、重複する長沖15号墳の周溝跡を切っている。平面形は、コーナー部が丸みを持つ東西両側の壁が張る隅丸長方形ぎみの形態を呈している。規模は、北東～南西方向が236cm、北西～南東方向が104cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは50cm程度ある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、古墳時代後期以降と考えられる。

第67号土坑（第59図）

Ⅳ区の調査区南側に位置し、重複する長沖15号墳の周溝跡を切っている。平面形は、楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が100cm、東西方向が87cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは35cm程度ある。底面は、広く平坦で、北端に小ピットを伴う。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、古墳時代後期以降と考えられる。

第68号土坑（第59図）

Ⅳ区の調査区南側に位置し、重複する長沖15号墳の周溝跡を切っている。平面形は、楕円形ぎみの

形態を呈している。規模は、北西～南東方向が105cm、北東～南西方向が85cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cm程度ある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、古墳時代後期以降と考えられる。

第69号土坑（第59図）

Ⅳ区の調査区南側に位置し、重複する長沖15号墳の周溝跡を切っている。平面形は、やや不整の円形を呈している。規模は、南北方向が100cm、東西方向が90cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは43cm程度ある。底面は、広くやや丸みを持つ。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、古墳時代後期以降と考えられる。

第70号土坑（第59図）

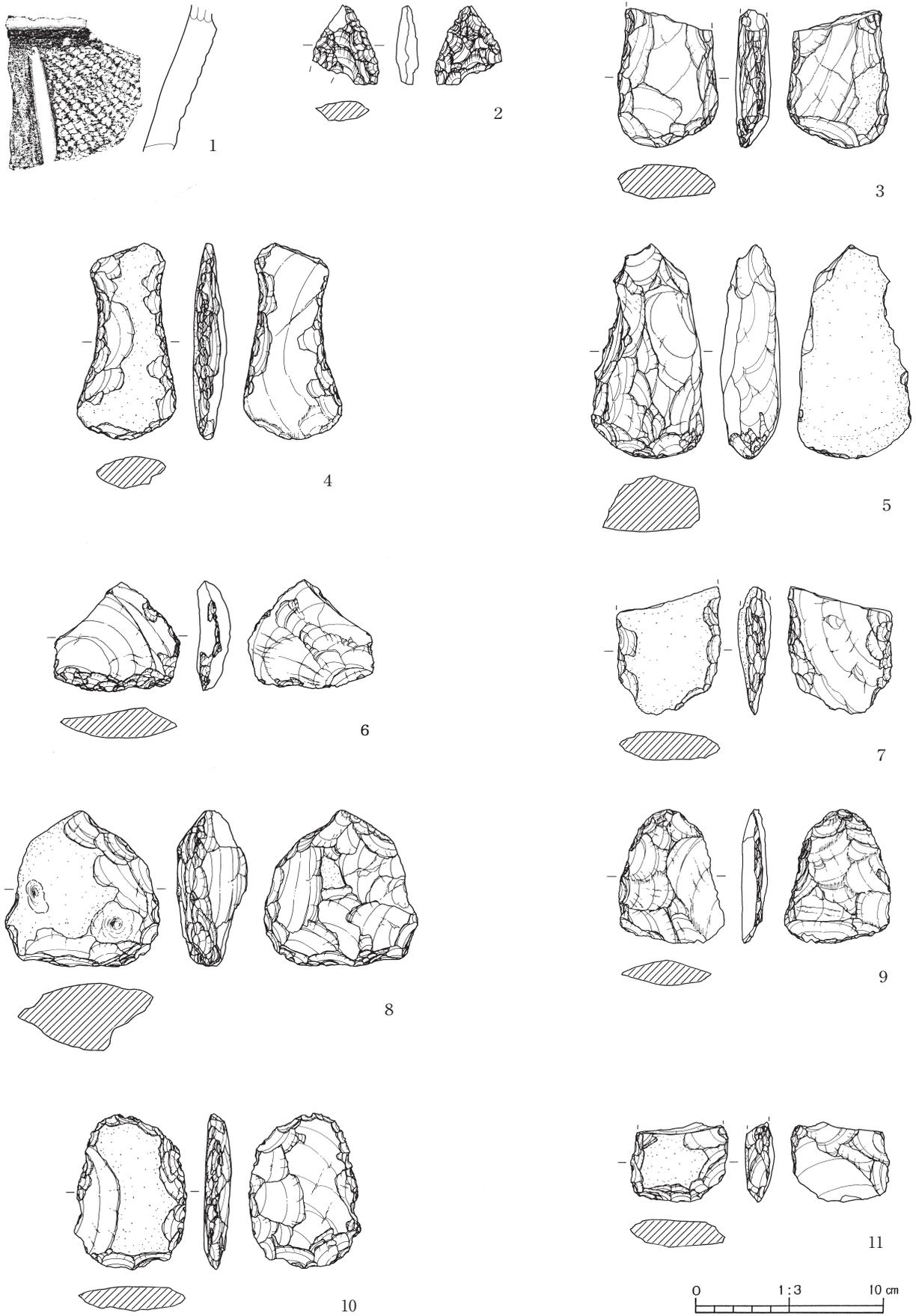
Ⅳ区の調査区南側に位置し、重複する長沖15号墳の周溝跡を切っている。平面形は、円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が105cm、東西方向が108cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cm程度ある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土坑の時期は、古墳時代後期以降と考えられる。

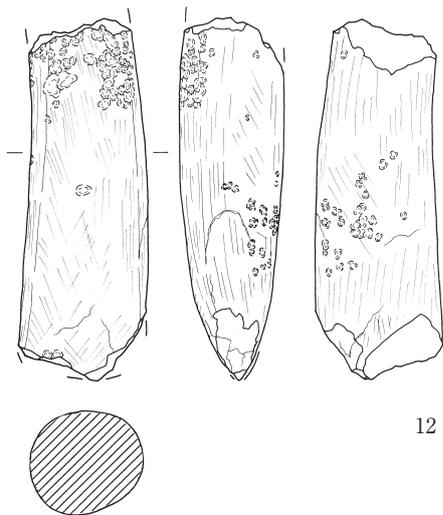
第4節 調査区内出土遺物

調査区内出土遺物観察表

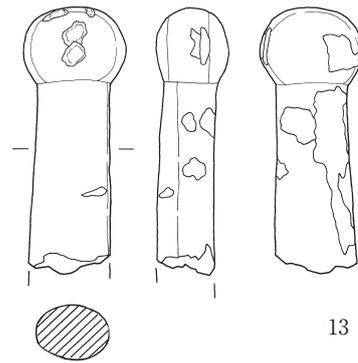
1	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部に隆帯による下端区画。胴部に垂下文を施し、垂下文内磨消。地文は単節縄文RLを横位施文。D. 角閃石、片岩粒、チャート。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 胴部片。G. 加曾利E3式。H. Ⅲ区。
2	石 鏃	A. 全長1.4、幅1.1、厚さ0.4、重さ0.45g。C. 剥片を素材とし、周縁に両面加工を施す。D. 黒曜石。F. 脚部欠損。G. 凹基。H. 調査区内。
3	打製石斧	A. 残存長7.4、幅5.3、厚さ1.8、重さ97.34g。C. 礫皮をもつ剥片を素材とし、周縁に両面加工を施す。D. ホルンフェルス。F. 欠損。H. 調査区内。
4	打製石斧	A. 全長10.4、幅5.1、厚さ1.7、重さ94.66g。C. 礫皮をもつ剥片を素材とし、周縁に両面加工を施す。D. 硬質砂岩。F. 完形。G. 撥形。裏面の下縁に磨耗痕がみられる。H. V区。
5	片面加工石	A. 全長11.4、幅5.9、厚さ3.2、重さ249.16g。C. 礫皮をもつ剥片を素材とし、素材腹面を主体として周縁に加工を施す。D. 黒色頁岩。F. 完形。G. 撥形。裏面の下縁に二次加工が若干見られるが表面側の加工が主体的である。H. V区。
6	スクレイパー	A. 全長5.8、幅6.6、厚さ2.4、重さ55.55g。C. 礫皮をもつ剥片を素材とし、素材打面側を主体的に二次加工を施す。D. 頁岩。F. 完形。H. V区。
7	両面加工石	A. 残存長6.7、幅5.4、厚さ1.7、重さ66.92g。C. 礫皮をもつ剥片を素材とし、側縁に両面加工を施す。D. ホルンフェルス。F. 欠損。H. I区14号墳周溝覆土。
8	両面加工石	A. 全長8.3、幅8.1、厚さ3.7、重さ245.75g。C. 凹石を転用して、周縁に両面加工を施す。D. 結晶片岩。F. 完形。G. 石器表面は著しく風化している。凹石を転用したと推測される。H. V区。
9	両面加工石	A. 全長7.1、幅5.5、厚さ1.3、重さ51.33g。C. 剥片を素材とし、周縁に両面加工を施す。D. 黒色頁岩。F. ほぼ完形。G. 篋状。全体的に稜が磨耗している。H. V区。
10	両面加工石	A. 全長8.3、幅5.9、厚さ1.4、重さ81.89g。C. 礫皮をもつ剥片を素材とし、周縁に両面加工を施す。D. 黒色頁岩。F. 完形。H. I区。
11	両面加工石	A. 残存長4.2、幅5.1、厚さ1.5、重さ42.04g。C. 礫皮をもつ剥片を素材とし、周縁に両面加工を施す。D. ホルンフェルス。F. 欠損。H. V区。
12	磨製石斧	A. 残存長14.3、残存幅5.15、残存厚4.1、重さ484.3g。C. やや反身。敲打調整後、研磨による仕上げ。D. 緑泥岩類。F. ほぼ完形。G. 基部、刃部欠損。やや反身。H. V区。
13	石 棒	A. 残存長10.65、残存幅4.1、残存厚2.9、重さ167.8g。C. 敲打・研磨による成形。D. 緑泥片岩。F. 2/3。G. 欠損品。短頭カ。H. V区。
14	石 皿 石 台	A. 残存長19.0、残存幅29.0、残存厚6.6、重さ4.41g。D. 結晶片岩。F. 1/4。G. 欠損品。被熱痕あり。表面には5穴の凹穴があり、全体に磨耗痕が顕著である。H. V区。
15	石 皿 多 孔 石	A. 残存長17.05、残存幅14.45、残存厚4.9、重さ1454.8g。D. 緑泥片岩。F. 1/2。G. 欠損品。皿面は浅く窪む。裏面は7穴の凹穴があり、部分的に磨耗している。H. V区。



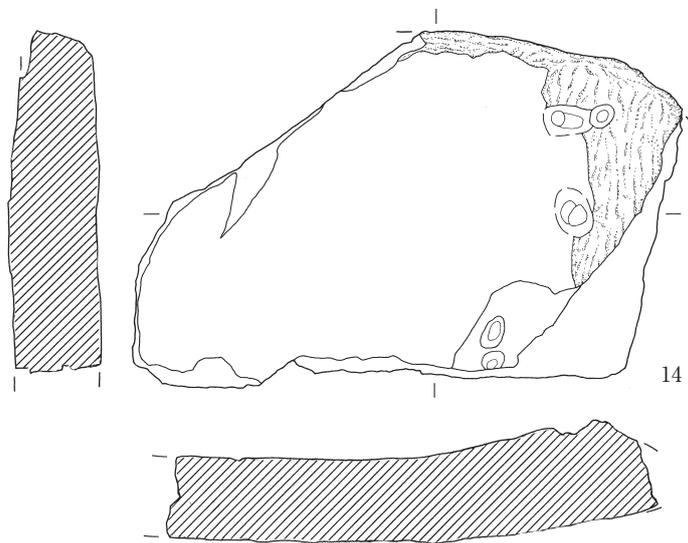
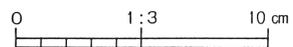
第65図 調査区内出土遺物（1）



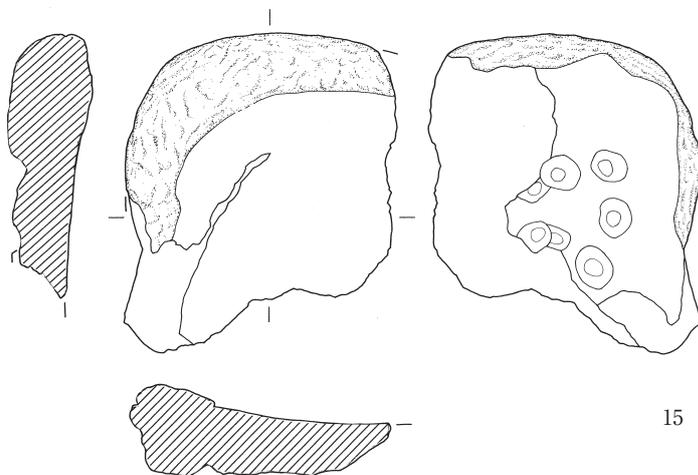
12



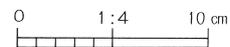
13



14



15



第66図 調査区内出土遺物 (2)

第V章 ま と め

長沖古墳群の金屋南地区C地点の調査では、昭和51年度に第1次調査区で調査した長沖14号墳と長沖15号墳の周溝の西側延長部分が検出され、地膨れ状の盛り上がりや地籍図等から古墳の存在が推測されていた長沖40号墳は、控積みをもつ模様積みの両袖型横穴式石室と、墳丘を二重に巡る葺石と石室入口前の前庭部が残存していた。

長沖14号墳は、今回の調査によって周溝内径28mの規模をもつ円墳の可能性が高いことがわかった。埴輪は、第1次調査の時から中期後半の1段目タテハケ・2段目にB種ヨコハケ調整をもつ無黒斑の円筒埴輪を伴うことで注目されていたが、今回新たにやや大形の1段目以上にB種ヨコハケ調整をもつ赤彩された野焼き風の円筒埴輪が明確に伴い、盾形の可能性が考えられる形象埴輪の破片も出土するなど、本古墳の埴輪の様相も単純ではなく、やや複雑な様相を呈することが明らかになってきた。

長沖15号墳は、今回の調査によって周溝内径19.40mの円墳であることが明らかになり、トレンチAとBが交差する部分の墳丘中央部で検出された集石遺構が、本古墳の主体部に関係するものであれば、本古墳の主体部は時期的に袖無型横穴式石室であった可能性も推測される。埴輪は、円筒埴輪と形象埴輪が出土している。円筒埴輪は、周溝内から多く出土しているが、その場所に偏りはなくである。いずれも2条凸帯3段構成の底部未調整のもので、形態的には、1段目がやや長く底部に向かってあまり窄まらないものと、1段目がやや短く底部に向かって窄まるものの2形態が見られる。透孔は、第1次調査では半円形のものがあった古相を呈することで注目されたが、今回の調査で出土した円筒埴輪の透孔はすべて円形である。半円形の透孔は、本古墳では極少数と言ってよいだろう。形象埴輪は、本古墳の周溝部分と推測されるV区の北西側と、Bトレンチ内に集中している。いずれも小破片で全体の形状が分かるものはないが、人物・馬・盾・鞆などが見られる。

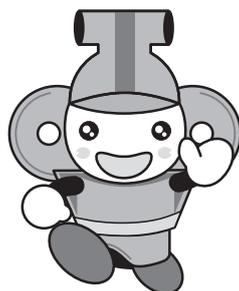
長沖40号墳は、主体部が模様積みの両袖型胴張横穴式石室で、埴輪を伴わない墳丘直径が約14mの円墳である。墳丘の削平が著しいため、石室も墳丘もその平面形態が分かる程度であったが、墳丘を二重に巡る葺石の検出は、長沖古墳群の調査では初めてであり、注目される。この墳丘を二重に巡る葺石は、当地方でも墳丘を伴う古墳の調査が比較的多く行われている、神流川右岸の神川町青柳古墳群でいくつか検出されている(田村1996、田村・金子1994、1997)。それによると、横穴式石室を主体部にもつ円墳の墳丘平面形の中心が、時期的に古いとされる「奥壁中心型」(永井2005)の円墳では、第1葺石と第2葺石の平面形が同心円で間隔がほぼ均一であるのに対して、時期的に新しいとされる「玄室内中心型」の円墳では、本古墳と同じく第1葺石と第2葺石の平面形が同心円ではなく、石室入口の前庭部側に比べてその反対側の間隔が狭くなっているものや、葺石の平面形が正円ではなく歪んでいるものが多く見られる。墳丘の中心を石室の奥壁から内側の玄室内に設定する要因は、「中心が奥壁に近ければその分、葺石の径が長くなり墳丘の規模が大きくなる。言い換えれば、限られた墳丘規模の中で石室を大きくするためには中心を奥壁より内側に設定する必要があった」(田村1997)とされ、第1葺石と第2葺石の中心をずらす手法も、前庭部の発達によって墳丘規模を拡大させないためであったと思われる。なお、小山川(旧身馴川)左岸の長沖古墳群と神流川右岸の青柳古墳群では、葺石の積み方や使用石材の形状に若干相違が見られる。大規模な神流川の河川敷採取地をもつ青柳古墳群の古墳は、各部位の使用石材も大きく、葺石も厚みのある大きめの角状の石を、石の小口面にこ

だわらないで、石の平坦面を揃えて墳丘に貼り付けるように重ねている。これに対して、小規模な小山川の河川敷採取地をもつ長沖古墳群の古墳は、使用石材は概して小さく、葺石は石室内壁面の模様積みに使用されている扁平で棒状の片岩と同様の形状ではあるが、それよりは若干小形のものを、小口面を揃えて丁寧に積み上げている。これは、それぞれの石材採取地である小山川と神流川の河川規模による河川敷の石材量の差に起因するものであろうが、特に長沖古墳群の古墳では、石室の壁面・棺床面・控積み・葺石・羨道部閉塞石・石室裏込め基底面の充填石など、その部位によって使用石材の形状が明確に異なっており、採取した石材を形状によって厳密に分別することにより、神流川に比べてあまり豊富とは言えない小山川の共同用益地として割り当てられた採取地の石材を、無駄なく有効に活用しようとしていたのではないかと思われる。仮に、長沖古墳群と青柳古墳群の同規模・同形態の横穴式石室をもつ古墳を比較した場合、古墳築造に使用した石材の総重量は青柳古墳群の古墳の方が圧倒的に重く、使用した石材の総数量は長沖古墳群の古墳の方が圧倒的に多いであろう。

<参考文献>

- 大熊 季広 (2003) 『長沖古墳群Ⅳ 一第42号墳の調査一』 児玉町文化財調査報告書第37集
 (2004) 『長沖古墳群Ⅴ 一飯玉地区E地点の調査一』 児玉町文化財調査報告書第38集
- 大谷 徹 (1999) 『長沖古墳群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第224集
- 大場 磐雄 (1931) 「埴輪三件」『考古學雑誌』第21巻第2号 考古學會
- 金井塚良一 (1976) 「北武蔵の古墳群と渡来氏族吉士氏の動向」『北武蔵考古学資料図鑑』 校倉書房
- 恋河内昭彦 (2008) 『長沖古墳群Ⅷ 一久保地区C地点の調査一』 本庄市遺跡調査会報告書第21集
 (2011) 『長沖古墳群Ⅸ 一長沖172号墳・長沖173号墳・長沖30号墳の調査一』 本庄市埋蔵文化財調査報告書24集
- 恋河内昭彦・大熊季広 (2006) 『長沖古墳群Ⅵ 一第32号墳の調査一』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第2集
- 後藤 守一 (1931) 「埴輪家の研究(二)」『人類學雑誌』第46巻第12号 東京人類學會
- 埼玉県教育委員会 (1983) 「815 金屋南集落跡」『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧Ⅴ』 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第12集
- 塩野 博 (2004) 『埼玉の古墳[児玉]』 さきたま出版会
- 鈴木徳雄・尾内俊彦 (2007) 『長沖古墳群Ⅶ 一久保地区B地点の調査一』 本庄市遺跡調査会報告書第14集
- 鈴木徳雄・和久拓照 (2011) 『長沖古墳群Ⅹ 一飯玉地区B地点の調査一』 本庄市遺跡調査会報告書第41集
- 菅谷浩之他 (1980) 『長沖古墳群』 児玉町文化財調査報告書第1集
- 田中 広明 (1990) 「庚申塚古墳の横穴式石室 一模様積石室と石材の供給(予察)一」『秋山古墳群』 児玉町史資料調査報告古代第2集
- 田村 誠 (1996) 『青柳古墳群 四軒在家支群』 神川町教育委員会文化財調査報告第13集
 (1997) 「まとめ」『青柳古墳群 城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷戸・二ノ宮支群』 神川町教育委員会文化財調査報告第16集
- 田村 誠・金子彰男 (1994) 『庚申塚遺跡・愛染遺跡・安保氏館跡・諏訪ノ木古墳』 神川町教育委員会文化財調査報告第11集
 (1997) 『青柳古墳群 城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷戸・二ノ宮支群』 神川町教育委員会文化財調査報告第16集
- 徳山寿樹・大熊季広・西田親史 (2002) 『長沖古墳群Ⅲ 一村後地区・飯玉地区(C・D地点)』 児玉町文化財調査報告書第36集
- 永井 智教 (2005) 「宮内古墳群の提起する問題」『脊戸谷遺跡 一宮内古墳群の調査一』 児玉町遺跡調査会報告書第19集
- 向出 博之 (2010) 『金屋南遺跡』 本庄市遺跡調査会報告書第32集

写真図版



本庄市マスコット

はにぽん



長沖14号墳Ⅱ・Ⅲ区周溝跡（南より）



長沖14号墳Ⅰ区周溝跡



長沖14号墳Ⅱ区周溝跡



長沖14号墳Ⅲ区周溝跡（西より）



長沖14号墳Ⅲ区周溝跡（東より）



長沖15号墳Ⅳ区周溝跡（南より）



長沖15号墳Ⅳ区周溝跡（北より）



長沖15号墳Aトレンチ



長沖15号墳Bトレンチ



長沖15号墳Bトレンチ内集石遺構



長沖15号墳溝内土坑A・B



長沖15号墳溝内土坑C



長沖15号墳溝内土坑C遺物出土状態



長沖15号墳溝内土坑D



長沖15号墳溝内土坑D土層断面



長沖40号墳（真上から）



長沖40号墳（南から）

図版 5



長沖40号墳墳丘第1・第2葺石（西側）



長沖40号墳墳丘第1葺石（西側）



長沖40号墳石室控積み（西側）



長沖40号墳石室控積み（東側）



長沖40号墳石室前庭部



長沖40号墳石室羨門閉塞状況



長沖40号墳石室棺床面（南から）



長沖40号墳石室羨道部（東から）



長沖40号墳石室棺床面



長沖40号墳石室（棺床面除去後）



長沖40号墳石室基底面



長沖40号墳石室西側側壁



長沖40号墳石室東側側壁



長沖40号墳石室内耳環出土状態



長沖40号墳石室内吊金具出土状態



長沖40号墳石室内鉄鍬出土状態



長沖40号墳石室内ガラス小玉出土状態



長沖40号墳石室内骨片出土状態



長沖40号墳石室内歯片出土状態



長沖40号墳石室前庭部須恵器・靱尻金具出土状態



長沖40号墳石室前庭部鉄鍬出土状態



第1 a・1 b・1 c号住居跡



第1 a・1 b・1 c号住居跡遺物出土状態



第2 a号住居跡



第2 a号住居跡炉



第2 a号住居跡埋甕



第2 b号住居跡



第3号住居跡炉



第4号住居跡炉

图版 9



第 5 号住居跡



第 6 号住居跡炉



第 7 号住居跡



第 8 号住居跡炉



第 48 号土坑



第 50 号土坑



第 51 号土坑



第 52 号土坑



第53号土坑



第54号土坑



第55号土坑



第56号土坑



第57号土坑



第58号土坑



第60号土坑



第61号土坑



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18

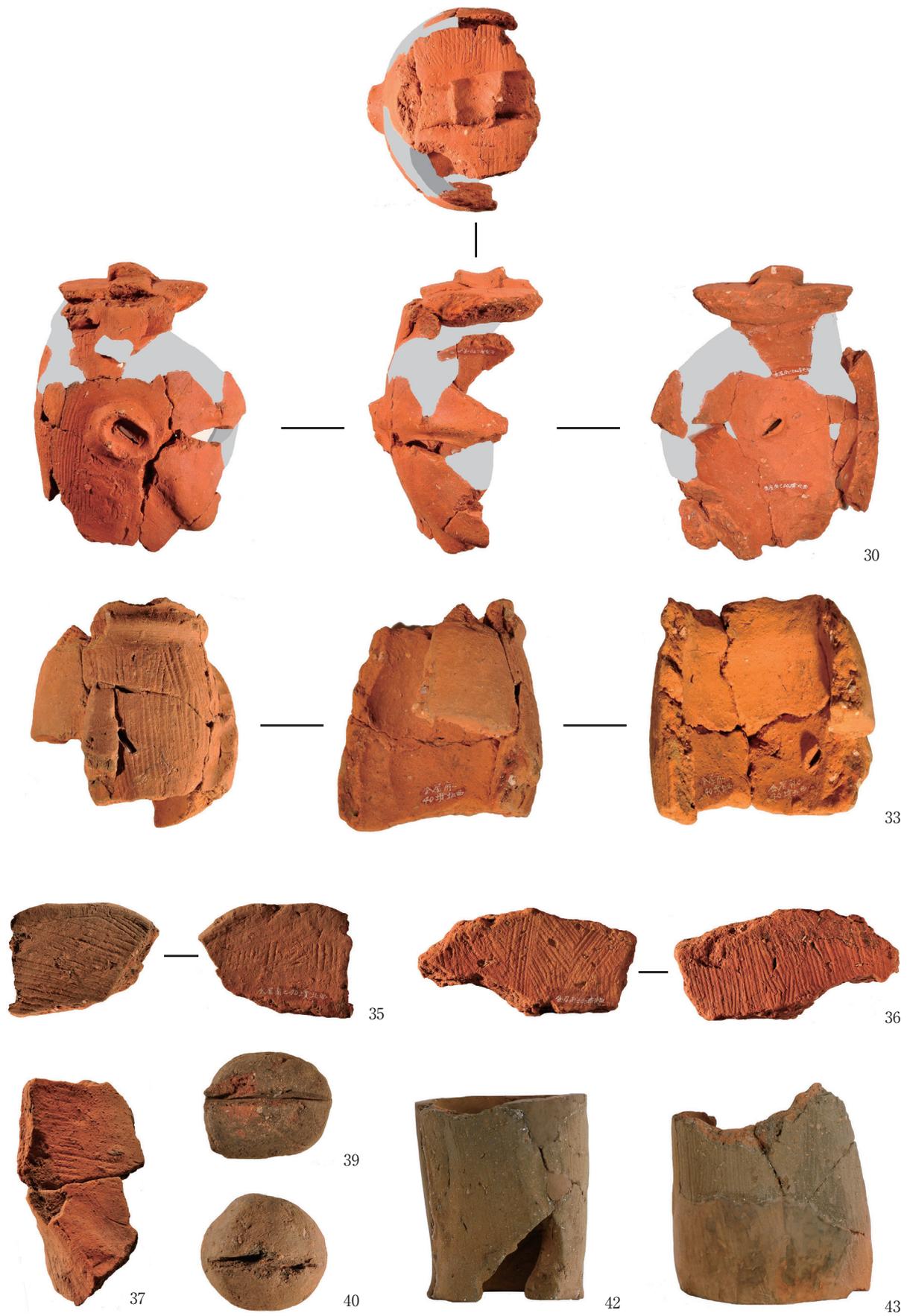
長沖14号墳出土遺物



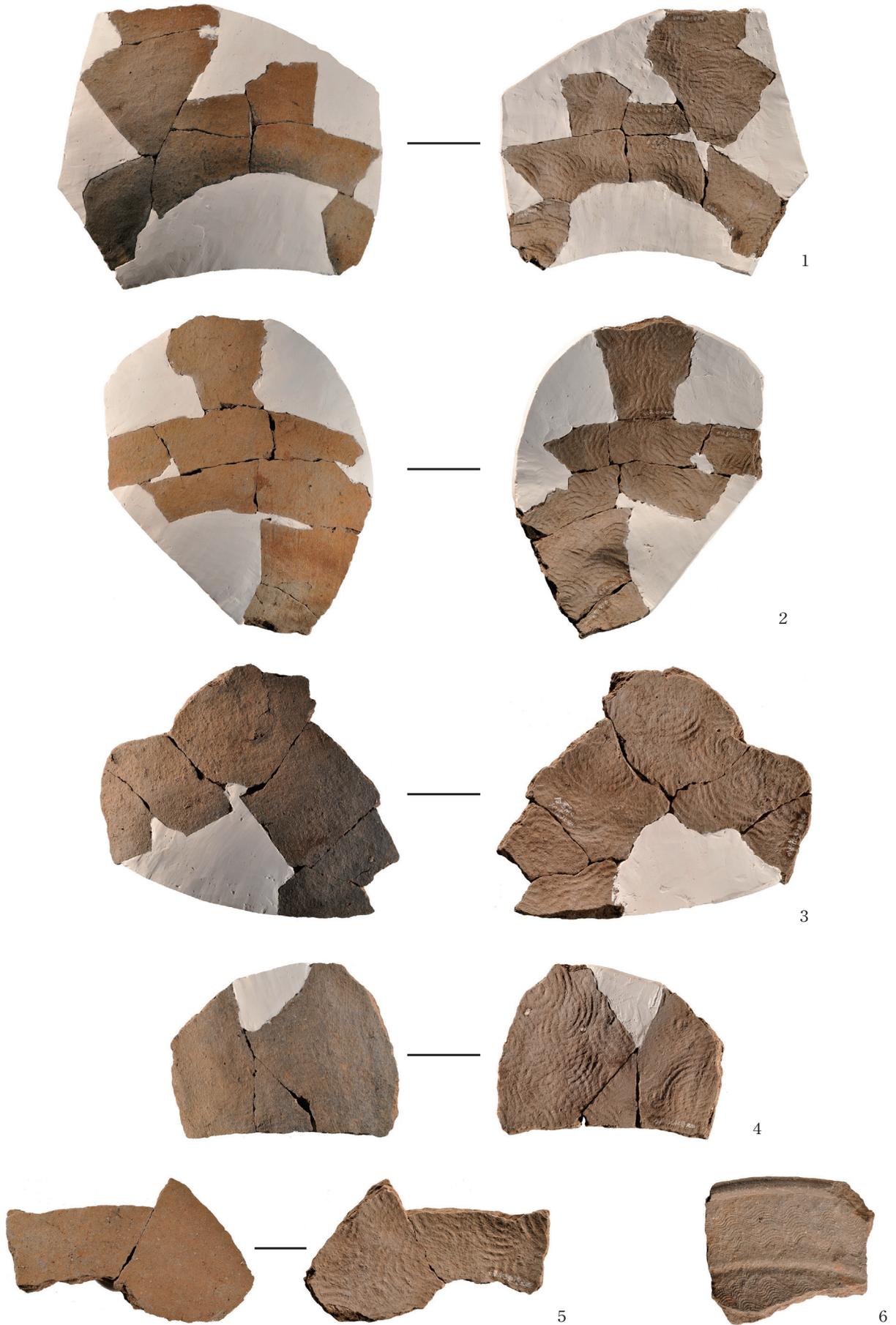
長沖15号墳出土遺物 (1)



長沖15号墳出土遺物 (2)



長沖15号墳出土遺物（3）



長沖15号墳出土須恵器

図版 16



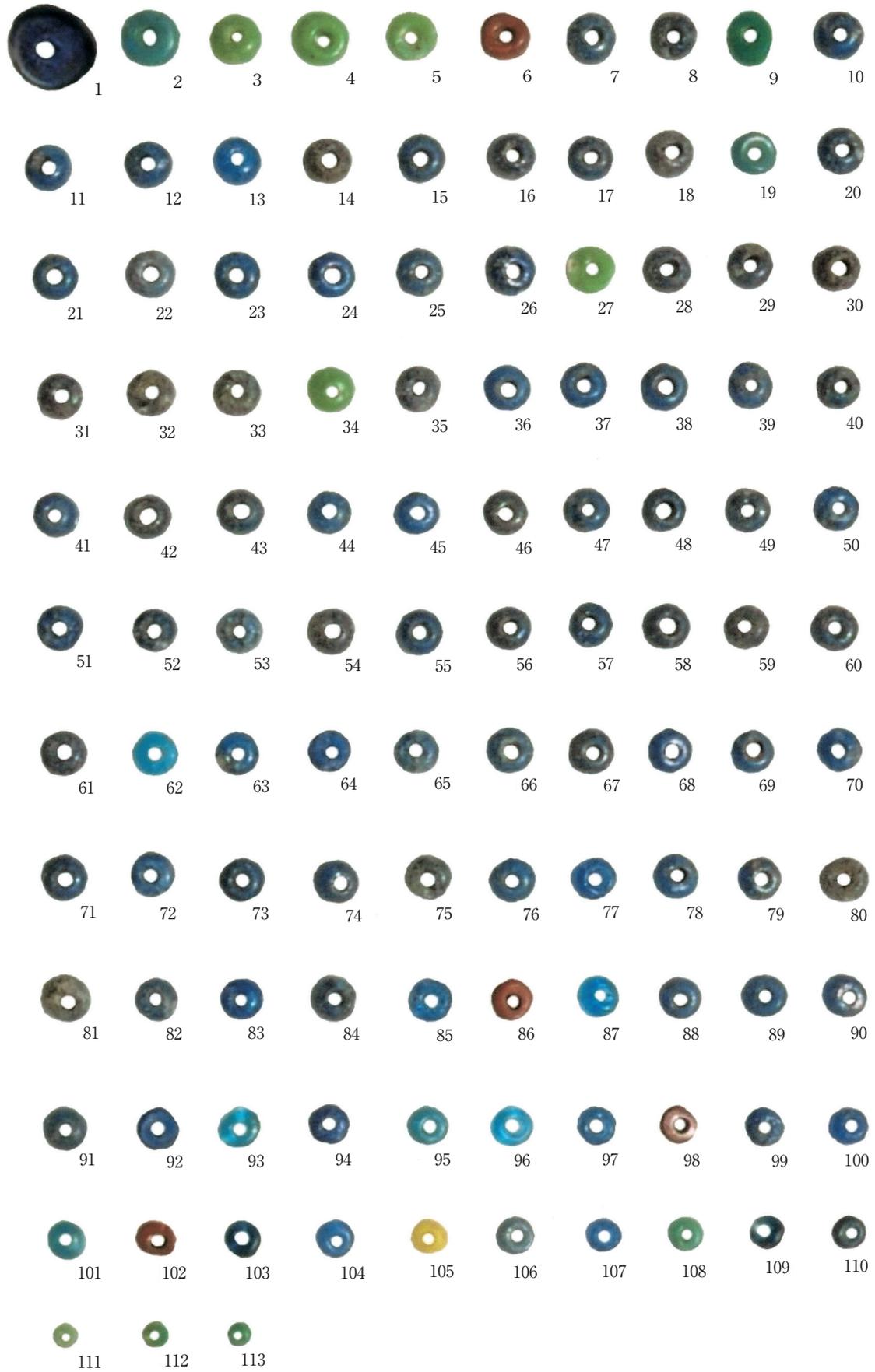
墳丘周辺出土「文久永宝(波銭)」

長沖40号墳出土金属製品



長沖40号墳出土須恵器

図版 17



長沖40号墳石室内出土ガラス小玉



1 住 1



1 b 住 2



1 b 住 3



1 b 住 4



1 住 5



1 b 住 6



1 b 住 7



2 a 住 1



2 a 住 2



2 b 住 3



2 a 住 4



2 b 住 5



2 a 住 6



2 a 住 7



3 住 1



4 住 1



3 住 4



3 住 2



4 住 2



3 住 3



4 住 3



6 住 1



6 住 2



7 住 1



7 住 2



8 住 1



50 土坑 1



50 土坑 2



48 土坑 1



51 土坑 2



51 土坑 1



60 土坑 1

図版 20



1 住 8



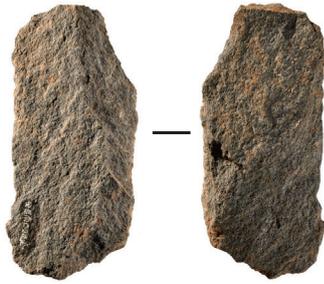
1 a 住 9



1 a 住 10



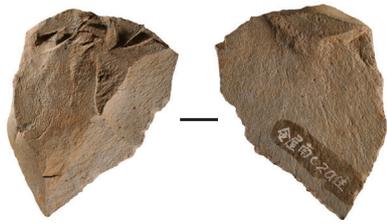
1 a 住 11



2 a 住 8



2 a 住 9



2 a 住 10



2 a 住 11



2 a 住 12



2 a 住 13



2 a 住 14



3 住 5



3 住 6



3 住 7



3 住 8



4住4



50土坑3



57土坑1



61土坑1



調査区2



調査区3



調査区4



調査区5



調査区6



調査区7



調査区11



調査区9



調査区10



調査区12



調査区13



調査区14



調査区15

報 告 書 抄 録

フリガナ	ナガオキコフングンⅪ —ナガオキ 14 ゴウフン・ナガオキ 15 ゴウフン・ナガオキ 40 ゴウフン・カナヤミナミイセキCチテンノチョウサ—							
書名	長沖古墳群Ⅺ —長沖 14 号墳・長沖 15 号墳・長沖 40 号墳・金屋南遺跡C地点の調査—							
副書名	児玉南土地区画整理事業発掘調査報告書 3							
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書				巻次	第 27 集		
編著者	恋河内昭彦							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒 367-8501 埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番 3 号				TEL 0495-25-1185			
発行日	西暦 2012 年（平成 24 年）2 月 29 日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査 面積	調査 原因
なが おき こ ふん ぐん 群 Ⅺ 長 沖 古 墳 群 Ⅺ かな や みな み ち 地 区 C 地 点	ほんじょうしこだまちょうかなや 本庄市児玉町金屋 あざみなみ ばんち 字南 55 番地 1・4	112119	54-300	36° 10' 59"	139° 7' 46"	20050426 ～ 20060120	約 860 m ²	区画 整理
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物			特記事項	
長沖古墳群 金屋南地区 C 地点	集落	縄文時代 中 期	竪穴住居 10 土坑 6	縄文土器（勝坂 3 式～加曾利 E 3 式）、 石器（石鏃、打製石斧、磨製石斧、凹石、 石皿、石棒）				
	古墳	古墳時代 中・後期	古墳 1 古墳周溝 2	埴輪（円筒、形象）、須恵器（提瓶、甕）、 鉄鏃、刀装具（吊金具、鞘尻金具）、耳環、 ガラス小玉				
		古墳時代 後期以降	土坑 17 溝 2	古銭「文久永宝（波銭）」				

本庄市埋蔵文化財調査報告書第27集

長 沖 古 墳 群 XI

—長沖14号墳・長沖15号墳・長沖40号墳・金屋南遺跡C地点の調査—

児玉南土地区画整理事業発掘調査報告3

平成24年 2月27日 印刷

平成24年 2月29日 発行

発行／本庄市教育委員会

埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

印刷／山進社印刷株式会社

埼玉県本庄市本庄3丁目3番36号